学びを実感し、主体的に学ぶ児童生徒の育成

～ICT を有効に活用した授業づくり～

令和４年度　研究紀要　第４３集

小学部４年　生活単元学習
「わくわくたんけんたい
～りんごジュースかこうじょへいこう～」

中学部２年　生活単元学習
「増田の内蔵　ひ・み・つ　発見！②」

高等部２年　職業科
「働く人の生活④～職業生活に必要な力とは～」

秋田県立横手支援学校

令和４年度　研究紀要「第４３集」発刊

はじめに

校長　　阿部　純一

本校では、現在、地域資源を活用し、地域を学びの場として学習活動に積極的に取り入れ、地域と協働して学習を展開しています。障害のある児童生徒は、実際の体験をとおして学ぶことが有効であり、本校ではこれを「横手が舞台」と呼び、学んだことを地域社会で確実に使える力となるよう教育活動の柱として位置づけ取り組んでいます。

昨年度まで全校研究として「地域資源を活用した学習の単元づくり～思いを伝え、人と関わる力の育成に注目して～」を掲げ、２か年の研究を進めてきました。また、昨年度から秋田県教育委員会より「e－ＡＫＩＴＡ　ＩＣＴ学び推進プラン事業」のＩＣＴ活用推進モデル校として２か年の指定を受け、教師がＩＣＴを授業活用することや児童生徒個々の情報活用能力の育成に努めてきました。

今年度は、研究主題を新たに「学びを実感し、主体的に学ぶ児童生徒の育成～ＩＣＴを有効に活用した授業づくり～」とし、過年度の研究の成果を反映させながら、単元構成や授業展開など授業づくりの基礎・基本を重視しました。また、ＩＣＴ活用推進モデル校として、授業づくりの研究にＩＣＴ活用研究を合わせて行うことで、児童生徒の学ぶことへの意欲や関心を高め、より主体的に学びに向かう児童生徒を育成できることを確信して研究を進めてきました。

12 月には、昨年度は新型コロナウイルス感染症の拡大のため中止となりました公開研究会を開催しました。新たな試みとして、従来の集合型の対面公開ではなく事前録画配信による授業提示と Zoom を用いた Web 会議により、コロナ禍でも開催できる公開研究会を提案することができました。分科会では、県内特別支援学校でＩＣＴ授業活用の中心的な役割を担っている教員から今後のＩＣＴの有効活用への貴重な意見を聞くことができました。各校からの御協力に改めて感謝申し上げます。また、２年間にわたり県教育庁特別支援教育課指導班の皆様には、何度も学校に足をお運びいただき、研究内容及び授業づくりへの御指導を賜りました。ありがとうございました。

しかしながら、掲げた研究主題にどれだけ迫ることができたかについては十分とは言えず、反省点もありますので、本研究紀要をご高覧いただき、忌憚のない御意見・御指導をいただければ幸いです。

最後に、皆様からいただきました御提言等を今後の授業づくりに生かし、職員一丸となって研鑽に励みますことをお誓いして、発刊の御挨拶といたします。

令和４年３月

目 次

はじめに　校長　阿部　純一

第一部　全体研究　1

第二部　各学部の実践
Ⅰ　小学部の実践　7
Ⅱ　中学部の実践　22
Ⅲ　高等部の実践　37
Ⅳ　有効な ICT 活用に向けての取組　45

第三部　研究の成果と課題　52

第四部　公開研究会の実践　55

あとがき　教頭　阿部　裕子

研究に携わった職員

〈第一部〉

全体研究

令和４年度　全校研究

１　研究主題

学びを実感し、主体的に学ぶ児童生徒の育成～ＩＣＴを有効に活用した授業づくり～

２　研究主題の設定の理由

本校では、これまで主体的に活動する姿を目指した授業づくりや主体的・対話的で深い学びの視点を踏まえた授業づくりを全校研究で取り組んできた。これらの研究では、児童生徒が主体的に学習する姿を引き出すポイントや要点がまとめられた。その中で、学びを実感することでより主体的に学習に向かうことができること、児童生徒が自己の学びを実感するためには、児童生徒が「単元全体を見通す」「学習の意味や意義を理解する」ための工夫や「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方」を工夫することが必要であることが明らかになった。

昨年度の研究では、生活単元学習で地域資源を活用した「横手が舞台」の学習において、学んだことや感じたことを「伝える」という活動を通して、各学年・学部段階において目指す資質・能力に迫ることができた。しかし、授業づくりにおいては、「めあて」に対応した「まとめ」の設定、学習を通して児童生徒が何を学んだかを実感する「振り返り」の時間の確保などの課題が挙げられた。一方で、ＩＣＴ活用推進事業の取組において、児童生徒が高い意欲や関心をもってＩＣＴを活用した学習に取り組む姿が多く見られ、ＩＣＴの効果的な活用により前述の課題に迫る実践も見られた。

過年度の研究の成果を反映させながら、単元構成や授業展開など授業づくりの基礎基本を丁寧に押さえた上で、活用意図を明確にしてＩＣＴを活用することで、児童生徒のＩＣＴ機器の活用への高い興味関心を生かして、学ぶことへの意欲や関心を高め、自己の学びを実感し、より主体的に学びに向かう児童生徒を育成することができるものと考えた。

３　研究仮説

ＩＣＴを効果的に活用しながら、「単元全体を見通す」工夫、「学習の意味や意義を理解する」工夫、「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方」の工夫をした授業づくりをしていくことで、自己の学びを実感し、主体的に学ぶ児童生徒を育成することができるであろう。

４　研究の内容と方法

（１）対象の教科等

研究の対象となる教科等は、小・中学部が生活単元学習、高等部が職業科とした。

（２）自己の学びを実感し、主体的に学ぶ姿に迫る授業づくり

共通実践事項として「単元全体を見通す工夫」「学習の意味や意義を理解する工夫」「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫」の三つの視点を設定する。それらの視点を基に、ベースミーティング、単元計画・学習指導案の作成、単元検討会、指導案検討会、授業研究会、改善授業を行う。単元検討会及び指導案検討会において、ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターを活用する。

（３）評価

ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターと管理職が授業研究会に参加し、改善授業において児童生徒の姿、及びＩＣＴ活用を含む手立ての有効性を評価する。

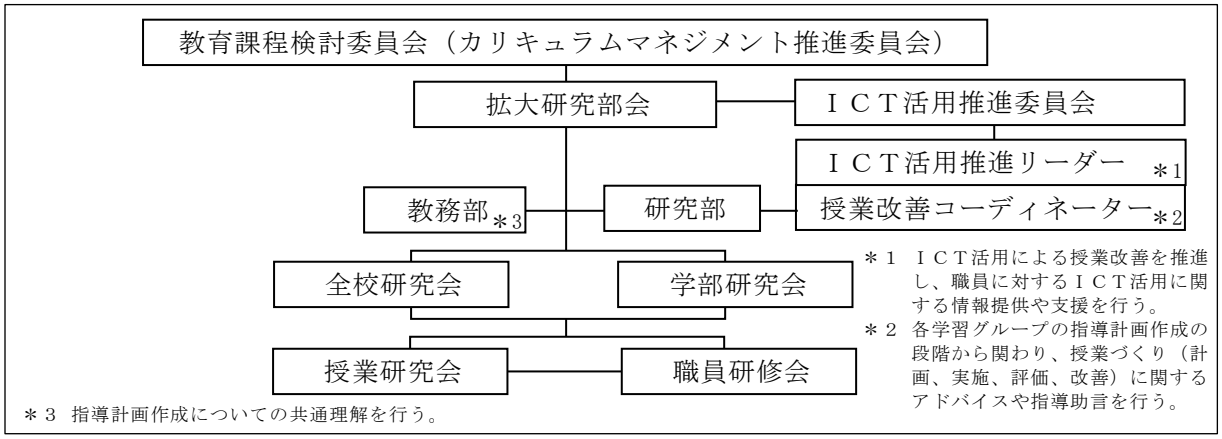
（４）職員研修

共通実践事項の理解や授業実践力の向上、ＩＣＴ活用の質の向上に向け、研修会の実施、有効な実践の共有、日常的なＩＣＴ活用推進リーダーの活用を推進する。

（５）研究計画

月	全　校	学　部
4	・拡大研究部会①（研究の方向性検討） ・全校研究会①（研究概要提案、意見収集）	・学部研究会①（研究内容、方向性の確認）
5	・全校研修会（授業づくりについて）	
6	・指導主事計画訪問 （授業提示：全学年・学習グループ） ・職員研修会（ＩＣＴ活用）	
7		・学部研究会②（学部の進捗状況の確認） ・単元検討会（高３職業２グループ） ・指導案検討会（高３職業２グループ） ・学部授業研究会（高３職業２グループ） ・改善授業（高３職業２グループ）
8	・全校研究会②（研究の進捗状況の確認） ・職員研修会（ＩＣＴ活用）	・単元検討会（小１、小２、小３、小４、小５・６、中１、中２、高１職業１グループ、高２職業２グループ） ・指導案検討会（高１職業１グループ）
9		・指導案検討会（中１、中３） ・学部授業研究会（中１、中３、高１職業１グループ） ・改善授業（中１、中３）
10		・指導案検討会（小１、小２） ・学部授業研究会（小１、小２）
11	・公開研究会事前研究会 （授業提示：小４、中２、高２職業２グループ）	・指導案検討会（小３、小４、小５・６、中２、高２職業２グループ） ・学部授業研究会（小３、小５・６） ・改善授業（小２、小１、小３、小５・６、高１職業１グループ）
12	・公開研究会（授業提示：小４、中２、高２職業２グループ）	・学部研究会③（学部研究の評価）
1	・職員研修会（ＩＣＴ活用）	・学部研究会④（学部研究のまとめ）
2	・全校研究会③（研究の成果と課題の共通理解、次年度の方向性）	
3	・拡大研究部会②（次年度の方向性）	

（６）研究組織



5　研究の実際

（1）自己の学びを実感し、主体的に学ぶ姿に迫る授業づくり

ア　共通実践事項と授業改善の推進

「学びを実感し、主体的に学ぶ姿」のモデルを過年度の研究より図１のように設定し、児童生徒の具体的な姿については、学年部や単元検討会で共通確認を行いながら授業改善を進めた。

小・中学部は全ての学年で、高等部は学年毎に１グループを抽出して、図２の流れで授業改善を行った。

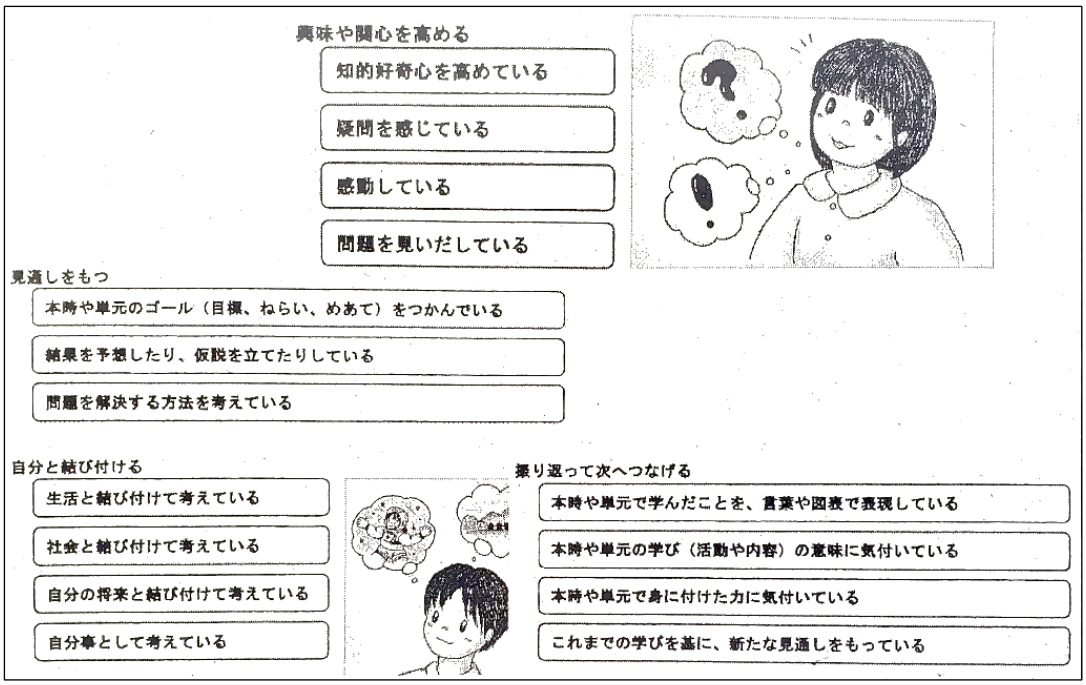


図１　学びを実感し、主体的に学ぶ姿のモデル

ＩＣＴを効果的に活用しながら「単元全体を見通す工夫」「学習の意味や意義を理解する工夫」「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫」の三つの視点での授業改善を全校で推進した。三つの視点の具体は次のとおりである。

（ア）　単元全体を見通す工夫

児童生徒が単元のゴール（単元全体でどんな学習をするのか、単元をとおして何ができるようになるか）や単元のゴールに向けて必要な学習や活動が分かるための工夫

（イ）　学習の意味や意義を理解する工夫

自分にとって学習することが何の意味があるのか、学習をとおしてどんな力が付いたのか、何（誰）のための活動や学びであるのかということが分かり、必要感を感じ、学習後や将来、どんな自分になりたいかという自分の姿を意識できるための工夫

（ウ）　ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫

整合性のとれた「ねらい」（単元（本時）で身に付けたい資質・能力）、「めあて（課題）」（目指すゴールの姿とそれまでの道筋（何をどのようにして））、「まとめ」（本時の課題に対する答えや結論、本時で学んだこと）、「振り返り」（学びの成果や実感、学んだことや意欲、問題意識等を生活や次時につなげるために学びを振り返ること）の設定、提示や展開の工夫

ベースミーティング	・学年部で「学びを実感し、主体的に学ぶ姿」の具体を明確にし、単元目標、単元の構想を練り合い、指導計画を作成

↓

単 元 検 討 会	・単元目標、具体的な支援方針を検討（ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターの活用）

↓

授 業 実 践 授 業 評 価	・授業を行い、授業実践と授業設計を振り返る（児童生徒の姿、手立て）

↓

ベースミーティング	・学年部で授業の構想、具体的な支援方法を練り合い、学習指導案を作成

↓

指導案検討会	・具体的な支援方法を検討（ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターの活用） ※公開研究会の授業については、学部で検討

↓

研 究 授 業 学部授業研究会	・授業実践と授業設計を振り返る（管理職、ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターの参加）

↓

ベースミーティング	・学年部で改善点を整理し、学習指導案を作成

↓

改 善 授 業	・管理職、ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターによる評価 ・単元全体の振り返り（児童生徒の姿、手立て）

図２　授業改善の流れ

イ　「指導計画」と「学習指導案」の作成

学年部のベースミーティングで、単元で育成を目指す資質・能力（単元目標）及び三つの視点で、目標達成に迫るための単元構想とＩＣＴの活用を含めた手立てについて練り合い、単元の「指導計画」を作成した。また、単元検討会を受けて、目標及び具体的な支援方法について練り合いを行い、研究授業の「学習指導案」を作成した。

「指導計画」は「学習指導案」の指導計画に当たるものである。今年度、共通実践事項の三つの視点の工夫を様式の中に取り入れた。また、単元目標に照らして、その実現状況を観点毎に評価するために小単元毎に評価規準を設定することとした。評価規準の設定をとおして、単元目標と各小単元の目標のつながりや妥当性を確認したり、そこに迫る手立てを検討したりし、授業者全員による児童生徒の見取りにつなげた。

図３　指導計画

ウ　単元検討会、指導案検討会

ベースミーティングで作成した「指導計画」を基に、ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターと学部主事、研究部員、授業者で単元全体について検討を行った。

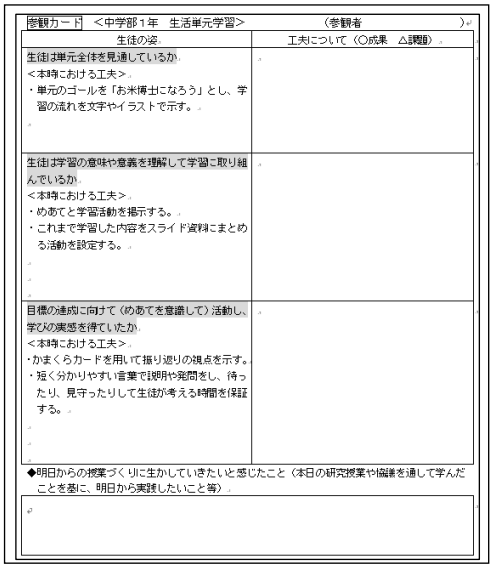
育成を目指す資質・能力の三つの柱で設定された単元目標が、互いに関連し合って達成されるものであるか、また、小単元の構成や学習内容が、単元目標が育成されるために、単元全体を通してバランスよく設定されているか、さらに、児童生徒の学びの実感と主体的な学びを実現するためにＩＣＴを有効に活用する工夫がなされているかなどについて検討した。ここで検討された内容を基に、見直し、修正を行って、授業実践を進めた。

「学習指導案」についても、目標とめあての整合性や児童生徒の目指す姿の実現につながる学習展開や手立ての妥当性について、ＩＣＴ活用推進リーダー兼授業改善コーディネーターや管理職による検討を加えた。

エ　学部授業研究会及び改善授業

授業研究会では、各学部とも毎回、「参観カード」に三つの視点の具体的な工夫を示して、それを基に児童生徒の姿を通して手立てを評価し、改善に向けた協議を行った。児童生徒の姿の見取りを評価につなげられるように、「参観カード」では「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫」を「目標の達成に向けて活動し、学びの実感を得る工夫」として示した。

授業研究会では、三つの視点で協議を行ったが、ねらいやめあてに迫るための学習活動や時間配分、学習展開も話題に上り、授業全体を通じた具体的な改善策が話し合われた。授業後は、研究授業の成果と課題を生かして授業実践を行い、単元の終末等に改善点を明らかにして改善授業を実施し、評価を行った。


参観カード　＜中学部１年　生活単元学習＞　（参観者　　）

生徒の姿	工夫について（○成果　△課題）
生徒は単元全体を見通しているか ＜本時における工夫＞ ・単元のゴールを「お米博士になろう」とし、学習の流れを文字やイラストで示す。	
生徒は学習の意味や意義を理解して学習に取り組んでいるか ＜本時における工夫＞ ・めあてと学習活動を掲示する。 ・これまで学習した内容をスライド資料にまとめる活動を設定する。	
目標の達成に向けて（めあてを意識して）活動し、学びの実感を得ていたか ＜本時における工夫＞ ・かまくらカードを用いて振り返りの視点を示す。 ・短く分かりやすい言葉で説明や発問をし、待ったり、見守ったりして生徒が考える時間を保証する。	

◆明日からの授業づくりに生かしていきたいと感じたこと（本日の研究授業や協議を通して学んだことを基に、明日から実践したいこと等）

図４　参観カード

オ　ＩＣＴ活用推進リーダー及び授業改善コーディネーターの活用

授業改善コーディネーターは、研究の主旨や授業づくりの基礎・基本を踏まえて、全校の授業改善を推進したり助言を行ったりする役割を担っている。今年度はＩＣＴ活用推進リーダーが授業改善コーディネーターを兼任している。担当者は、単元検討会や指導案検討会に参加して、授業づくり全般に関して授業改善につながる助言や情報提供を行いながら、有効なＩＣＴ活用がなされるように、ＩＣＴの活用方法や活用機器等についての助言や他の学習グループにおける成果の伝達や共有を行った。また、各学習グループの目的に応じたＩＣＴ機器等の活用の教示、実際の活用場面でのＩＣＴ機器の準備や活用の示範、補助等を行った。

（２）評価

研究授業において、複数の目で客観的に児童生徒の姿及びＩＣＴ活用の有効性を評価できるように、三つの視点を授業参観の視点として設定するとともに授業研究会で管理職が指導助言を行った。一人一授業、他学部の授業を参観する機会を設定した。他学部参観者も「参観カード」を活用し、視点に沿って評価を行った。また、改善授業に当たっては、学習指導案等に改善点を明確にし、それらを基に評価を行った。

（３）職員研修会

授業づくりの基礎・基本、共通実践事項の内容を全校職員で共通理解するために、授業づくりの基礎・基本について表記して作成した「横手のスタンダード」の内容や過年度の研究成果の確認、授業づくりの講話を実施した。

また、外部講師を招いた講話や職員の要望に対応したミニ研修会など、ＩＣＴの活用技術に関する研修会を開催した。さらに、日常的なＩＣＴ活用の質の向上に向け、ＩＣＴ活用推進委員会との連携を図り、「ＩＣＴ便り」による有効な実践の共有や、研究対象の教科等に限らず様々な学習場面でのＩＣＴ活用についての助言や補助等、ＩＣＴ活用推進リーダーの活用を推進した。

〈第二部〉

各学部の実践

Ⅰ　小学部の実践

１　児童の実態

意思表出においては、表情や発声、身振りで意思を伝えようとする児童から、自分の話したいことや出来事を簡単な言葉で伝えたり、相手とやりとりしたりできる児童まで、幅広い実態の児童が在籍している。

人との関わりに関しては、低学年では、教師とのやりとりを楽しんだり、学級の友達と一緒に活動したりする姿、中学年では、児童同士で関わり合ったり、友達の様子を気に掛けたりして一緒に活動する姿、高学年では、児童同士で声を掛け合い、やりとりを楽しみながら活動する姿が見られる。

自分の経験を言葉や成果物等で教師や友達に伝えようとしたり、学習を通して頑張ったことに満足感をもって発表したりして、次も頑張ろうとする気持ちをもつことができる児童たちである。

２　単元検討会の様子（・は単元全体に関わる検討及び改善事項　○はＩＣＴ活用に関する内容）

１年生	【みんなでさがそう　～あき～】 ・文字を読めない児童も、日常的に目にすることで文字の形が判別できるようになってくるため、本単元で学習する言葉、単語などを目に付くところに掲示する。 ○タブレット型端末で葉っぱやどんぐりの写真を撮ると細かい部分までよく見えるがにおいはしない。児童が、実物と機器活用の両方のよさを分かって、場面や状況に応じて「これを使ってみよう」と選べる素地を養えるとよい。
２年生	【みんなでなかよくでかけよう～ふるさとむらへレッツゴー】 ・何のための校外学習であるかを明確にし、子どもに伝わるように表現する。目的が明確になることで、子どもの期待感や施設利用への関心につながる。 ○ＩＣＴを活用して、校外学習先の何をどのように見せるかについては、子どもたちの実態に照らして、目的に応じて示したい情報を決める。
３年生	【えほんのせかいへようこそ～サンさんぶんこをつくろう～】 ・単元名や単元目標、活動の順番を、児童がこれまで取り組んできた学習と本単元が自然な流れでつながる形に整理することで、活動や目標が結び付くようになる。 ○サンさん文庫コーナーか制作するパンフレットに、二次元バーコードを貼り、タブレット型端末を使ってこれまでに取り組んだ絵本劇の動画を観られるようにする。
４年生	【わくわくたんけんたい～りんごジュースかこうじょへいこう～】 ・工場を見学して分かったことをまとめる活動、知識をみんなで共有することが必要である。それが何を学んでほしいかという内容である。 ・めあてで使われている言葉の意味を教師も児童も共通理解することが大切である。 ○スライドの作成やタブレット端末使用の意図と育てたい力を再整理する。模造紙やビデオ、写真撮影など、ＩＣＴ機器を含む選択肢をいくつか挙げて、自分で使いたい方法を選んで活動を進められるようになるとよいのではないか。
５・６年生	【きらきらかがやき隊～きなこをプレゼントしよう～】 ・いろいろな協力の種類があるので、担任で話し合って、どんな協力の仕方があるかを検討し、児童の実態に合った協力を見付けていく。 ・授業の終わりに児童が「これができた、頑張った」と思うためには授業の初めが大事である。何を頑張るのかをもって取り組んでほしい。またそれが目標になる。児童にできてほしいことが整理できるとよい。

３　各学級の実践

小学部１学年の取組

単元名	みんなでさがそう～あき～

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】

やることが分かって学習活動に向かい、自分で「できた」喜びを感じたり、次も「やりたい」という期待感をもったりしながら、これまでの学びをもとに見通しをもって活動し、生活面でも興味関心の幅を広げていく。

【単元目標】

・木の実、落ち葉などの材料を使い、色や形を楽しみながら制作活動をする。知　技

・秋の草花や虫などに関心をもち、それらを見付けたり、気付いたことを教師や友達に伝えたりする。思判表

・友達の様子を見て今やるべき活動に気付き、作り方をまねたり工夫したりしながら仲良く活動する。学　人

【研究授業の目標】

・選択肢の中から作りたい楽器を選び、見本や友達の作る様子を見てまねたり、どんぐりの個数やひもの長さを工夫したりして、楽しみながら制作遊びをする。知　技　学　人

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ・単元の進み具合やゴールが分かるように、「探す→拾う→作る」と繰り返しの活動にして、文字とイラストで単元計画表を作成し、毎時間全員で活動内容を確認した。 ・授業終了ごとに、単元計画表に授業に関するイラストのシールを貼ったり、花丸を付けたりした。	・自分たちで拾ってきたどんぐりを使って楽器作りをしたことで、本時の大まかな活動内容を理解し、楽しみにしている様子が見られた。 ・単元計画表に、児童が喜んでどんぐりシールを貼ったり、教師が授業の最後に花丸を付けたりしたことで、自分たちの学習がどこまで進んだのかを理解できていた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ○児童の興味関心を引き出すために、パワーポイントを使用して、本時の活動に関する秋の絵本の読み聞かせをした。 ・作る物のイメージをもてるように、見本の写真を提示したり、実物を使って作り方のポイントを絞って説明したりした。 ・「見てまねる」「工夫する」ことができるように、黒板に向かって扇形の座席配置にして、両サイドの友達の様子が見られるようにしたり、机間に教師が座り必要に応じてアドバイスしたりした。	○テレビ画面をとおして、絵本の読み聞かせを見聞きすることで、最後まで自分のいすに着席して読み聞かせを楽しんでいた。 ・見本の写真や教師の言葉掛けなどで、自分の作りたい楽器のイメージをもち、一人一人が楽しみながら作っていた。 ・児童と教師が一対一の場面が多かったことで友達を見て気付いたり、そこから何かを試したりするという場面が少なかった。教師が提示したどんぐりマラカスでは、どんぐりの個数で音の鳴り方が違うことに気付いた児童がいた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・本時の活動に見通しをもてるように、めあてを三つに区切った画用紙に一文字ずつ板書していき、文字を読める児童は一緒に声に出し	・めあてが三つに区切られていたことで、学習内容は「これとこれ」と見通しをもつことができ、文字を読む児童にとっても読みやすく

て読むようにしめあてを確認した。 ○次時のイメージ化のために、学校周辺で収集できる様々な葉っぱを写真やイラストで提示した。	大きな声で読むことができた。 ○葉っぱの写真を興味深く見ており、自分の体験などを交えて落ち葉に関する感想を話す児童もいた。次時への期待感をもつことができ、本時とのつながりを意識できた。

【改善授業の目標】

・落ち葉の色や形に注目し、友達や教師をまねたり、自分で考えたりして、楽しみながら制作遊びをする。知　技　学　人

改善点（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
・友達の様子を見て、考えたり工夫したりできるように、テーブルに落ち葉など様々な材料を置き、囲むように児童の机を設置して、互いの活動が見える座席配置にした。 ・児童の頑張りや工夫した点を全員で共有できるように、途中で一度手を止めて制作途中の作品を紹介して見合う時間を設け、さらに試行錯誤できる時間を設けた。	・友達の様子を自然に見るようになり、友達が使用している材料や道具などに気付き、それらをまねて使ったり、工夫したりして制作を楽しむことができた。 ・友達の作品を見て自分と違う落ち葉の使い方をしていることに気付き、違う色の落ち葉を使ったり、落ち葉をちぎって形を工夫したりして制作することができた。

【成果と課題】○：成果　●：課題

○自分たちで収集したどんぐりや落ち葉を使って活動することで、次時の活動に期待感をもって臨むことができていた。児童の座席配置や教師の位置の工夫によって、友達を意識できたり、友達をヒントに考えながら制作したりする姿を見ることができた。

○学校周辺の散策時には、児童二人一組でタブレットを持って出掛けた。自分たちで木の実や落ち葉などを写真に撮り、その場で写真を拡大して観察したり、実物と写真を見比べたりしたことで、より一層興味関心をもって活動に取り組むことができた。

●児童と教師の一対一の場面が多くなってしまい、友達同士の関わりが少なくなってしまった。今後は、友達同士の関わりを増やし、コミュニケーション面での伸びを引き出せるような場面をより意図的に設定していく必要があると感じた。

●制作では、見本の写真や実物を使って説明したが、作り方が分からないときに繰り返し見られるように、作り方を動画撮影しておく方法も検討していきたい。

小学部２学年の取組

単元名	みんなでなかよくでかけよう～ふるさとむらへ　レッツゴー～

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・校外学習に出掛けることに期待感をもって学習に向かい、身近な施設に関心をもちながら友達と仲良く活動したり、体験したことを友達や教師に伝えたりしようとする。

【単元目標】
・身近な地域に「秋田ふるさと村」があることを知り、関心をもつ。　知　技
・遊びたい遊具を選んだり、体験して感じたことを身近な人に伝えたりする。思判表
・友達や教師と一緒に楽しむ経験を通して、友達と仲良く遊んだり、集団活動に参加したりしようとする。　学　人

【研究授業の目標】
・秋田ふるさと村にどんな施設や遊具があるかを知り、自分の楽しみな活動を選んだり、言葉や身振りで友達や教師に伝えたりする。　知　技　思判表

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ・校外学習を楽しみにしながら学習に向かうように、イラストや写真を使用した学習計画表を作成し、常時教室に掲示する。	・バスの形の学習計画表を提示したことで、児童が活動のイメージや期待感をもって学習に参加する姿が見られた。また、小単元ごとに花丸を付けていくことで、学習の順番や順序性が分かり、単元を見通して学習に向かっていた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ○ふるさと村にある施設や遊具に興味をもてるように、パネルシアターやテレビで写真を見る場面を設定する。	・施設や遊具の説明の際、スライドショーに効果音を入れたところ、児童が注目して写真を見ていた。動画も取り入れたことで、さらに興味が増し、より注目して見る様子が見られた。 ・印刷した写真を提示したことで、スライドショーに出てきた施設や遊具を再度振り返って確認することができた。 ・児童の発達段階や経験に合わせ、よりイメージできるよう、静止画より実際に遊んでいる動画がもっと多くあればよかった。
・施設や遊具の名称を言ったり、模倣して発声したりするように、文字で示しながらゆっくりと名称を言い、児童が繰り返して言う時間を設定する。	・「ふるさとむら」「ワンダーキャッスル」「マックストレイン」等の施設や遊具の名称を身振りを付けながらゆっくりと言いながら説明することで、教師の模倣をしながら身振りを付けて表現していた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・校外学習への期待感をもてるように、楽しみな活動を写真から選び、みんなの前で発表し合う。	・「わくわくシート」を作成しながら、一番楽しみなことを決め、みんなの前で、写真を見ながら一人一人発表した。 ・本時で作った「わくわくシート」を校外学習に持参し、活用するとよい。

【改善授業の目標】
・写真を見て「秋田ふるさと村」での活動を振り返り、言葉や身振りで楽しかったことを友達や教師に伝える。

改善点（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
・めあてが分かりやすいように、写真や絵だけでなく、文字入りのカードを提示する。	・スライドで示した原稿と同様に、文字も入れて提示したことで、めあてが分かりやすくなり、めあてを意識して学習に向かう児童がいた。
・自分たちが遊んだ遊具を思い出すように、校外学習で持参した「わくわくシート」を提示する。	・「わくわくシート」を見て、校外学習へ出かけたことや遊んだことを思い出すことにつながった。
○振り返り場面で児童が施設や遊具の名称を表現できるように、スライドショーの写真を見る場面で、教師が身振りを付けながら名称を言う。	・教師が身振りを付けながらゆっくり名称を言い、再度、名称を質問すると、模倣して自分から身振りを付けて答えた。
・自信をもって発表するように、個別で発表したいことを確認したり、教師が発表の示範をしたりする。	・発表で身振りを付けながら「すべりだい」や「楽しかった」等と振り返る姿が見られた。「ふるさとむら、また。行きたい」という様子もあった。

【成果と課題】○：成果　●：課題
○学習計画表を常時、教室内に掲示したことで、「秋田ふるさと村」へ行くことを毎日楽しみにしながら、学習に参加するようになった。また、施設や遊具に興味をもち、写真を見て、身振りを付けて名称を言ったりする姿が見られるようになった。
○スライドショーに効果音を付けたことで、児童が注目して画面を見ることにつながった。興味・関心をもって写真や動画を見ることで、活動へのイメージをもったり、校外学習を振り返り、言葉や身振りで楽しかったことを伝えたりできた。
●児童が「秋田ふるさと村」で一番楽しみなことを決める活動を通して、身に付けたい力をどう考えるか、校外学習後の学びにどう生かしていくかを明確にする。
●より効果的にＩＣＴを活用するために、児童の発達段階や経験を踏まえ、写真や動画を効果的に取り入れたスライドショー等の教材が必要だった。

小学部３学年の取組

単元名	えほんのせかいへようこそ～さんサンぶんこをつくろう

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】

親しみのある絵本を読んだり、読み聞かせを楽しんだり、感想を文章や身体表現で表したりして自ら楽しみ、その思いを友達や家族など身近な人たちに伝えようとする。

【単元目標】

・絵本の内容をおおよそつかみ、登場人物になりきり、声や動きで表現する。 知　技

・これまでの絵本劇で発表したものを振り返り、友達に紹介したい部分やおすすめのところを考え、パンフレットを作成したりすることで、自分の思いを伝えることの喜びを感じる。思判表

・自分や友達の分担された役割がわかり、絵本劇の練習に取り組み、台詞のやり取りや言葉を発することの楽しさやよさが分かる。学　人

【研究授業の目標】

・絵本の好きな場面を自分で考えて選び、その場面を身体の動きで表現したり、コメントを記入したりしながら「おすすめシート」を完成する。知　技

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ・教室の壁面に小単元ごとの学習計画表や作成してきた「おすすめシート」を掲示する。	・教室の壁面に小単元ごとの学習計画表を掲示することで、常時から今何を勉強しているのかを確認したり「今日もおすすめシートを作る」という見通しをもったりすることができた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ○絵本の楽しさを学級の友達や学部の友達、家族などに伝え、楽しい思いを共有するために絵本の中の好きな場面を「おすすめシート」にまとめる。	○絵本に合わせてジャンプ、飲む、止まるポーズなど動作を交えることで言葉の意味を理解したり、その絵本の楽しさを味わったりすることができた。書くことが難しい児童は、言葉に合わせた動作をタブレットで撮ってその場でプリントアウトすることで、すぐに自分の表現を確認したり、「おすすめシート」作成に意欲的に取り組んだりすることができた
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ○それぞれのおすすめ場面についてクイズを出し、自分だけでなく友達の思いにも気付くことができるようにする。	○効果音を出しながらクイズを出すことで、クイズに対する期待感や意欲が高まり、効果音のタイミングを意識して答えていた。

【改善授業の目標】

・「おすすめシート」を作って自分のおすすめ場面を紹介したり、友達のおすすめ場面を聞いたりして、絵本のよいところをまとめる。

改善点（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
・黒板と壁面の両方の掲示物を整理して、注目する場所が分かるようにした。	・教師の説明や児童の発表の際に、整理された掲示物を指し示すことで、今注目するポイントに気付きながら活動することができた。
・自分でシートに記入する児童が３名、写真撮影する児童が２名いるので、作成の活動では	・前回まではお互いの様子が見えるようにと配置していたが、活動に合わせて場所を配置し

お互いに集中できるように机や物を配置した ・互いの発表や振り返りを見る・聞く時間に気持ちを集中し、次は自分が答える番だということに気付けるよう、並列に座席を配置する クイズは「〇〇さんのおすすめ場面は」と友達の名前を強調して問い、「〇〇さん」のシートに注目することができるようにする。	たことで、気が散らずに集中してシートの作成に取り組むことができた。 ・友達の発表を聞いた児童が「Ｂさんは、ぶたの場面が好きなんだね。」と話したり、黒板に掲示したおすすめシートを見て「Ｃさん、（絵本のイラストをジェスチャーで表現）」と楽しそうに笑顔で教師に伝えたりした。

【成果と課題】〇：成果　●：課題

〇タブレットのカメラ機能を使うことで、自分の表現活動を即時に振り返ることができたり、教室に設置したプリンターに無線でデータを送ってすぐに印刷することで間を置かずにワークシートの作成に取り組んだりすることができた。

〇振り返りの際に「〇〇さんは、どの場面が好きか」というクイズを出すことで、自分だけでなく友達にもいろいろな思いや感じ方があるということに気付くことができた。

●ICT に頼るとよい部分、紙媒体でも補える部分など整理しながら活用していきたい。

小学部４年生の取組

単元名	わくわくたんけんたい～りんごジュースかこうじょへいこう～

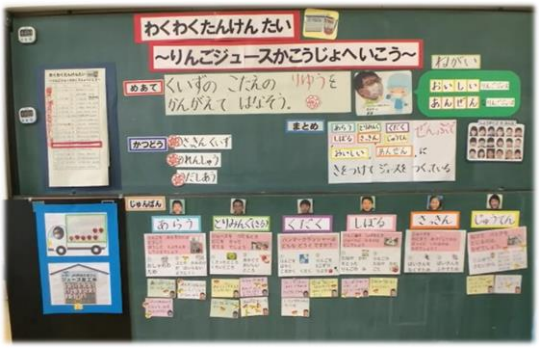
【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・加工所見学や加工所マップ・クイズ作りの学習で、分かったこと、感じたことなどを自分から教師や友達に伝えたり、学習したことから見通しをもって活動を進めたりする。

【単元目標】
・加工所見学等、りんごジュース作りの学習を通して、地域や特産物に興味を深め、自分たちの生活とのつながりを考える。 学　人
・友達の居住地の増田地区や地域の特産物であるりんごがジュースになるまでの様子を知る。 知　技
・加工所見学で知りたいことや分かったことを伝えたり、友達の意見を参考に、相手に伝わる話し方やクイズのスライドの作り方などを考えたりする。 思判表

【研究授業の目標】
・工程の内容やおいしくて安全なりんごジュースを作るための工夫等について、分かったことや感じたことを入力・記入して発見カードを作ったり、見学の様子の写真を貼ったりして加工所マップを作成する。 思判表

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ・単元の進み具合やゴールを見通せるように、単元計画表を掲示し、一時間ごとに児童が花丸を書いたり、シールを貼ったりする場面を設ける。	・自分たちから進んで「やりたい」と挙手し、喜んで花丸を書いたり、シールを貼ったりしていた。児童の祖父が乗ったトラックのイラストの計画表からりんごのシールを取り、裏返してりんごジュースにして車庫のイラストに貼ることで、楽しみながら進み具合を確認したり、活動の達成感を感じたりすることにつながった。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ○児童が分かったことや感じたことを伝えることに集中し、書くことの負担を減らすために発見カードを作る方法を自分で選択できるようにする。	・発見カード（紙）も準備していたが、全員タブレットを選択し、自分の得意な方法で入力していた。多くの児童が写真を見て気付いたこと、見学で感じたことを複数のカードにまとめることができた。書字に時間がかかる、自信がない児童にとっては簡単に文字入力でき、間違ってもやり直せるため、意欲的に進めることができていた。
・「おいしくて安全」というキーワードにせまるために、導入で加工所の方の願いに触れたり、衛生面に気付けるような言葉掛けをしたりする。	・導入で加工所の方の願いを聞くと、児童から「おいしいジュースを作りたい」という予想が出た。願いがあることを意識して発見カードを作成することができていた。また「どうして○○すると思う？」と段階を踏んで聞いていくと「おいしくて安全」にせまる工夫の理由を話す児童も多く見られた。時間の都合上紹介することが難しかったことが反省点で

＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・自己の学びを実感できるように、自分たちで作った発見カードを使ってクイズを出題し合う機会をつくる。	あった。 ・自分の作った発見カードを友達にワクワクしながらクイズを出題したり、うれしそうに答えたりする児童の姿が見受けられた。友達にクイズとして発表することで、自己の学びを再確認したり、友達の気付きを共有したりすることができた。



＜公開研究会の実践＞

【児童の姿と評価】

・児童の話した理由やよい気付きをカード（児童の顔写真付き）に教師がペンで書いて、クイズごとに黒板に掲示した。

→自分の発表したことがカードに書かれることがうれしく、発表の意欲につながったり、友達の発表をまとめたカードを手掛かりに自分の理由を考えて発表したりすることができた。またクイズの進み具合も分かりやすく、全体で振り返るときにも役に立った。

・「おいしい」「安全」により注目し、理解できるように、まとめの場面でクイズや理由カードに「おいしい」「あんぜん」シールを貼る場面を設けた。

→自分や友達の意見が本当にキーワードに関係していることなのか、改めて見返して考えながらシールを貼っていた。また一つの理由でもどちらにも関係していることではないかと考え、両方のシールを貼ったり、大事なことだと思うという考えから同じシールを２つ貼って強調したりする児童も見られた。どのクイズの理由カードにもシールが貼られている掲示を見て、「おいしい」「安全」の工夫が「すべて」の工程で行われているということが視覚的に分かり、児童の発言からまとめを作ることができた。

・教師の直接的な支援を少なくし、児童自身で活動を進められるように、タブレット型端末のスライドを台本代わりとし、操作方法が分かるように、見やすい位置（大型テレビの下）に手順表を貼った。また教師がクイズの見本を示した後、一人一台ずつ自分のタブレット型端末を使用して、クイズの練習をしてからクイズの発表を行った。

→発表に不安な様子を見せる児童もいたが、スライドや手順表を指差すことで、おおよそのクイ

ズの流れが分かり、自分で操作しながら発表することができた。もう少し各自で練習する時間を確保することで、自信をもって発表することにつながったかもしれない。
児童自身で進める場面を作ったことで、「〇〇さんはどうですか」と回答者に理由を聞いたり、回答者同士で「〇〇さんはどっちなの？」と聞く、答えた理由で笑い合うなどしたり、児童同士の関わりが多く見られ、対話的な学びにつながった。

【指導助言】
・子どもたちの実際の生活から発展し、資質・能力を身に付けながら、現在のまた将来の生活につながる授業だった。
・「おいしい」「安全」というキーワードについては、現在の生活に密着したキーワードであり、将来の生活にもつながるものになるだろう。
・表現方法の一つとしてＩＣＴを活用する場合、どのような表現方法が将来の児童生徒のどのような力に結びつくのかを共通理解し、将来の生きる力につながる取組にしていくことが大切である。
・本時は、児童の気持ちに沿って授業を展開することでＩＣＴの効果的な活用の場面がつくり出され、先生と子どもたちとのやりとりによる自然な授業の中にＩＣＴがあった。
・ＩＣＴを手段としながら何を達成するのか、子どもたちに何を身に付けさせるのか、子どもたちの学びが充実したものなるよう取り組んでほしい。

【成果と課題】〇：成果　●：課題
〇事前に加工所を教師が見学し、当日見られない作業工程の動画を録画させてもらい、授業やクイズ大会時に見せることで、聞くだけではイメージが付かない作業についても理解することができた。
〇見学での質問事項について、児童にしてもらいたい質問や予想される質問をあらかじめ考え、オリエンテーションで見せるPowerPointに盛り込んだり、促す言葉掛けをしたりしたことで、児童に身につけてほしい力に基づいた質問を児童が考え、インタビューすることができた。
〇見学前にりんごがジュースになるまでの予想図を作成したり、加工所マップと見比べたりすることで、学習の見通しや期待感をもって見学に向かったり、より驚きを感じながら見学したりできた。
〇加工所内で一人一台ずつ自分のタブレット型端末で気になった作業や機械を写真・動画撮影する時間を設けたことで、受け身になりがちな見学も自発的に動き回って興味の赴くまま撮影したり、自分から加工所の方へ知りたいことを質問する児童もいたりした。また部分参加の多い児童も時間いっぱい見学に参加できた。
〇加工所の写真や動画を編集し動画を作成したり、クイズ大会用のＯＰ動画を児童の押したスタンプを使って作ったりしたことで、活動に参加することが難しい児童も教室から離れた場所でも一定時間動画を見て落ち着いて学習に参加したり、「〇〇さんありがとうね」と声を掛けられ笑顔を見せる微笑ましい場面も見られたりした。
〇加工所マップの発見カードやクイズ作りでは、事前に予想される、あるいは引き出したい意見をまとめ、教師間で共有することで、「おいしい」「安全」に沿ったカードやクイズ作りの支援につながった。
〇単元を通して「おいしい」「安全」をキーワードに学習を進めていったことで、加工所マップ作りやシール貼り、クイズ作りなど様々な活動で繰り返し学び、知識の定着や理解の深まりに結びつけることができた。一見するとキーワードとは関係のないような加工所の発見であっても、人が急いでジュースを運び転んで泥が付いたら安全ではないなどと、自分で考え、みんなの前で演示をしながら伝える場面も見られた。また、児童から「りんごジュースを作ってみた

い」という声もあがり、そのために大切なことを聞くと「マスク」「手洗いうがい」「エプロン・バンダナ」と話し、衛生面に気を付けようとする姿が見られた。実際にジュースを作る場面でも意識していた。単元の最後にジュースを作ることは計画していなかったが、児童のやりたい気持ちを尊重し、体験したり、パックジュースと飲み比べたりすることで、りんごやりんごジュース、地域への愛着や加工所の方々への感謝などが子どもの発言や表情から見て取れた。

○加工所マップの発見カードや質問シート、クイズのスライドを作る場面ではタブレット型端末のアプリ「ロイロノート」を活用した。自分で伝える、作成する方法を選び、自分が得意とする入力方法（音声入力、キーボード入力等）で作成したことで、紙に書くとなると動きが止まってしまう児童も意欲的に学習に向かい、自由に教師に話したことをそのまま入力することができた。書くことに時間や労力がかかっていたが、考えることに集中し、楽しみながらカードやスライドを作成することにつながった。またこの単元以外の生活単元学習や国語、算数などでも「ロイロノート」を活用し、操作に慣れておいたことも有効であった。

●活動が盛り沢山の単元だったため、児童の意見を掘り下げて聞き、理解を深める時間が取れないときもあった。単元全体や一時間ごとの活動内容を精選し、児童の負担感を減らし、教師側も心に余裕をもつことで、児童に質問して考えを引き出したり、児童のよい気付きやつぶやきを拾って全体に共有したりして広げていくことができるのではないか。

●音声入力で正しい文字が入力されず、児童がイライラしてしまったり、漢字の表記になってしまうため、自分で話したことが正しく入力されているかすぐに理解できなかったりすることがあった。「もう一回やってみよう！」「合っているから大丈夫だよ」と言葉掛けをしたり、教師がルビを振ったり、漢字を勉強中の児童には平仮名に直してもらったりしていた。文字（平仮名、片仮名）を実際に書くことで覚える児童もいるため、学習のねらいや時間に合わせた手段の選択を検討する必要がある。

●質問練習やクイズ大会の撮影した動画を見合う際に、アドバイスを活発に伝え合う場面を上手くつくれなかった。授業時間や児童の集中力等も考えつつ、個人で振り返る、友達と振り返る時間を分け、じっくり確認する時間を設けたり、見せ合う人数（ペア、グループ、全員）や動画の切り取り方を工夫したりと動画を活用した振り返りの仕方を検討してきたい。

小学部第５・６学年の取組

単元名	きらきらかがやき隊～きなこをプレゼントしよう～

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・自分たちが作ったきなこを教師や家族にプレゼントして食べてもらい喜んでもらうことを楽しみにしながら自分の役割を果たしたり、友達ときょうりょくしたりして目標カップ数分のきなこを作る。

【単元目標】
・自分たちが育てた大豆を使ったきなこ作りを通して、大豆からきなこが作られることを知る。 知　技
・きなこをプレゼントする活動を通して、きなこの作り方を実演したり、説明したりする。 思判表
・きなこ作りやプレゼントをする活動を通して、自分の役割を果たしたり、友達と協力して活動に取り組んだりする。 学・人

【研究授業の目標】
・きなこ作りを通して、自分の役割が分かり、自分の役割を果たしたり、大豆をすりつぶす作業やふるいに掛ける作業を友達と協力して行ったりする。 学・人

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ・きなこ作りでは、目標数を設定し、「きなこ完成表」を黒板に掲示する。完成分のカップのイラストを「きなこ完成表」に貼り、目標数を意識しながらきなこを作ることができるようにする。	・「きなこ完成表」は視覚的に分かりやすく、あと２つで完成することが分かり、教師の発問に対して答えることができていた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ○導入でミキサー掛けや友達と協力する箇所を VTR や写真で具体的に示す。	・VTR と写真、２つの方法で提示したことが有効的で、児童は、自分の役割が分かり、主体的に活動できていた。また、「協力する」ということが分かり、誰と一緒にどんな活動を行うのか見通しをもって取り組んでいた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ○振り返りの活動で児童が達成感を得られるように、「自分の役割」、「友達との協力」を観点に振り返り、ミキサー掛けの様子や三つの協力場面を録画した動画を視聴して児童自らが確認することができるようにする。	・「自分の役割」や「友達との協力」の場面を映像で解説しながら確認することで、「できた」という学びの実感を得ることができていた。また、次の活動への見通しをもつこともでき学びの連続性を意識する活動となっていた。

【改善授業の目標】
・ゲストティーチャーを招き、きなこの作り方を実演したり、説明したりする。

改善点（○は ICT 活用）	児童の姿と評価
・きなこを作る目的を明確にするため、ゲストティーチャーを設定し、学習のめあてに明記する。	・ゲストティーチャーに道具の使い方やきなこの作り方を伝えながら協力してきなこを作った。
・完成したきなこをゲストティーチャーにプレ	・作ったきなこをゲストティーチャーに食べて

ゼントし、試食後に感想をいただく場面を設定する。 ○次時の学習の確認時に予告 VTR で家族にきなこをプレゼントすることや家族へのメッセージカードを作ることを紹介し、学習への期待感がもてるようにする。	もらい、感想をもらうことで達成感や今後のプレゼントすることへの意欲につながった。 ・子どもたちは期待感をもって授業を終えることができた。

【成果と課題】○：成果　●：課題

○導入や振り返りの場面で、動画を活用して解説したことにより、活動に見通しをもち、主体的に活動したり、はっきりと学びを実感したりすることができた。

○予告 VTR の活用により、次時の学習への見通しと期待感が高まった。

○ゲストティーチャーの設定と活用により、目的が明確となり、達成感が得られ自信につながった。

●振り返りの場面では、本時の活動をＶＴＲを視聴した後に児童の実態に応じて記述したり、シールを貼ったりして自己評価を行った。「できた、できなかった」の評価で終わってしまったため、児童の思いや考えが表れるような評価の方法やシートの工夫を考えたい。

４　成果と課題（○：成果、●：課題、ＩＣＴ活用に関する内容：下線）

（１）単元全体を見通す工夫

○単元計画表や小単元ごとの学習計画、単元を通して達成したい目標数など、単元全体のゴールや進み具合が視覚的に分かるものを用意し、黒板や教室内に掲示した。単元計画表は、児童の発達段階や学習経験、理解力、学習の目的に応じて、イメージしやすい形や内容、表記の仕方（イラストと文字の併用など）を工夫し、児童自身が学習の最後にイラストシールや花丸を付けるなど、自分たちのものとして活用したことがより効果的で、これらを通して児童は、学習の順序性が分かり、単元を見通すとともに、本時の学習に見通しをもったり、どこまで進んだかの理解や今何の学習をしているのかの確認をしたりすることができた。そして、先の活動を楽しみに学習により主体的に取り組む姿が見られた。

（２）学習の意味や意義を理解する工夫

○本時の目的や目標を児童が想起しやすいようにイラストや絵本、写真、実物、効果音を使ったスライドや具体を示す動画で提示したり、教師が分かりやすく示範を示したりすることで、興味や関心を高め、活動や目標への具体的なイメージやどのように活動を行うかに見通しをもって、主体的に活動に取り掛かることができた。

○注目する場所が分かるような掲示物の整理、活動に合わせた机や物の配置（向かい合う、背中合わせの場所など）、目標の達成に迫ることができる学習内容の設定やＩＣＴ活用を含めた学習方法を自己選択できる工夫が、児童が目標を明確に意識し、目的の達成に向けて集中して活動に取り組む姿につながった。それらの工夫により児童は、必要なポイントに気付いて活動を進める、友達の様子を自然と見て気付き、まねや工夫をして活動する、知的好奇心を高め、高い集中力を持続させて活動する、よく考える、自分の表現を生かすなどしながら主体的にめあてを達成することができた。

○単元全体を通して育成を目指す資質・能力に迫る見方・考え方を一貫してキーワードとしながら学習を進め、学習内容をまとめる活動やクイズ作りなど、様々な活動で繰り返し学んだり学びを生かしたりできるような単元構成にすることで、知識の定着や理解を深めることができた。学習対象について事前に予想を立てて、実際に見聞きした内容と比較する活動を取り入れたことも深い学びと理解につながった。

●今後、生活単元学習以外の学習においてもＩＣＴの活用について、児童の発達段階や経験を踏まえて写真や動画などの提示情報を選択したり、学習のねらいに迫り、学びの定着や活用につながる教材の活用について、ＩＣＴとアナログの両面から十分検討して選択したりしながら、学習効果を高めるのに最適な手段を活用していきたいと考える。

（３）ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫

○めあての示し方（区切って一文字ずつ示す、写真やイラストと文字を合わせる）や内容（目的となる事柄を盛り込む）を工夫したことが、めあてをより意識して学習に向かったり、目的意識を明確にもって活動したりする姿につながった。

○導入で前時に児童自身が活用した物を提示することで、前時のことを思い出したり、振り返りで次時のイメージ化のために写真やイラスト、予告ＶＴＲを活用しながら内容を問い掛けることで、次時への期待感をもったりして、本時とのつながりや学びの連続性を意識することができた。

○振り返りでは、自己の学びの実感や学びの共有ができるように、学習したことを基にしたクイズを出し合う場面やめあてを基に撮影した児童の様子を解説を交えて視聴する場面を設定した。児童は意欲的に出題や回答をしたり「できた」という実感を得たりしながら、

自己の学びを再確認するとともに、友達の気付きや頑張りを共有することができた。また、活動中の児童の発言を記した付箋や、成果物を活用して学習のキーワードについて再思考する場面を設定したことで、改めて考えたり、判断したりする中で考えを深めることができ、まとめを児童の発言からつくることにつながった。

●個人での振り返りと友達との振り返りを効果的に取り入れる、教師が丁寧に問い返しをしたり、児童のつぶやきを全体で共有して広げたりするなど、児童が自分の思いや学びに向き合ったり、友達から気付きを得たりしながら、理解や学びをさらに深めることができる振り返りの在り方について検討を継続していきたい。

●一単位時間の中で、児童が学びを実感し、主体的に活動できるように、ねらいや活動時間に合わせたＩＣＴを含めた学習手段の選択をさらに検討していきたい。また、授業の中で学習手段としてＩＣＴを活用するために児童自身が基礎的な操作方法等を学び、その活用に慣れ親しむ時間や場面を改めて設定することも考えていきたい。

Ⅱ　中学部の実践

1　生徒の実態

意思表出においては、自分の意思や感情を表情や上肢の動きで伝えようとする生徒から、友達や教師と簡単な会話でやりとりをし、自分の考えや思いを伝えることができる生徒まで、幅広い実態の生徒が在籍している。

人との関わりに関しては、生活経験が少ないことで様々な活動に自信がなく、集団に参加することが難しい生徒や対教師との関わりが中心の生徒がいる。その一方で、学級だけでなく、他学年の友達とのやりとりや集団での活動を楽しみ、意欲的に学習活動に取り組もうとする生徒もいる。そのため、繰り返し取り組んでいる学習活動に関しては、生徒同士で声を掛け合って準備や片付けを行う姿が見られる。

情報機器の操作に関しては、スイッチ教材を用いて操作する生徒、かな入力やローマ字入力で文章を作成したり、単語を入力して検索したりする生徒と実態は幅広い。家庭での使用頻度にも幅があるが、どの生徒も情報機器に触れる機会が多く、身近なものとして定着している。

自分たちが住んでいる横手市に関する学習に取り組むことで、地域に対する興味や関心の幅が広がり、学んだことを伝えたいという姿が見られるようになった。

2　単元検討会の様子（・は単元全体に関わる検討及び改善事項　○はＩＣＴ活用に関する内容）

１年生	「スマイル∞（エイト）　スマイル米を育てよう」　（総時数２４時間） ・「米を大切にする」姿をどこでどう判断するかを明確にする。 ・単元全体の子どもたちにとってのゴールを「お米博士」という形で示す。 ○分かりやすいスライドの制作に向けて、生徒が課題への見通しをもつことができるように、分かりにくい見本のみ提示し、分かりにくい理由などを問い、思考させる。
２年生	「増田の内蔵　ひ・み・つ　発見！②」　（総時数２４時間） ・社会科の知識を押える目標もあるとよい。掲示物を作る活動の目標が、学んだことの知識をしっかりと押さえるところにあるという意識をもつことが大切である。 ○「発信して感想をもらう」ところの感想の収集の仕方について、YouTube を利用するとすれば、メリットとデメリットを考慮して慎重に行う必要がある。
３年生	「修学旅行に行こう」　（総時数５５時間） ・単元目標を達成するために必要な力や達成に至る段階を含めて、本単元で目指す姿や付けたい力を再整理する。 ・単元が終わったら自分たちはこうなっている、ということがイメージできるキーワード「もっと横手が好きになる」を設定する。 ○交流での発表活動を生徒同士で進められるように、ＩＣＴ機器の操作と進行の役割を分けることで、二人で息を合わせる必要感がもてるようにする。
共通	・振り返りの際に、ポイントを絞って振り返るツールとして「かまくらカード」（か＝考えたこと、ま＝学んだこと、くら＝くらべたこと）を活用する。

めざせ！お米博士
どんなふうにたべられているの？
いつからたべられているの？
ごはん、お漬おかし、動物のえさとして食べられている。
お米は弥生時代から本格的に作られ始めた。
秋田(横手)では、どれくらいお米がとれるの？
どんな品種があるの？
秋田県 50.20t (全国第1位)
宮城県 6.40t (全国第4位)
スマイル∞
スマイル米を育てよう
活動内容
あいさつ
先生の話
調べる
書く
貼る
振り返り
課題
こくとうパン
ぎゅうにゅう
てりやきチキン
やさいのソテー
はくさいのスープ
まとめ

3　各学級の実践

中学部１年生の取組

単元名	スマイル∞　スマイル米を育てよう

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・米についての疑問を自分たちで考え、それを解決することを目指して、調べ学習や体験的な活動にすすんで取り組む。
・米に関する学習で身に付けた知識や技能を、他者に分かりやすく伝えようと試行錯誤する。

【単元目標】
・秋田県の主要作物である米について調べる学習や米の生産に関わる体験活動を通して、主食としての米と仕事としての稲作が自分たちの生活とつながっていることが分かる。知　技
・米についての調べ学習や米作りを通して、米についての自分なりの意見をもち、自分の考えの理由に触れながら発表したり、資料を用いて自分の考えを表現したりする。　思判表
・米についての調べ学習や米作りへの関心をもち、米を大切にしようとする。　学　人

【研究授業の目標】
・どのような方法であれば発表を見る人が分かりやすいか考えて、友達と役割分担しながらスライドを作る。　思判表

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞	
・米についての学習に意欲や期待感をもてるように、自分たちで学習のテーマを決める機会を設定する。	・米について疑問に思っていることや知りたいことを自分たちで意見を出し合いながら考え「収穫量」「品種」「食べ方」「歴史」を学習のテーマに決めた。
・単元のゴールを「お米博士になろう」とし、学習の流れを文字やイラストで示す。	・「お米博士」になることを目指して、本単元の学習を楽しみにしている言葉や表情が見られた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞	
・主食としての米と仕事としての稲作が自分たちの生活とつながっていることに気付けるように、生徒の疑問やつぶやきを取り上げながら学習の課題として提示する。	・「収穫量」をテーマにした調べ学習では、秋田県が全国３位、横手市が全国４位の収穫旅行であることを知り、自分たちが住む地域が全国でも有数の稲作地帯であることを知ることができた。
・おいしいお米を作るために農家の方が様々な努力をしていることに気付けるように、田植えや稲刈り、はさがけなどの体験的な活動を取り入れる。	・田植えや稲刈り体験では、地元の農家の方の説明や手本を参考に、作業のポイントを意識して取り組んだ。自分たちが田植えした田んぼや刈り取った稲を見て、喜びの声を上げたり、達成感に満ちた表情が見られたりした。
○米についてインターネットで調べたり、農家の方に質問したりする機会を設定する。	○自分たちで学習のテーマを決めたことで、すすんで調べ学習に取り組んだ。「収穫量が多い地域の特徴」を自分なりの言葉で整理したり、「使い道による分類（主食、酒米、飼料用）」があることを初めて知り感心したりしていた。

○学習した内容をスライド資料にまとめ、他者に伝える機会を設定する。	○他学年の生徒やお世話になった農家の方を相手に「お米の学習発表会」を行った。自分たちが学んだ内容が分かりやすく伝わるように、スライドの文字や写真の大きさ、アニメーションの付け方を工夫してスライド作りに取り組んだ。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞	
・身近な米製品を提示して比べたり、予想を立てたりする機会を設定しながら、課題を提示する。	・うるち米ともち米の実物を見て、色や形などの違いを自分なりの言葉で説明できた。パックのお米や赤飯、日本酒、せんべい、切り餅などの成分表示を見て用途によってうるち米ともち米が使い分けられていることに気付くことができた。
・学習した内容を視覚的に振り返ることができるように、地図や掲示物にまとめる場面を設定する。	・「収穫量」や「品種」を日本地図にまとめたり、「食べ方」や「歴史」を掲示物にまとめたりする際は、気付いたことを言葉や指差しなど表現できるようになってきた。
・振り返りの視点を示したカード（かまくらカード）を提示する。	・振り返りの場面では、自分からかまくらカードを用意する生徒が増え、振り返りの仕方が定着してきた。振り返りの視点（考えたこと学んだこと、比べたこと）だけでなく、発表する際の話型や選択肢を提示することで、自分の考えを具体的に発表できるようになってきた。

【改善授業の目標】
・前時で作ったスライドを基に改善できるところはないか考えて、友達と役割分担しながらスライドを作る。

改善点（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
○前時のスライドと本時のスライドを比較する場面を設定する。	○二つのスライドを見比べることで、スライドが見やすく、分かりやすくなったか具体的に説明することができた。
・まとめを生徒の言葉で整理できるように、生徒からでたキーワードを基に文章化する。	・自分が発表したキーワードがまとめに使われることで、次時の導入でまとめの内容を思い出して発表できるようになってきた。

【成果と課題】○：成果　●：課題
○学習のテーマを自分たちで考えて設定することで、意欲的に学習に参加する姿や新しい知識を知り学ぶことの面白さを感じた発言などが見られた。体験的な活動を通して、米を作ることの大変さやおいしいお米を作るための工夫を身をもって知ることができ、実際に自分たちでやり遂げることで活動に対する達成感を得られた。
●学習した内容や自分の考えを言語化することが難しい生徒がおり、教師の問い掛けに対して特定の生徒の発言が多くなってしまうことがあった。生徒の実態に応じて言語以外の表現で発表できるように環境を整えたり、自分の考えを表現しやすいように選択肢を多く用意したりする必要があった。

中学年２年生の取組

単元名	「増田の内蔵　ひ・み・つ　発見！②」

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】

・実際に見たり、説明を聞いたりする中で、見聞きした事をメモしたり、友達と相談しながらさらに知りたい事をまとめたりする。

・相手が見て分かる映像になるようチェックポイントを考えたり、友達に自分の意見を伝えたり友達からの助言を受け入れたりする。

・グループで話し合った事や作った映像について、伝わりやすいように工夫した点や感想などを発表する。

【単元目標】

・「増田の内蔵」について、見聞きしたことや調べたことからその特徴や魅力を知り、自分たちの生活と比較しながら情報の整理をする。 知　技

・得た知識を整理し、人に伝わりやすい表現かを検討し合ったり、他者からの助言を受け入れたりしながら掲示物や映像を作る。 思判表

・地域の方から話を聞いたり、調べたことを身近な人等に紹介したりすることを通して、地域のよさを知り、地域に愛着をもつ。 学　人

【研究授業の目標】

・見る人に伝わりやすい映像表現の仕方を考え、友達と相談しながら「増田の内蔵」の映像を作る。 知　技　思判表

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ○映像を作ってみたいという意欲を高めるために、大曲支援学校中学部２年生が作成した映像を提示する。	・大曲支援学校２年生が作成した映像を見たことで、自分たちが作る映像のイメージがもてた。合わせて、自分たちならどのように作るかを考え、見て分かる映像作りのチェックポイントを話し合うことができた。自分たちでチェックポイントを考えたことで、どのように映像を作るかが具体的になった。
・学習の流れが分かるように、学習計画表を教室の前に掲示しておく。	・学習計画表に自分たちの考えたキャラクターを貼って学習の積み重ねをしてきたことで、今学習している内容が一目で分かり、「今日は○○をやるんだよね」「はやく○○をやりたい」など全員が共通の見通しを持って取り組むことができた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ・地域のよさを実感したり、調べたことをまとめる楽しさを味わったりすることができるように、校外学習を取り入れ、自分たちで撮影したり、直接話を聞いたりする機会を設定する。	・校外学習を複数回設定し、内蔵の中に入ったり、増田町観光協会会長から直接話を聞いたりしたことで、自分たちが普段生活している家との違いを実感し、もっと詳しく知りたいという意欲が高まった。また、映像に自分たちが撮影した写真を使ったり、質問して答えてもらった内容を掲示物や映像に入れたりしたことで理解が深まり、知る、調べる楽しさ

	を味わいながら映像作りをすることができた。
○要約したり、相手意見を取り入れたりなど、文章を書き直したり、言葉を選んだりすることが容易にできるよう、調べたことをまとめる手段としてタブレット型端末を活用する。また、調べたことをたくさんの人に知ってもらう手段として、映像作りをして発表したり、ＹｏｕＴｕｂｅで発信したりするなどＩＣＴを活用する。	・映像作りにおいて、グループで一つのタブレット型端末を使ったことで、テロップの場所や色など話し合いながら制作を進めることができた。また、絵コンテをＧｏｏｇｌｅドキュメントで作成たことで、途中でナレーションを変更したいときでもすぐに書き直すことができ、より相手に伝わる表現を検討することができた。自分たちが作った映像がＹｏｕＴｕｂｅにアップするということが分かっていたため、言葉の使い方や話し方などに責任感や緊張感をもって制作を行うことができた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・教師や友達と一緒に取り組むことで解決できるねらいを設定する。	・友達からの意見を取り入れたり、自分の考えを伝えたりすることをねらいにし、話し合うときの流れをカードに示したことで、自分たちで話し合いながら進めていくようになってきた。
・活動内容や写真等から自分たちでめあてを決めるようにしたり、取り組む内容が分かるように課題を具体的に示したりする。	・チェックポイントを意識したねらいを提示したことで、グループの友達とチェックポイントカードに印をつけながら取り組むことができた。今後、制作する流れが分かってきたため、言葉を聞き出しながら自分たちでめあてを考えていくようにしていきたい。
○学習した内容が視覚的に分かるように電子黒板や制作した画像、映像などを提示する。	・チェックポイントから作った映像についてまとめ、ＹｏｕＴｕｂｅ配信前に、できた映像を見せる相手（大曲支援学校の友達や増田町観光協会の会長）の写真を提示して次時への意欲を高めるようにした。映像制作時に工夫したことやチェックポイントをグループごとに発表した。その際の生徒自身の言葉をまとめにすることで、学習内容の理解が深まるため、次時に取り入れる。
・「か・ま・くら」カードを活用し、各視点で振り返る。 「か」：考えたこと 「ま」：学んだこと 「くら」：比べたこと	・今までの学びを振り返って「か・ま・くら」カードに記入することができた。「か」では、自分が映像制作しながら考えたことを記入することができた。「ま」では、タブレット型端末の操作に関することを記入することが多かったため、友達同士のやりとりの中で学んだことが記入できるように視点を絞って提示したい。また、記入時に字形を気にした

	り、助詞や漢字の使い方に惑ったりして記入に時間を要したため、次時からタブレット型端末で記入をしていきたい。合わせて、スクールワークを活用し、学びをみんなで共有しながら振り返りを行っていく。

【生徒の姿と評価】

導入を整理する

・映像作りにおけるチェックポイントの確認に関しては、自分たちで考えてきた内容であることや、前時まで穴埋め式で確認してきたり、記入式のチェックカードとして手元に提示しておいたりし、今までの学習の積み重ねができていたため、見るよう伝えるのみとした。

→繰り返し取り組んできたことでチェックポイントの内容が定着しており、カードを活用した話し合いや映像の改善ができていた。そのため、導入時に一つ一つ確認しなくとも学習を進めることができ、グループ活動の時間を十分確保することにつながった。

全グループの発表時間を確保する

・グループでの活動時間を確保するために代表グループのみの発表にしていたが、自分たちのがんばりを伝えたい、認められたという気持ちが次の意欲につながるのではないかということで、３グループの発表場面を確保した。何を話したらよいか分からない生徒や、自分から話すことが苦手な生徒が多いため、発表の視点や他グループの映像を見た感想発表の視点をチェックポイントにするということを継続した。

→発表の流れができてはいたが、グループ内での確認が不十分であったり、発表したグループが伝えた視点と感想との整合性がとれていなかったりした。発表グループが伝えた視点に関しての感想を求めてから他の視点に関しての意見をもらうよう教師が促す必要があった。主体的な発表に関しては、他グループのよいところを探して伝えようという気持ちが高まってきており、自分から感想発表をしようとする生徒が増えた。

生徒の言葉をまとめにする

・チェックポイントを基に映像を作ったり、改善したりすると見て伝わる映像になるということをまとめにしたが、グループの発表時に出た工夫点や感想時の言葉をそのままままとめにし、次時への意欲につながるようにした。

→提示授業では時間を十分に確保できず、発表や感想を十分にまとめることができなかった。そのため、各グループで次の活動に向けての視点を話し合ったり、絞ったりすることまでもつなげることは難しかった。しかし、次の時間に、工夫点や感想の板書を見ながらグループ毎に話し合うところから進めることができ、友達からの意見を聞いて改善したらよくなった、改善する前の方が相手に分かりやすいとグループ内で話し合って決めたなど試行錯誤しながら進めることができた。

【指導助言】

・導入が非常にコンパクトになり、生徒の様子から指導内容や手立てが改善されていた。

・導入で増田町観光協会会長からのビデオメッセージ見た生徒が、学習活動への期待感をもっていてよい。

・ビデオメッセージで、「〇〇のような映像をお願いしたい。」のようなメッセージをもらうことができれば、生徒が観光協会会長の思いを汲み取って、自分たちでめあてを設定していくこともできたのではないか。

・振り返りの思いを汲み取り、自分たちでめあてを設定し、課題解決のための学習に取り組むことができれば、より生徒の学びの実感につながったのではないか。生徒の考えを基に、生徒と一緒になってめあてをつくっていくということが大切である。

・振り返りの場面で、できた映像を見合う場面を充実させ、みんなで考え合い、意見交換しながらよりよい映像を作る、という過程を大切にすることでより生徒に力が身につくのではないか

・映像制作の活動場面では、チェックポイントが非常に有効な手がかりになっていた。生徒が映像を作る上で気を付けることがはっきりしていたことで、ペアになった生徒が相談しながら映像を作ることができていた。チェックポイントの他に、絵コンテがあり、生徒が参考にしてい

る資料ＩＣＴ機器の効果を高めていた。
・iMovie を使用したことで、生徒同士が相談し、試行錯誤しながら映像制作をしていた。生活単元学習に合った活用の仕方だった。
・映像制作中のグループ内での相談場面で、教師がＢさんに自分の考えを相手に伝えるよう促していた。生徒が自分の考えをもち、相手に伝えたり、相手から意見を聞いたりする過程が大切である。生徒同士が考えや意見をもち、やりとりをしっかりしていたことが、振り返りや生徒の学びの実感につながっていく。
・自分の考えを説明するという言語力は、各教科等の指導のベースとなる資質能力である。個々の生徒に応じてどこまでの言語力を求めるかということ、を想定して指導する必要がある。本時では、事前研よりも振り返りの時間が確保されており、生徒から十分に意見を引き出すことができていた。
・電子黒板で共有している画面を見ながら、他者からの意見を聞いて映像を修正することで、さらに言語力を高めることができる。
・振り返りは、生徒自身が学んだことを次時につなげる上で大事にしたい活動である。本時の振り返りは、できたことの振り返りにとどまっていた。生徒の学びをより充実させるためには、生徒の良かったところを教師が伝え、生徒自身が学んだことを実感できるようにすることも必要である。
・生徒の主体性は授業づくりのキーワードであり、「教師が教える」だけでなく、「生徒自身が学び取っていく」という授業づくりを目指してほしい。

【成果と課題】○：成果　●：課題
○「増田の内蔵」を取り上げ、直接見て自分たちの生活と比較することができるように校外学習を設定し、分からないことを質問できるように増田町観光協会会長や増田地域課の方とやりとりした。そのことで、自分たちの住む地域の特徴や魅力を深く知り、地域に対する興味関心が高まったり、愛着をもったりすることにつながった。
○建物の構造に関することやそこで暮らす人等、調べる項目をあらかじめ設定したことで、比較する対象が具体的になったり、自分たちで写真や動画を撮影する場面を設けことで、調べたもののまとめ方を自分たちで考えたりしながら学習を進めることができた。
○他者の考えを受け入れたり、自分の考えを伝えたりすることができるように、映像作りにおいて、２～３人のグループで活動した。自分の意見を通すのではなく、相手の意見を聞いて考えを変えたり、映像を見る人の立場になって映像を作り直したりすることができるようになってきた。
○「か・ま・くら」カードを活用し、繰り返し各視点で振り返って積み重ねたことで、自分が取り組んだことや何を学んだかなどを具体的に考えたり、友達の考えや映像と比較して気付いたことをまとめたりすることができるようになっただけではなく、考えを発表することに対しても主体性が高まった。
○調べたことをまとめる手段としてタブレット型端末を活用した。「Ｇｏｏｇｌｅスライド」を使ってクイズを作り、他学年や大曲支援学校中学部２年生に発表したことで伝える楽しさを積み重ねることができた。また、「Ｇｏｏｇｌｅドキュメント」で映像作りに関しての絵コンテを作ったり、調べたことをまとめたりしたことで、文章を何度も読み直して伝わりやすいように検討したり、相手意見を取り入れて文章を書き直したりすることができた。加えて、映像作りで「ｉＭｏｖｉｅ」を使用したことで、アニメーションやフォントに捕らわれず、調べたことを分かりやすく伝えるためにどのように表現したらよいかということに重点を置いて自分たちで操作しながら作ることができた。

○調べたことをたくさんの人に知ってもらう手段として、ＹｏｕＴｕｂｅでの配信を提案したことで、一つ一つの学習に対する意欲が高まり、自分たちで作ろう、もっといい映像にしたいと積極的に学びに向かうようになった。

○「スクールワーク」を活用して、「ペイジズ」で作った「か・ま・くら」カードで振り返りを行った。考えをまとめるよりも書くことに時間が掛かっていたが、考えを素早くまとめて打ち込むことができるようになった。また、提出された「か・ま・くら」カードを電子黒板で提示することで、友達の振り返りを共有し自分の考えと比較したり、新たな学びに気付いたりすることもできた。

●少人数の話し合いにおいて、友達からの意見を受け入れたり、他グループが作った映像のよいところを見つけたりすることができるようになってきたが、人数が増えたり、発表場面において意見交換したりすることが難しかった。また、自分の考えを伝えることに関しても、伝える、発表するポイントが限定されている中では話すことができるようになってきたが、友達の考えを聞いて自分がどう思うかをなかなか伝えられずに沈黙する場面が多々あった。少しずつ人数を増やしたグループ構成の中で話し合い活動を行ったり、発表場面において教師が仲立ちとなり、友達からの意見や感想に対して答える場面を設けたりしながら、みんなの前で自分の考えを伝えたり、受け入れたりする経験をさらに重ねていきたい。

●動画や映像、操作画面などの共有に関して、様々なアプリや機器を活用することでよりスムーズに共有することができることが分かった。しかし、機器動作に時間を要し、課題提出に時間が掛かったり、生徒が入力した文字が消えてしまったりすることがあった。事前にトラブルを想定して準備したり、アプリの研修をしたりしていても対処しきれないことも多かった。さらなる研修はもちろん、教師も十分にアプリや機器を使う経験を重ねていきたい。また、スクールワークの振り返りフォームを共有する際は、大きく表示させるために複数のアプリを組み合わせた。学習のねらいや目的に合わせて必要なアプリや機器を選択したり、事前に準備したりするなど時間を十分確保して活用していきたいと考える。

中学部３年生の取組

単元名	修学旅行に行こう

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・修学旅行を楽しみにし、進んで調べ学習に取り組む。
・修学旅行での思い出や、体験して印象深かった事柄を自分の言葉で教師や友達に伝えたり、体験したことや学んだことを、クイズや、掲示にまとめて発表したりする。

【単元目標】
・県内各地での学習を通して地元横手との違いに気付き、地元の良さを再発見する。
知　技　思判表　学　人
・修学旅行で調べたり、体験したりした秋田県各地の文化について自分の気持ちや感想を交えながら発表資料を作成する。　知　技　思判表
・交流会や発表会で、相手意識をもって修学旅行で体験したことや調べたことを伝える。
思判表　学　人
・集団行動でのきまりや公共施設の利用の仕方・マナーを守って行動する。　知　技

【研究授業の目標】
・修学旅行で体験したことをクイズにして出題する練習で、お互いの様子を見て、協力し合って出題したり、聞いている人が分かりやすいように、相手の様子に合わせてクイズを進める。
知　技　思判表

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞	
・報告会や交流会に期待感をもつことができるように、交流相手の写真を掲示したり、報告会の日程を掲示したりする。	・教室掲示で相手を常に意識でき、修学旅行を通して学んだことを相手に紹介するために、メモを取ったり、相手に分かりやすいように写真を撮ったりした方がよいなど、進んで学び取ろうという意欲や姿勢につながった。
・大曲支援学校との交流会に向けて、自分たちで学習を進めていけるように、学習予定表を掲示する。	・掲示した予定表を導入と振り返りやまとめで見る時間を設定する調べ学習やしおりの制作などの活動に見通しをもち、進んで学習活動に取り組んだ。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞	
・前時と本時がつながるように、生徒が自分で記入する学習予定表を用意する。	・これまでの学習と、本時、次時をつなげて考え、本時の学びが交流活動でどのように生かされていくのかというイメージをもちながら学習に取り組む姿が見られた。
・めあての本時に解決するべき部分（「分かるように」）に下線を引いて強調する。	・分かってもらえるためには「ゆっくり大きい声で」「タイミングを合わせてスライドを使う」などの具体的な目標を意識することができていた。だが、相手が「分からない」のはどういうときなのかや「ヒント」とはどういうものかということについて理解するのが難しい様子だった。

＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・すぐに振り返りをしてフィードバックできる場面を設定する。 ・まとめたり、発表したりしやすい様式のワークシートを用意する。	・気付いたことをメモする場面設定あることでワークシートをよく活用しながら学習を進めていた。 ・本時の学習を振り返り、表記できたときに満足感を得ることができていた。

【改善授業の目標】
・大曲支援学校の友達や２年生がクイズを楽しめるように、２人で協力して修学旅行クイズをしよう。　知　技　思判表

改善点（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
○クイズの発表練習では、２人の練習の様子を撮影し、クイズを読む係と、スライドを表示する係がタイミングを合わせて発表できるよう、ビデオを見る場面を設定した。	・実際の発表では生徒が１名欠席したが、練習場面では、２人でタイミングを合わせ、見やすい発表をしたり、楽しい雰囲気作りをしたりした。

【成果と課題】○：成果　●：課題
○修学旅行で体験したことや学んだことを、下級生や大曲支援学校の生徒にクイズ形式で紹介するという単元設定をした。発表する相手の写真を教室内に常に掲示することで、修学旅行を通して学んだことを相手に紹介するために、メモを取ったり、相手に分かりやすいように写真を撮ったりした方がよいなど、進んで学び取ろうとする意欲や姿勢につながった。また、発表用のスライド資料の作成で、簡単な言葉を使用したり、見せたい写真等を大きくしたりするなど相手を意識して工夫しながら作成することができた。
○修学旅行先と地元横手を比較し、横手の良さに気が付けるように、地図を使ってまとめる活動を行い、横手の良さを調べる際に文化や食という観点でまとめたことで、地元と県内各地を比較して考えやすくなった。
○発表場面では、肢体不自由の生徒も主体的に参加できるように、パソコンを使用して、スライド操作を担当してもらった。生徒に合った固めのスイッチ教材を使用することで、原稿を読む生徒とタイミングを合わせて自分たちで発表を進めることができた。
●学習の記録として、ＩＣＴ機器を活用して作成した発表資料等を比べて、教師が違いを教えることはできたが、改善したものを蓄積し、変化した部分を見比べてよい点を説明したり、発表資料の違いを分析したりすることまではできなかった。

４ 成果と課題（○：成果、●：課題、下線：ICT 活用）

（１）単元全体を見通す工夫

○学習への意欲や期待感をもつことができるように、自分たちが疑問に思ったことや知りたいことを学習のテーマに反映する授業構成にした。３年生は、一単位時間ごとに次時は何を学習するのか生徒自身で予定表に書き込むことで、前時、本時、次時とつなげて考えられるような場面を設定した。活動に見通しをもち、進んで学習に取り組む姿が見られた。

○「めざせ！お米博士」「もっと横手が好きになる」など、具体的な言葉を用いて、生徒に単元のゴールを示したことで、生徒は単元のゴールを具体的にイメージし、それを目指して意欲的に学習に取り組んだ。また、２年生では調べたことをたくさんの人に知ってもらう手段として、生徒にとって身近な「YouTube」での配信を提案した。「どのような点を工夫したら、見る人が分かりやすいか」「自分たちが調べたことをどのように伝えたらいいか」などを交流校が作成した動画を基に考え、自分たちで制作した動画を動画サイトに投稿したいという思いが学習意欲を高め、主体的に取り組む姿につながった。

●ＩＣＴ機器を用いる学習が続くと、「調べること」や「作ること」が手段から目的になってしまうことがある。そのため、単元のゴールを単元名に表したり、目指す姿を生徒に問い掛けたりするなど、何のための活動であるのかという単元のゴールを生徒が意識できるように毎時間確認する必要がある。

（２）学習の意味や意義を理解する工夫

○調べ学習を通して得た知識や学んだことを整理してまとめてから体験的な学習を行うことで、学びを実感しやすい環境設定をすることができた。また、体験的な学習の中で新しい知識に触れ、発見を得たことで、学ぶことの面白さを感じ取った様子が感想や振り返りなどから見られた。

○調べた内容を教室に掲示し、学習の積み重ねをすぐ見ることができるようにした。掲示物を見て、何を学んでいるか、何を学んだかを実感したりでき、新たな課題について予想する際のヒントにもなった。また、掲示物を他学年の友達や教師に見てもらうことで、より学習したことに対する達成感につながったと考える。

○単元のまとめでは、他校の生徒、他学年の友達や教師、保護者、地域の方々など、色々な相手に学びを伝えるために発表会を行ったり、動画サイトに掲載したりした。相手から直接評価してもらう場面が設定されたことによって、「ここは必ず伝えたい」「こんな方法でやってみたい」など、学習したことを整理していく姿につながった。そして、学びを生かしながら意欲的に動画編集やスライド資料作成に取り組むことができた。さらに、各学年が違う視点から「横手市」について学んだことを発表したことで、より自分たちの生活に関する事柄に関心をもつことができるようになったと考える。

○１年生は発表資料を作成する際に、表計算アプリ「Numbers」を活用した。数学で気温をグラフにすると比較しやすいということを学習したグループが、米の収穫量をグラフで表した。「数字だけよりも、グラフの方が分かりやすい」と見る人のことを考えて作成している姿が見られた。各教科で実践したＩＣＴ機器の活用が、合わせた指導にもつながった。（図１）

●導入では、提示した内容や具体例から生徒が考える場面を設定した実践が多かった。「分かりにくいのはなぜ？」「どうしたらいい？」などについて自由に発言させる中で、「じゃあ、今日は○○しよう」「△△を取り入れてみよう」など、生徒にとって「自分事」として感じる場面がより増えるようにしていきたい。また、「相手に分かりやすい」とはどういうことなのか、「分からない」はどういう状況なのか、「クイズのヒントを出そう」の中

の「ヒントとはどういう意味なのか」のように、言葉の意味を理解しているか確認する必要がある。

生徒の発言を基にめあてを設定することで、学習の目的を言語化し、意識しやすくなると考える。教師のねらいに沿った発言を引き出せるような発問の仕方が求められる。さらに、各教科のベースとなる言語活動を充実させ、個々に応じた意思表出につなげたい。

（３）ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫

○振り返りのポイントを絞ったツールとして「かまくらカード」を作成した（図２）。教師にとっては、振り返りで生徒に望む姿をイメージし、そこからめあてや課題を設定することでめあてと振り返りの整合性を図ることができるためのツールとして、生徒にとっては、学習を具体的に振り返るためのヒントとして活用するツールとなるような内容にした。

○「かまくらカード」は生徒が手元で確認できるものと黒板の掲示用を作成した。生徒は、繰り返し取り組むことで、どんなことを考えたか、学んだか自分の言葉で表現できる生徒が増えた。また、振り返りの活動になると、自分から手持ちのカードを準備する姿が見られるようになった。

手持ちのカードを見ながら振り返りを話すだけではなく、ワークシートに「かまくらカード」を組み込んだり、キーワードごとの振り返りシートを作成したりと、生徒の実態や学習の状況に応じて、活用の幅が広がった。（図３）

「スクールワーク」を活用し、「Pages」で作った「かまくらカード」での振り返りも実践した。こちらでは、漢字の字形を何度も整えたり、助詞を間違えたりするなど、様々な理由から書くことに時間が要する生徒が、入力式にしたことで内容を考えることに集中することができ、自分の考えをまとめやすくなった。そのため、振り返りの時間の確保にもつながった。さらに、「スクールワーク」に提出された「かまくらカード」を電子黒板に掲示することで、友達の考えを共有したり、比較したりすることができた。

○生活単元学習以外の学習の振り返りにも「かまくらカード」を活用した事例も複数あった。国語では、中学部で取り組んでいるビブリオバトルの振り返りの中で、自分の発表を振り返ったり、友達の発表と比較したりする際に活用していた。

●「かまくらカード」が定着するまでは、「かまくら」のどれを使うか、学習の始めに提示し、振り返りの際に再度確認する流れの方が分かりやすい。生徒が何を意識して学習に取り組むか理解していると、より具体的な振り返りになると考えられる。また、教師も活動の中で意識させやすい。提示のタイミングや活用方法について、教材研究に努める必要がある。

●振り返りの場面では、発言する生徒が偏ることが多い。学習した内容や自分の考えを言語化することが難しい生徒に対して、言語以外の表現で振り返りする方法を模索する必要がある。複数の選択肢から選んだり、教師が生徒の発言をさらに深めたりするなど、生徒にとって「発表しただけ」の振り返りにならないように留意したい。

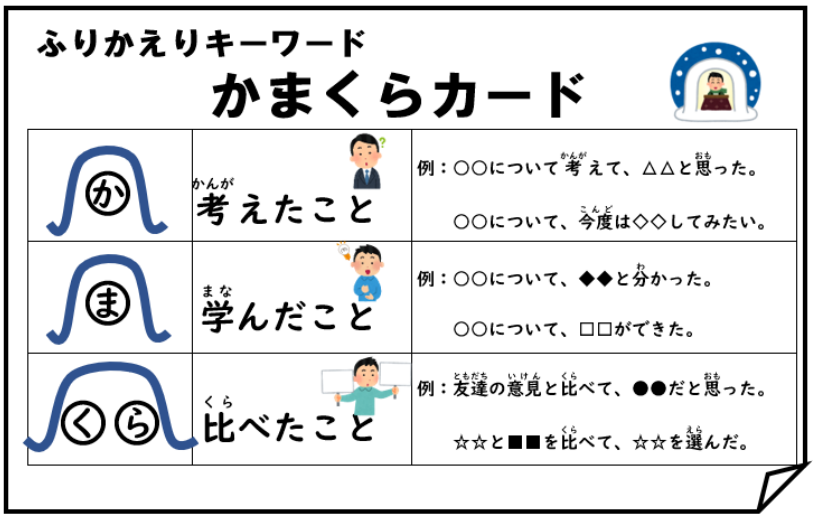


図５　かまくらカード

図６　キーワードごとの振り返りシート

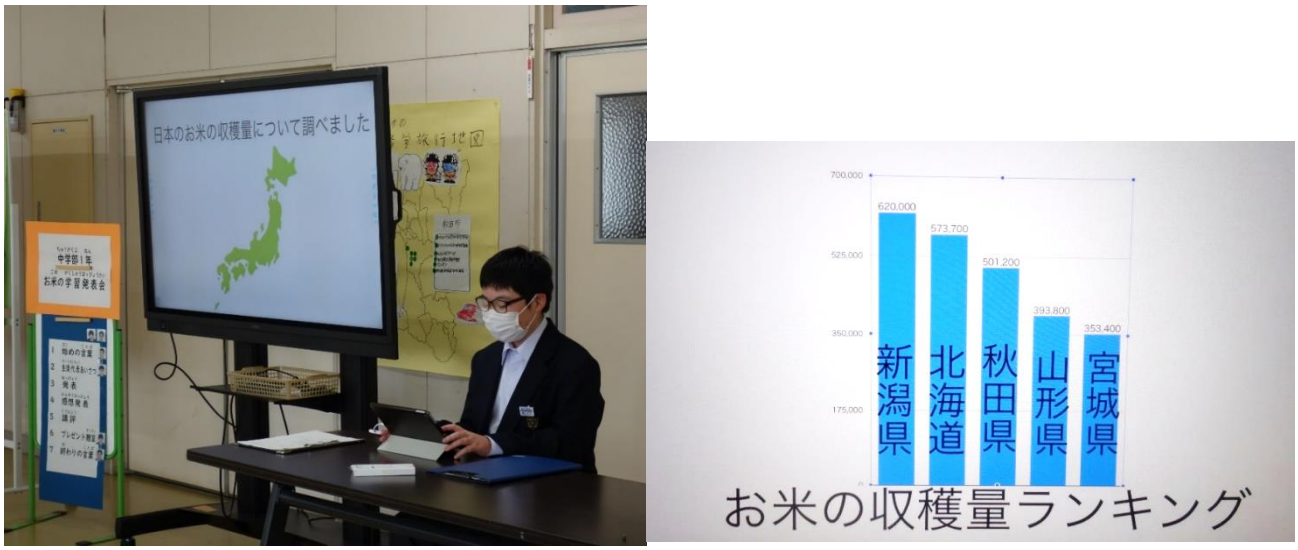


図７　表計算アプリ「Numbers」の活用

Ⅲ　高等部の実践

1　生徒の実態

現在、高等部には46名が在籍しており、言語のみでの理解が難しいが、写真やイラスト、動画などを活用し視覚的に提示することで理解が深まる生徒がいる一方で、書字に対して苦手意識のある生徒が多くいる。国語科、数学科、職業科、家庭科に関しては、どの学年も個々の実態や将来の進路希望に応じたグループ編成がされている。その中でも職業科では、国語科と数学科で培った基礎的な学習内容をさらに発展させたり、進路希望に沿った経験的な活動を取り入れたり、実際の生活に関わる課題を取り上げたりして、将来の社会生活を送るために望ましい知識を得たり、望ましい態度が育ってきたり、技能が高まったりしている。

また、昨年度高等部では自立活動における ICT の活用を図り、タブレット型端末等を使用した学習が定着したことで、どの生徒もタブレット型端末を始めとする ICT 機器を活用した学習に意欲的である。今年度は、職業科を中心として、効果的な ICT の活用により、集団の中で学びを深めたり、主体的に学んだりしているところである。

2　単元検討会の様子（・は単元全体に関わる検討及び改善事項 ○はＩＣＴ活用に関する内容）

1年職業 1グループ	「様々な職業と将来の夢②～働く先輩から学ぼう～」（総時数20時間） ・学習内容について、単元目標が達成できる学習活動を整理し、次単元との関連付けを図る。 ○生徒のスキル（既習の学習）を考慮し、ＩＣＴ活用が本当に必要かどうか、使用することで期待する効果や意義を明確にして活用する。
2年職業 1グループ	「働く人の生活④～職業生活に必要な力とは～」（総時数7時間） ・働く人に近づくために、どうしていくのかということを学習する単元であり、単元を見通すことと学習の意義を見通すことを切り離しては考えられない。なぜ今、この時期にこの学習をしているのか、その意義と絡めて見通しをもてるよう、年間学習計画の中での現在の立ち位置を示し、卒業後の生活と絡めて学習を展開していくこと。 ○みんなで一つのものを検証し作成する活動には、ロイロノートよりジャムボードの方が効果的ではないか。
3年職業 2グループ	「社会人になるために②」（総時数9時間） ・ネットワーク会議の内容をどう理解し、その後に生かすか、どう工夫するかをできるだけ具体的にする。 ○「考えてまとめる」、「内容を振り返る」ために使用する等の意図に応じて、どのようなＩＣＴの機能やアプリを使うかまで具体的にする。

３ 各学級の実践

高等部１学年職業科１グループの取組

単元名	様々な職業と将来の夢②働く先輩から学ぼう①

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
「職場で働くために必要な力」について、職場見学で見聞きしてきたことを基に考えたり、発言したりする。

【単元目標】
・本校卒業生の進路先を調べたり、職場見学をしたりすることを通して、様々な就職先、仕事内容、働き方等を知り、卒業後の働く生活へのイメージをもつ。知　技
・職場見学で見聞きしたことや先輩の実習先について調べて学んだことをもとにし、様々な職場で働くために必要な力やその理由について考える。思判表
・様々な職場の「働くために必要な力」や自分ができることをもとに、現時点での自分の進路や進路の実現に向けて頑張りたいことを考え、学校生活で実践しようとする。学　人

【研究授業の目標】
・見学先の「働くために必要な力」について、仕事内容に着目して、理由を考え、どうしてその力が必要なのかに気付き、まとめる。思判表
・職場見学の発表を見聞きし、仕事の内容や働き方、「働くために必要な力」について知る。知　技

三つの視点の工夫（〇は ICT 活用）	生徒の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ 〇学習予定を電子黒板で提示する。 〇卒業までのイメージ図を電子黒板で掲示する。	・電子黒板で提示することで、生徒の注目を促し、単元の大まかな見通しや卒業までのイメージをもたせることはできた。 ・学習予定は、電子黒板の画面だけでなく、印刷した物を黒板に掲示する必要があった。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ・めあてを穴埋めにし、生徒自身が本時の学習について主体的に考えられるようにする。	・「めあて」を穴埋めにしたことで、生徒自身が何を学ぶのかを考え、自分の言葉で伝えることができた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・自分の考えを伝えたり、友達の意見を聞いたりする時間を設定する。 ・ワークシートによる学習の積み重ね 	・小グループにしたことで、集団では自分から発言するのが苦手な生徒も自分の考えを友達に伝えることができていた。 ・働く場面をイメージできるように、もっと動画や映像を活用しても良かった。 ・1 時間の学習内容が多く、メインの話し合い活動に十分時間を取ることができなかった。めあてを達成するためにも、話し合い活動の時間の確保が必要だった。 ・ワークシートに記入する量が多く、生徒によっては書き切れないで終わってしまっていた。書く内容の精選、ワークシートの工夫が必要だった。

【改善授業の目標】
・後期実習での友達の成果や課題を知り、課題を解決する方法を話し合いながら考える。
思判表
・自分の考えや友達の意見をもとに、自分に合った課題解決の方法を選び、学校生活で実践しようとする。 学　人

改善点（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
・学習への見通しが視覚的に分かるように、黒板に掲示しておく。 ○状況をイメージできるようなイラストを提示する。 ・グループの意見をホワイトボードに記入し、黒板に掲示する。 ・話し合うときのマニュアルやタイマーを準備する。 	・めあて、学習活動を分かりやすく黒板に掲示したことで、見通しをもって学習に取り組むことができていた。 ・イラストを掲示することで、自分の経験を思い出して発言する生徒がいた。 ・ホワイトボードを活用したことで、書くことが苦手な生徒の負担が減り、話合い活動に集中することができた。 ・司会になった生徒に司会原稿を渡したことで、スムーズに進行することができていた。また、タイマーを使い、話合いの時間を設定したことで、時間を意識しながら自分たちで話合いを進めていくことができていた。

【成果と課題】○：成果　●：課題
○話合い活動を繰り返し行ったことで、自分の意見だけでなく、友達の意見を受け入れたり、共感したりすることができるようになってきた。
○電子黒板やタブレット型端末を活用した学習は、生徒の興味関心が高く、授業への意欲が高まった。また、言葉だけではイメージをもつことが苦手な生徒にとっては、映像を提示することが有効だった。
●ICT の活用が、生徒の考えを引き出し、めあてに向かって学習を進めていくための手段になるように、単元を検討する際にいつ、どの場面で ICT を活用するのかを十分に検討して活用していきたいと感じた。

高等部２学年職業１グループの取組

単元名	働く人の生活④～職業生活に必要な力とは～

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・卒業後の生活に関心をもち、卒業した先輩のアンケートをシートにまとめている。

【単元目標】
(1)先輩から卒業後の生活について聞き、職業生活と学校生活との違いを知る。 知　技
(2)先輩の働く生活を知り、職業生活に必要な力を考える。思判表
(3)自分の生活の課題を見つけ、これからの生活に生かしていこうとする意欲や態度を養う。
学　人

【研究授業の目標】
・卒業した先輩からのアンケートの回答をシートにまとめることで、先輩たちの職業生活について知り、卒業後の職業生活に関心をもつ。知　技　思判表

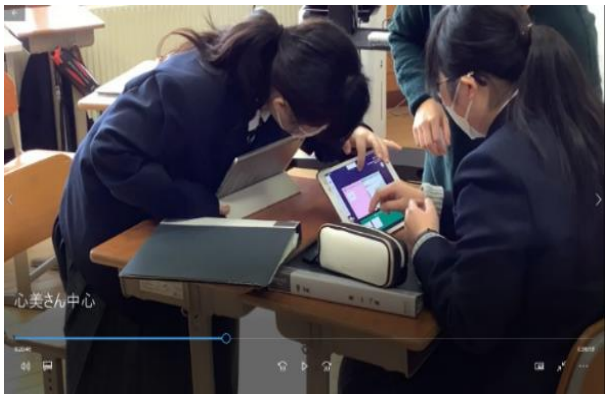
三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞	
・高等部２年生は、高等部生活のどの位置にいるかを確認できるように、入学から卒業までの表を提示する。	・高等部３年間の表を掲示することで、２年生の位置を視覚的に把握することができた。また現在は卒業後、働くための準備期間であることを確認することができた。
・学習の流れや単元のゴールを提示する。	・学習に見通しをもち、学習活動に意欲的に取り組むことができた。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞	
・職業生活に必要な力をアンケートの項目に沿い、四つのカテゴリーに分け提示する。	・職業生活に必要な力について、整理して考えることができた。
・自分と先輩の生活を比較する場面を設定する。	・身近な先輩の生活を知ることで、職業生活に関心をもち、学習に取り組むことができた。
○図や絵を用いて、視覚的に生活について比較できるようにする。	○ロイロノート上のシンキングツール（Ｘチャート）を使用し、先輩のアンケートをまとめたり、色別に項目を分けたりすることで職業生活に必要な力を視覚的に比較することができた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞	
○友達の考えを自分の生活にも生かせるように、まとめや振り返りを友達と共有する。	○共有ノートを使用し、個々のノートを一つにまとめて提示した。先輩の回答を共有することができ、他の先輩の生活についても知ることができた。

＜公開研究会の実践＞

【生徒の姿と評価】
・睡眠の大切さや睡眠が不足すると起こることについて、インターネットで情報を検索した。インターネット検索は普段から行っている活動であり、生徒は意欲的に情報を集めていた。
・インターネット検索では、ロイロノート上の共有ノートに検索した結果をまとめられるようにした。生徒は検索したことをカードに入力したり、スクリーンショットや編集機能を活用したりして、共有ノート上に調べたことを公開することで、情報を共有したり、まとめたりすることができた。

【指導助言】
◇課題を見出すにはどういった工夫があるか。
・睡眠とこれからの仕事との関わり、つながりを自分の課題として捉えるということがポイントだった。
・課題を見出す、自分のこととしてこの課題を捉えるということは、この単元、授業を成功に導くうえで非常に重要なポイントだった。
・実習とこの授業を行う時期も考慮するポイントになるのではないか。
◇ロイロノートを生かして
・様々な意見、例えば睡眠不足の影響として、健康の問題や様々な問題が取り上げられたことをそれを仕事という視点で捉え直す、そのような協同で行う活動があっても一定の効果があったかもしれない。
・タブレットを見せ合って自分の意見を表現する、電子黒板で 3 人で共同で解決してみる、というような場面も考えられたのではないか。
◇生徒が今、思考が始まったなというその瞬間の先生の発問について
・その日の授業のめあて、目標に直結する主となる発問（主発問）を改めて考えておく。
・主発問を考える、そしてそれを授業の中で発するということも情報機器の活用、ICT の活用という上では非常に重要になるのではないか。
※生徒が課題を見出すということ、そこから教師の発問によって生徒の思考を促していくということもこれらは連動して大切なことなのではないか。
※各学校においてこの ICT 機器、そしてこの情報機器の活用というところをもう一度確認するということも有効なことではないか。

【成果と課題】○：成果　●課題
○身近な先輩の職業生活を扱うことで、生徒が職業生活に関心をもち、意欲的に学習に取り組むことができた。
○先輩と自分の生活を比較したり、インターネット検索で睡眠についての情報を得たりすることで、自分の生活を振り返り、今後の生活について考えることができた。
○書字が苦手な生徒や、字体にこだわりをもっている生徒に対して、タブレット端末で入力することで、書字の時間が短縮でき、考える時間を増やすことができた。
○ロイロノートの使用は、タブレット端末を使用することで学習への興味関心を引き出したり、学習内容や自分の意見を生徒同士で共有したりするために有効だった。
●睡眠がもたらす効果や、睡眠不足の弊害について、インターネット検索で調べたことをまとめるために、生徒が考える時間の確保や手立ての工夫が必要だった。
●インターネット検索では、膨大なサイトの中から必要な情報を取り出すことは難しい。事前にサイトを指定するなど生徒が情報を取り出しやすくする工夫が必要だった。



高等部３年職業２グループの取組

単元名	社会人になるために②

【学びを実感し、主体的に学ぶ姿】
・卒業後の生活を具体的にイメージし、今どんなことに取り組む必要があるのかを考えてリストアップする。

【単元目標】
・卒業後に自分たちを支えてくれる機関があることが分かり、その役割を知る。知　技
・進路や卒業後の生活などの希望を実現するためにどんなことに取り組んでいくかを具体的に考えてまとめる。　思判表
・卒業後の生活を具体的にイメージして楽しみや目標をもつ。　学　人

【研究授業の目標】
・移行支援ネットワーク会議を振り返り、これから取り組んでいくことを考えてまとめる。
思判表

三つの視点の工夫（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
＜単元全体を見通す工夫＞ ○実習の写真や昨年度の写真、先輩の写真などを提示する。 ・学習計画を提示する。	・昨年度の卒業生の進路先での写真を提示することで、在学中のイメージとの違いを話したり、自分たちの１年後についてイメージをもったりすることができていた。 ・学習計画を提示することで、先の学習の見通しをもって進めることができていた。提示を忘れることもあったので、学習の最初と最後で学習計画を確認することを徹底したい。
＜学習の意味や意義を理解する工夫＞ ・卒業までの残りの日数や実習など進路に関わる予定を提示する。 ・自分の希望ややりたいことに優先順位をつけたり、実現のためにどんなことが必要かを考えたりする場面を設定する。	・実習や進路に関わる行事の予定を提示することで、進路の希望先や卒業後の利用を見据えた実習のために、どの時点までに何をすればいいかを大まかにつかむことができていた。 ・進路先だけでなく、卒業後の生活でやってみたいことをリストアップしたり、優先順位をつけたりすることで、自分の思いを整理して今何が必要かを考えることができた。
＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫＞ ・展開での活動がスムーズに取り組めるように、授業の導入で全体に向けて発問をしたり、具体例を出したりしてから、個で考える時間を設定する。 ・まとめでは、個で考えたことを全体に向けて発表したり、共有したりする。 ・振り返りの場面で、友達の意見を聞いて気付いたことや、考えたことをメモしたり、発表したりする。	・全体→個→全体の流れで考えたり、発表したりする時間を設定することで、どんな方向性で意見を言ったり、考えをまとめたりすればいいかが分かって課題に取り組むことができた。 ・お互いの意見や考えを共有することで、それをきっかけに自分の考えを広げたり、深めたりすることができた。

【改善授業の目標】
・進路希望や、卒業後にやりたいことを実現させるために、どの場面でどんなことに取り組んで行くかを考えてまとめる。思判表

改善点（○は ICT 活用）	生徒の姿と評価
・全体→個→全体の流れで考える時間をしっかりととれる時間配分。	・時間を多くとったことで、個々でじっくり考えることができていた。

【成果と課題】○：成果　●：課題
○タブレット型端末は生徒が興味をもって扱うので、意欲的に学習に取り組んでいる。
●ICT を使わなければいけない、どうやって使うかを考えてしまっているので、必要だから使う、今やっていることがより効果的にできるから使うというように意識を変えていきたい。

4　成果と課題（○：成果、●：課題、下線：ICT 活用）

（1）単元全体を見通す工夫

○単元計画を提示することで、単元の目標や本時の学習に見通しをもって取り組むことができた。

○生徒にとって身近な課題や、知っている先輩、実習も含めた実際に経験したことを題材として取り上げることで、卒業後の生活と現在の生活を結びつけて考えることができた。

●ICT 機器を使用してワークシートなどを提示する場合、ページを移動すると学習の履歴や前に提示したことが手元に残らないことがあり、プリント等による他の掲示方法を併用する必要があった。

（2）学習の意味や意義を理解する工夫

○イラストを提示したり、時系列で卒業後の姿や生活をイメージできるような工夫をしたりすることで、生徒自身が将来の自分にとって必要なことであるという意識をもって学習に臨んでいた。

○めあてや課題の提示の仕方（穴埋めの部分を作る）、発問の仕方等において、生徒自身が考える場面を設定したり、話合い活動を取り入れたりすることで、学習内容への理解が深まった。

●卒業後の生活と現在の生活を結びつけて考える際に、生活への反映に至らずに授業内で終わってしまったり、知識の習得のみになってしまったりすることがあった。

（3）ねらい、めあて、振り返りの在り方の工夫

○スモールステップで設定しためあてを提示することで、１時間ごとの学びを生徒自身が実感しやすくなった。

○振り返りにおいて、タブレット型端末のアプリ等を使用することで、書字に対して苦手意識のある生徒も自分の言葉で表現することができるようになった。

●生徒がより主体的に学ぶために、教師が生徒の言葉を生かして授業を組み立てていく授業づくりが難しかった。

Ⅳ　有効なＩＣＴ活用に向けての取組（「ｅ−ＡＫＩＴＡＩＣＴ学び推進事業」ＩＣＴ活用推進モデル校の取組）

１　取組以前（令和２年度）のＩＣＴ活用における課題

（１）令和２年度後期学校評価から

取組以前の職員のＩＣＴ活用についての意識や取組の状況を示すものとして、令和２年度の本校職員による後期学校評価のＩＣＴ活用に関わる項目に着目すると、タブレット型端末の活用、職員研修、環境整備ともに「よくできている、強くその通りだと思う」というＡ評価は低い値を示している（表１）。

記述による自由回答では、「台数の充実やＷｉ－Ｆｉ環境の整備」や「ｅ－ＡＫＩＴＡ　ＩＣＴ学び推進プラン事業による機器整備への期待」、「職員研修の有効性の実感」や「不登校傾向のある生徒への活用などの具体的な活用事例へのニーズ」など、今後の取組につながる課題やニーズなど様々な回答が挙げられた。

表１　令和２年度後期学校評価ＩＣＴ関連項目

重点事項	取組の具体（評価項目）	Ａ評価の割合
学習活動の推進	児童生徒の障害特性に応じたタブレット型端末等の学習活用	15.0%
	教職員の実践力向上のための職員研修	16.1%
	ＩＣＴを効果的に活用するための環境整備	8.1%

（２）授業改善の取組から

タブレット型端末（ｉＰａｄ）が平成 28 年度に導入されてから、ｉＰａｄを活用した授業実践が増加した。その中で、学習のまとめや振り返りの場面で動画を活用するという実践が多く見られたが、画角を固定して撮影した映像を一通り再生して視聴するだけという活用が目立ち、児童生徒のねらいに迫る振り返りやまとめにつながらないという意見が授業研究会などで出され、ＩＣＴ活用の意図を明確にした授業づくりの課題が挙げられた。

他にも、ワークシートやプリントを使用した学習で、誤字脱字などの修正に労力が取られ、考えや意見を書くことに苦手さを感じる児童生徒がいるという意見や、話合い活動で、考えを整理し、口頭で説明することに苦手さをもつ児童生徒がいるという意見があった。こうした書字や話合い活動などの課題に対して、ＩＣＴを効果的に活用することが課題の解決につながるのではないかということが挙げられた。

（３）ＩＣＴ活用の視点とＩＣＴ活用のキーワードの設定

本事業を推進するに当たって、前述した授業改善の課題等を考慮して、令和３年度当初に文部科学省の「特別支援教育におけるＩＣＴ活用の視点の１、２」を基にして、本校のＩＣＴ活用の視点を設定した。文部科学省の視点１を二つに分け、「教科等の指導の効果を高める」視点、「情報活用能力の育成を図る」視点とし、視点２を「障害による困難さの改善・克服を目指す」視点とした（表２）。また、本校のＩＣＴ活用推進の方針を示すキーワードを設定した（表３）。

表２　本校のＩＣＴ活用の視点

視点１－①	「教科等の指導の効果を高める」視点
視点１－②	「情報活用能力の育成を図る」視点
視点２	「障害による困難さの改善・克服を目指す」視点

表３　本校のＩＣＴ活用推進のキーワード

「どうして（シーティー）？　ＩＣＴ」	＝	活用の意図を明確にする
「みなおして（シーティー）！　ＩＣＴ」	＝	校内のこれまでの実践成果を生かす
「みんなであいして（ＩＣＴ）❤　ＩＣＴ」	＝	多角的な視点で、気負わず使う

２　ＩＣＴ環境の整備、活用状況

（１）ＩＣＴ機器の導入状況

本校の主な機器の導入状況は、表４のとおりである。令和２年度以前に導入した機器と「ｅ－ＡＫＩＴＡ　ＩＣＴ学び推進事業」によって導入された機器の活用を基本に、遠隔教育の推進や児童生徒の情報活用能力の育成などに必要な物品を適宜購入してきた。

表４　ＩＣＴ機器の導入状況（主な機器）

機　器　名	個　数	備　考
プロジェクター	２台	小中学部棟１台、高等部棟１台
大型モニター	１台	小中学部棟１台
タブレット型端末（ｉＰａｄ）	６台	各学部３台
タブレット型端末（ｉＰａｄ）	84 台	小学部各学級２台、中学部・高等部生徒一人１台
電子黒板	２台	小中学部棟１台、高等部棟１台
高速無線ＬＡＮルータ	24 台	ｅ－ＡＫＩＴＡ　ＩＣＴ学び推進事業により導入
書画カメラ	３台	各学部１台
ｉＰａｄ用スイッチアダプタ	３台	各学部１台
ウェブカメラ、ヘッドセット	11 台	
無線マイク（ｉＰａｄ用）	３台	

（２）ｉＰａｄ用アプリケーションの導入状況

令和３年度、４年度に職員の希望を基に導入したｉＰａｄ用のアプリケーション（以下、アプリ）を図１に示した。数値は導入したアプリの種類数を示している。分類は本校独自のものである。

令和３年度は試行の年度であるという職員の思いを反映してか、多種多様のアプリの導入希望があった。令和３年度は 71 種類、令和４年度は新たに 21 種類の導入希望があり、実際に導入を行った。

令和４年度は「ロイロノートスクール」や「クラスルーム」、「Google スライド」などオンラインで教材などを共有できる学習支援アプリの導入が目立った（令和３年度は０種類、令和４年度は５種類）。

２か年を通して、特別支援教育用や一般の教育用、幼児などの知育用アプリの導入希望が合わせて約６割を占めた。

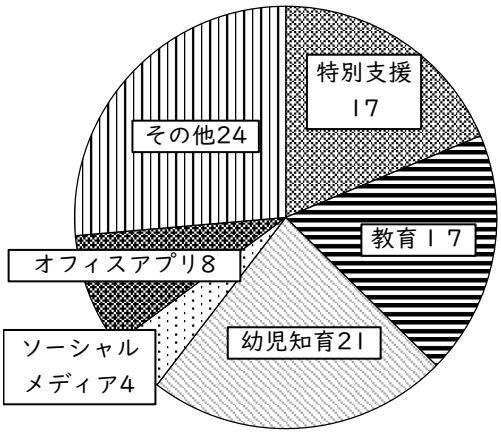


図１　ｉＰａｄ用アプリの導入状況
（令和３、４年度）

３　研修と実践をつなぐ取組

図２は本校における職員研修実施から授業実践、事例の共有・蓄積までの流れを示したものである。この図に沿って、取組を報告する。

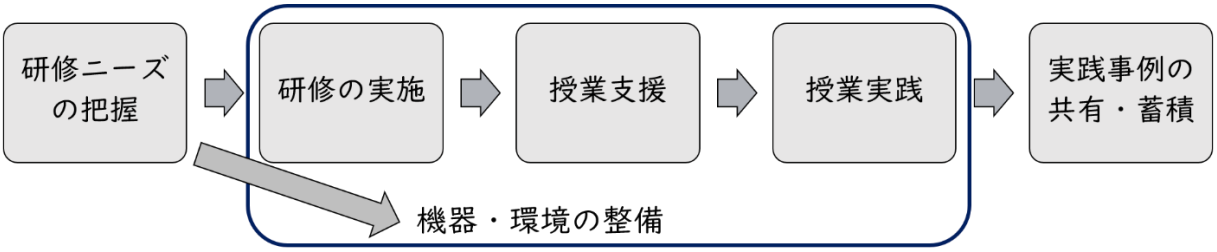


図２　研修と実践をつなぐ流れ図

（１）研修ニーズの把握

研修ニーズの把握は、職員からのＩＣＴ活用相談や支援依頼を基に行った。昨年度からＩＣＴ活用相談窓口を設置し、ＩＣＴ活用推進リーダーが中心となって対応してきた。令和３年度から４年度末までに 150 件を超える相談・依頼が寄せられ、この相談内容、支援依頼の中から、研修内容を決定した。

ニーズから研修内容を決定した実例としては、「生徒の発言を一覧にして、モニターに表示したい」「書字や発表の苦手な生徒が自分の意思を伝えるにはどうしたらよいか」などの支援依頼を基に、ロイロノートスクールなどの授業支援アプリの研修を企画した事例や、「簡単なボタン操作でｉＰａｄの音声を再生したい」「生徒が自発的に動かすことができる頭の動きだけでパソコンで印刷をできるようにしたい」などの依頼を受け、入出力支援機器の研修を企画した事例など、同時期に類似の相談や支援依頼を受けたものを中心に研修ニーズが高いと判断し、研修を設定した。

（２）機器や環境の整備

研修ニーズを把握し研修を実施する時期に合わせて、関連のあるＩＣＴ機器やアプリケーションを整備した。

実例として、ロイロノートスクールの研修を行った時期に合わせて、ロイロノートスクールの試用を開始し、全校児童生徒と職員のアカウントを作成した取組や、入出力・意思表示支援機器の研修に合わせて、各種スイッチ教材やスイッチ対応マウスなどの機器を充実させた取組などが挙げられる。

（３）研修の実施

研修は、全校職員対象、希望者参加型、相談者のみなど、研修の内容に応じて規模を調整した。また、他校の職員や秋田県総合教育センターの出前講座などの外部資源や、ｉＰａｄのアプリの操作に精通した本校職員などの内部資源を積極的に活用した。実施した主な研修については、表５のとおりである。

表５　主な職員研修の実施状況

実施日 (令和4、5年)	研修テーマ	研　修　内　容
6月 14 日	Ｇｏｏｇｌｅ スライド	・依頼のあった学級の担任を対象にＩＣＴ活用推進リーダーが講師となり、実施した。 ・Ｇｏｏｇｌｅスライドの基本的な操作や共同編集の方法について研修を行った。
6月 27 日	ロイロノート スクール	・全校職員を対象に、先行実践校である大曲支援学校せんぼく校の深川亮教諭を講師に招き、実施した。 ・せんぼく校の事例紹介とロイロノートスクールの操作演習を行った。
8月４日	情報モラル 教育の進め方	・県総合教育センターの学校支援講座を受講し、全校研修会として実施した。 ・情報モラル教育の実際について、演習を中心に学んだ。
8月 22 日	入出力・意思 表示支援機器	・ＶＯＣＡ（音声出力型のコミュニケーション機器）やスイッチ教材、視線入力装置などについてＩＣＴ活用推進リーダーが講師となり、希望者対象研修として実施した。 ・視線入力装置（Ｔｏｂｉｉ　Ｅｙｅ　Ｔｒａｃｋｅｒ５）は秋田きらり支援学校より借用した。
1月 10 日	クラスルーム スクールワーク	・アプリの活用に精通した本校職員を講師に、希望者対象研修として実施した ・授業支援アプリのＡｐｐｌｅクラスルームとスクールワークの基本的機能の紹介と、操作演習を行った。

（４）授業支援

研修後に「自分の実践に研修内容を生かしたい」という職員の相談や支援の依頼を受け、機器の設定や使用方法の説明などの支援を行った。支援者が実際に授業に参加し、児童生徒への指導の補助を行うという取組も行った。

中学部２年の生活単元学習で実施した授業支援では、プレゼンテーション作成アプリのＧｏｏｇｌｅスライドを使用して、校外学習での学びを画面を共有しながらまとめ、発表する学習に支援者が授業に参加し、スライドの作成について、指導の補助に当たった（図３）。また、高等部１年の作業学習では、肢体不自由を併せもつ生徒が校内実習で封筒の型紙を印刷する学習で、支援者が授業を参観し、適切なスイッチ教材の提案を行い、機器の準備を行った（図４）。

図３　中学部２年　生活単元学習

図４　高等部１年　作業学習

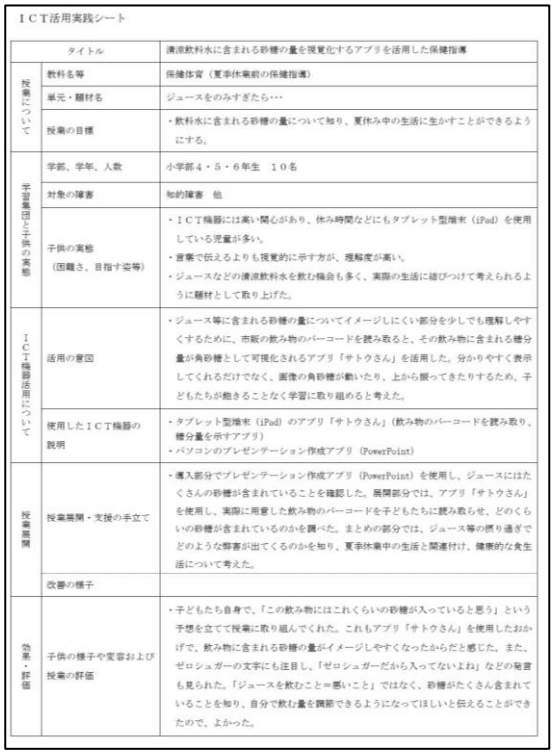
（５）授業実践

計画的に全校で一貫した授業改善を行うため、研究部と連携し、全校研究として進めた。詳細は第一部「全校研究」、第二部「各学部の実践」に記載している。

（６）実践事例の共有・蓄積

事例の蓄積のために、ＩＣＴ活用実践シート（図５）を集約し、ＩＣＴ活用事例集を作成した。ＩＣＴ活用事例集は、形式や名称を変えながら、平成２８年度から作成している。令和３年度、４年度のＩＣＴ活用事例集、ＩＣＴ活用推進だよりは本校のホームページに掲載している（図６）。

また、授業支援依頼のあった授業を中心に、活用状況を写真や動画で撮影し、活用の意図や成果、効果を校内報（ＩＣＴ活用推進だより）や編集した動画などで紹介し、実践事例の共有を行った。



ＩＣＴ活用実践シート

タイトル		清涼飲料水に含まれる砂糖の量を視覚化するアプリを活用した保健指導
授業について	教科名等	保健体育（夏季休業前の保健指導）
	単元・題材名	ジュースをのみすぎたら…
	授業の目標	・飲料水に含まれる砂糖の量について知り、夏休み中の生活に生かすことができるようにする。
学習集団と子供の実態	学部、学年、人数	小学部４・５・６年生　１０名
	対象の障害	知的障害　他
	子供の実態（困難さ、目指す姿等）	・ＩＣＴ機器には高い関心があり、休み時間などにもタブレット型端末（iPad）を使用している児童が多い。 ・言葉で伝えるよりも視覚的に示す方が、理解度が高い。 ・ジュースなどの清涼飲料水を飲む機会も多く、実際の生活に結びつけて考えられるように題材として取り上げた。
ＩＣＴ機器活用について	活用の意図	・ジュース等に含まれる砂糖の量についてイメージしにくい部分を少しでも理解しやすくするために、市販の飲み物のバーコードを読み取ると、その飲み物に含まれる糖分量が角砂糖として可視化されるアプリ「サトウさん」を活用した。分かりやすく表示してくれるだけでなく、画像の角砂糖が動いたり、上から振ってきたりするため、子どもたちが飽きることなく学習に取り組めると考えた。
	使用したＩＣＴ機器の説明	・タブレット型端末（iPad）のアプリ「サトウさん」（飲み物のバーコードを読み取り、糖分量を示すアプリ） ・パソコンのプレゼンテーション作成アプリ（PowerPoint）
授業展開	授業展開・支援の手立て	・導入部分でプレゼンテーション作成アプリ（PowerPoint）を使用し、ジュースにはたくさんの砂糖が含まれていることを確認した。展開部分では、アプリ「サトウさん」を使用し、実際に用意した飲み物のバーコードを子どもたちに読み取らせ、どのくらいの砂糖が含まれているのかを調べた。まとめの部分では、ジュース等の摂り過ぎでどのような弊害が出てくるのかを知り、夏季休業中の生活と関連付け、健康的な食生活について考えた。
	改善の様子	
効果・評価	子供の様子や変容および授業の評価	・子どもたち自身で、「この飲み物にはこれくらいの砂糖が入っていると思う」という予想を立てて授業に取り組んでくれた。これもアプリ「サトウさん」を使用したおかげで、飲み物に含まれる砂糖の量がイメージしやすくなったからだと感じた。また、ゼロシュガーの文字にも注目し、「ゼロシュガーだから入ってないよね」などの発言も見られた。「ジュースを飲むこと＝悪いこと」ではなく、砂糖がたくさん含まれていることを知り、自分で飲む量を調節できるようになってほしいと伝えることができたので、よかった。

図５　ＩＣＴ活用実践シート

本校のホームページアドレス
http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp/

ホームページのＱＲコード

図６　本校ホームページアドレス

４　取り組みの成果と課題

（１）実践の様子と児童生徒の変容

本校のＩＣＴ活用の三つの視点に沿って、１例ずつ報告する（表６、７、８）。

表６　実践の様子と児童生徒の変容（視点１－①）

ＩＣＴ活用の視点	教科等の指導の効果を高める		
教科名等	職業科	学部・学年	高等部１年
授業の概要	後期実習での様子(動画)を電子黒板に映し出して提示し、友達の良いところを見付けて評価し合うという学習である。		
ＩＣＴ活用の意図	プリント記入では、誤字脱字の修正などで時間が取られていたため、友達の良いところを考えることに集中できるように、 ↓ 様々な入力方法が選択できることで書字の負担を減らすことができ、意見も共有しやすい学習支援アプリ「ロイロノートスクール」を使用した。		
活用の効果・生徒の変容	・キーボードで入力したり、例文を引用したりすることで、記入の時間が短縮された。また、予測変換機能を使い、漢字で入力することに自信をもつ生徒もいた。 ・書字の負担が減ったことで、友達の学習の様子に対して、自信をもって自分の意見を表現することができた。 		

表７　実践の様子と児童生徒の変容（視点１－②）

ＩＣＴ活用の視点	情報活用能力の育成を図る		
教科名等	数学科	学部・学年	中学部１年
授業の概要	気温のデータを整理し、表やグラフ（折れ線グラフ、棒グラフ）で表したり、特徴を読み取ったりする学習である。		
ＩＣＴ活用の意図	方眼紙や目盛りが細かいグラフの作成に苦手意識があるため、グラフ作成に意欲的に取り組んだり、データの読み取りを行う時間を確保したりするために、 ↓ 簡単にグラフを作成することができる表計算アプリ「Numbers」を使用した。		
活用の効果・生徒の変容	・自分で簡単にグラフを作成できたことで、達成感を得ることができた。 ・読み取りに十分に時間を取ることでグラフを見て、簡単な特徴を捉えて発表することができた。 ・生活単元学習で各県の米の生産量をグラフで発表するなど他の場面でも学んだことを活用した生徒もいた。 		

表８　実践の様子と児童生徒の変容（視点２）

ＩＣＴ活用の視点	障害による困難さの改善・克服を目指す		
教科名等	生活単元学習	学部・学年	中学部１年
授業の概要	学校祭のステージ発表にむけた練習での実践である。		
ＩＣＴ活用の意図	自信をもって大きな声や身振りで演技したり、自分で字幕などの情報を手掛かりに演技することで達成感を得たりすることができるように、 ↓ プロジェクターで字幕スライドをリアルタイムに体育館後方の壁に投影した。		
活用の効果・生徒の変容	・「台詞を覚える」ことの負担が減り、「身振り手振りで表現する」ことに集中でき、安心して発表に向かうことができた。 ・文字カード提示などの支援がなくなり、生徒だけがステージ上にいる状況を作ることができ、自分たちでできたという達成感をもつことにつながった。 		

今回紹介した実践事例では、「書字の負担を軽減する」、「グラフ作成の負担を軽減する」、「覚える内容を減らして安心して学習に取り組めるようにする」ことが活用の意図であった。本校におけるその他の事例では、写真や動画などで視覚的に提示し、内容を理解しやすくする意図での活用も見られた。本校の取組におけるＩＣＴ活用の特徴として、障害の困難さの改善・克服を目指す視点（＝自立活動的な視点）がその活用意図の中に含まれている事例が多いということが挙げられる。知的障害教育の中でどのような意図でＩＣＴを活用していくかを検討する上で、この自立活動的な視点が外すことのできない大切な視点であることを再確認することができた。

（２）教師の変容

前述した本校の学校評価のＩＣＴ活用に関わる項目の令和２年度前期と令和４年度後期の集計結果のＡ評価について比較してみると、どの項目においても評価の向上が見られた（表９）。評価が上がった背景には、２年間の取組を通して本校の職員の意識やスキルが向上したことが考えられるが、その理由として、職員研修や相談体制の充実、ＩＣＴ活用事例集や校内報による情報提供などの前述の取組が効果的であったことが挙げられる。

表９　学校評価のＩＣＴ活用に関わる項目

取組の具体（評価項目）	実施年度	Ａ評価の割合
児童生徒の障害特性に応じたタブレット型端末等の学習活用	令和２年度	15.0%
	令和４年度	61.5%
教職員の実践力向上のための職員研修	令和２年度	16.1%
	令和４年度	83.1%
ＩＣＴを効果的に活用するための環境整備	令和２年度	8.1%
	令和４年度	38.5%

また、令和４年度前期学校評価の記述回答では、「ＩＣＴを効果的に活用する意識が高まった」、「研修会は効果的であった」などの肯定的な意見に対して、「ＩＣＴ活用が積極的になってきたからこそ、機器の不足を感じる」といった意見や「児童生徒がスキルを学ぶ時間の確保が難しい。教育課程の見直しが必要ではないか」といった課題につながる意見も出された。

（３）研修と実践をつなぐ取組の成果と課題

前述した研修と実践をつなぐ取組についての、成果と課題を一点ずつ報告する。

成果については、研修から実践、情報共有までをつなぐこの取組を通して、職員が自校のＩＣＴ活用事例を知る機会が生まれ、自分の実践に取り入れ、またその事例を他の職員に紹介するという良い循環が生まれたことが挙げられる。

課題については、本校の職員には様々な事例を知りたいという高いニーズがあり、積極的にＩＣＴ活用実践が行われている状況にあるが、支援依頼がない実践については把握が難しく、良い事例を全校職員に紹介しきれないということがある。実践の把握、吸い上げについて、職員間で授業を見合う、事例を紹介し合う機会を設定するなどの取組で対応していきたいと考えている。

5　今後の取組

今後の取組について二点報告する。

一点目は「学校を超えた情報共有」についてである。これまでの取組を通して、ＩＣＴ機器の管理や設定、トラブルに自校のみで対応したり、解決したりすることが難しい場合があると感じている。また、前述したとおり、本校職員には、ＩＣＴを活用した事例を数多く知りたいというニーズがあるということが分かった。このことについて、県内特別支援学校間で相談や情報共有ができる仕組みが必要だと感じている。また、来年度から開始する校務支援システムやグループウェアを活用した情報交換、共有の仕組みも同時に検討したいと考えている。

二点目は遠隔教育環境についてである。今年度、職員の打ち合わせや研究会、児童生徒の行事や集会活動などで遠隔授業や会議についてのノウハウを得るべく、実践を重ねてきた。一方向の配信についての環境設定や機器導入については、ＹｏｕＴｕｂｅライブやＯＢＳなどの配信ソフトを活用することで、双方向の配信については、無線マイクやオーディオミキサーなどの機器やウェブ会議システムのＺｏｏｍを組み合わせることで、ある程度安定して配信できる要領を得ることができた。

今年度の実践を通して得た環境設定や操作方法、場面に応じたシステムの選択などの要領を確実に引き継ぎ、より活用しやすい環境を提供できるようにしていきたい。

〈第三部〉

研究の成果と課題

6　成果と課題

（1）成果

①　児童生徒が学びを実感し、主体的に学ぶことができる授業づくりと児童生徒の変容

ア　単元全体を見通す工夫について

今年度の授業改善で有効だった手立てをまとめると、何がゴールなのかが分かる単元計画表や学習予定表、「単元終了時に目指す姿」の具体の提示や活用の工夫、生徒による学習テーマの設定、児童生徒の身近な人や物、こと、あるいは既習の学習で興味・関心をもった内容等を取り入れた単元構成等となる。これらによって、児童生徒は単元を通して「何を学ぶのか」という目標や「何ができるようになるか」というゴールの状態をイメージして主体的に学ぶことができた。また、そのことを自分の生活や将来と結び付けながら学習を進めることができた。

単元計画表等の活用に関しては、ＩＣＴを活用することで児童生徒の学習への興味や関心、目標達成への意欲や期待感を高めることができた。ただし、単元における本時の位置や単元目標の達成状況、単元のゴールを確認しながら毎時間の活動を進めていく上では、常時掲示できるアナログ教材の活用やＩＣＴとの併用が有効であった。

イ　学習の意味や意義を理解する工夫について

単元計画表や学習予定表を児童生徒が自分たちで活用したり確かめたりするようにしたこと、導入でめあてを生徒の必要感から文章化したこと、学習ごとの成果物等を活用して学習環境を整えたこと、予想を立てたり他者等と比較したりする学習場面や実際の体験を効果的に位置付ける、小単元等で何を学んだかを整理してまとめる活動を積み重ねるといった学習活動の構成を工夫したこと、が有効であった。それらの工夫によって、児童生徒は本時が何のための学習であるのかという、単元のゴールに向かう各時間の位置付けや意味、つながりを理解し、必要感をもって学習に取り組んだ。そして、各授業や小単元毎に学びの実感を積み重ね、単元の終わりには、各時間の学びがつながって単元目標の達成がなされたことを実感することができた。

ＩＣＴに関しては、導入で目標や単元のゴールをイメージすることを補助する写真や動画を示すこと等が理解につながる有効な活用方法であった。また、主としてＩＣＴを活用する学習や繰り返しの多い学習では、活動そのものが目標にならないように、導入や振り返り場面で単元の目的や本時の学習の意義や価値を押えたり、一貫して見方・考え方の視点を示したりすることで、単元の目標とその達成に向けた学習としての意味を念頭におきながら、目的意識や課題意識をもって活動に取り組むことができた。

ウ　ねらい、めあて、まとめ、振り返りの工夫について

めあてや課題、まとめを児童生徒の言葉で文章化していく取組や、それまでの学習内容を想起し、必要感をもって学習に向かう、めあてを学習活動のゴールとして意識付けることができるような発問の工夫等が、めあてを自分事として意識したり、学習の大きな要素の一つとして意識したり、課題への問題意識をもったりすることにつながった。授業改善を重ねる中で、昨年度の課題であっためあてとまとめの整合性がとられるようになり、児童生徒がめあてに沿った振り返りやまとめを行う中で、学習の実感を確実に得たり、意義を再確認したりすることができた。振り返りでは、時間を確保し、視点を示したりＩＣＴを活用する等、表現方法や学習活動を工夫したりすることで、学習の成果を実感したり学びを再確認したり、次時への課題意識をもったりすることができた。また、学習のめあてを達成するための方法や手段を児童生徒が自己選択できる場面設定や選択肢にＩＣＴを取り入れたことが、本時のめあてに沿った活動そのものにじっくり向き合い、集中して考え

たり工夫したりして主体的に取り組む上で有効だった。

② ＩＣＴ活用の効果を見極め、適切な場面で活用する知識やスキルの定着や向上

各学部の実践を見ても分かるように、生活単元学習や職業科の授業において、三つの視点の工夫に必ずＩＣＴが取り入れられたわけではない。日常的なＩＣＴ活用や様々な職員研修、情報共有等によって、ＩＣＴ活用についての職員の知識やスキルが定着したり向上したりしたことが、必要な場面での活用や適切な場面や活用内容を判断して有効に活用することにつながったと考える。

前年度も活用の意図を明確にしながらＩＣＴを授業に取り入れてきたが、今年度の取組でさらに、学習場面や活動、児童生徒の実態に応じて、教科等の指導の効果を高める視点、情報活用能力の育成を図る視点、障害による困難を改善・克服を目指す視点を基に、ＩＣＴの活用が有効であるかどうかを適切に見極めて活用し、児童生徒が学びやすい状況を整えることができるようになったと考える。

③ 単元相互のつながりのある授業実践と他教科等への授業改善の広がり

中学部一年生では、「めざせ！お米博士」の単元の次に「おにぎりマスターになろう」という、収穫した米を活用する単元が展開された。中学部の他学級や小学部、高等部でも、単元の学びが生かされ学習が深まったり発展したりするように、各単元の授業が展開され、その中で有効だった手立ての活用や汎化が行われた。

中学部では振り返りで使用した「かまくらカード」を他の教科でも活用したり、小学部では、体育の授業で児童から「ふりかえりは？」と振り返りの活動を楽しみにする言葉が聞かれたりした。このように、他教科等の授業においても、ＩＣＴの活用も含めて研究対象の学習で有効だった教材等の活用やめあてと振り返りの整合性の確認、めあてに迫る振り返りなどによって授業改善がなされ、児童生徒の学習態度や意識の変化、学びの定着につながった。

また、高等部では、進路指導部が中心となって進路学習内容表を作成し、職業科や家庭科など進路に関わる学習内容の整理が行われ、各学年でどの内容を学習したのかなど確認しながら学習を進めていく計画としており、来年度以降、３年間を通した過不足のない学習に取り組んでいけるものと考える。

（２）課題

① 児童生徒がより主体的に学ぶための児童生徒の思考を大切にした授業づくり

中学部や高等部では、めあてを設定する場面などで、生徒の言葉を生かした授業づくりに取り組んできたが課題が残った。教師の発問の意図を明確にして、児童生徒一人一人に合った言葉を選ぶ、言葉の理解を促すなど、児童生徒が活用できる言葉や言葉の意味理解、表現力等を育んでいく工夫が必要であると考える。

主体的に学ぶことは、学びに対して能動的に向かうことである。児童生徒の思考活動を充実させることで、導入から終末までの授業時間全てにおいて主体的に学び、日常に生かすことのできる資質・能力を身に付けることのできる授業づくりを目指したい。

② 学びの実感と主体的な学びを資質・能力の育成に確実につなげるための年間指導計画の様式や内容の見直し

指導計画に、単元目標に照らして実現状況を観点毎に評価し、資質・能力の育成につながるよう、小単元毎に評価規準を設定した。単元検討会において年間指導計画と照らし合わせ

ながら単元の目標や学習内容の検討を行った際、年間指導計画の年間の目標が資質・能力の三つの柱で示されていない場合があった。教科等を合わせた指導においては、学習指導要領のどの教科等のどの段階のどんな内容を含んでいるかが指導と評価の根拠になるため、年間指導計画にも学習指導案にも記載することで、単元の評価の際に達成状況を確認した上で次の単元の見直し、修正を行いながら、年間を通して確かな資質・能力を育成することができるものと考える。このことについては、教務部と連携して見直しや修正等を行い、来年度に引き継いでいきたい。

〈第四部〉

公開研究会の実践

令和３～４年度　「e-AKITA　ICT 学び推進プラン事業」
ICT 活用推進モデル校

令和4年度　公開研究会

12:30	参加者 Zoom 入室時間 (12:45 まで入室してください)
12:45	
13:00	全 体 会 ①
13:20	
13:25	分　科　会 分科会１　小学部４年生　生活単元学習科 分科会２　中学部２年生　生活単元学習科 分科会３　高等部２年生　職業科
14:45	
15:00	全 体 会 ②
15:50	

令和４年１２月１４日（水）

秋　田　県　立　横　手　支　援　学　校

秋田県立横手支援学校

令和４年度公開研究会　録画配信・資料配付マップ

公開研究会全体資料　学習指導案集　ＩＣＴ活用事例集

研究概要説明	事業取組説明

※授業提示動画は４Ｋ画質で作成しています。必要に応じて設定で画質を変更してください。

分科会１　小学部	分科会２　中学部	分科会３　高等部
授業説明	授業説明	授業説明
提示授業	提示授業	提示授業
学習指導案	学習指導案	学習指導案

授業視聴後、アンケートにご協力ください。（https://forms.gle/E9RccUtbcnVQ3E9p8）

ICT 活用事例紹介（実践動画、ICT 活用票）	
小学部５年	児童が主体的に活動に参加することを目的とした、タブレット型端末と乾電池型ＩｏＴ製品、外部スイッチ等の活用
小学部高学年	清涼飲料水に含まれる砂糖の量を視覚化するアプリを活用した保健指導
中学部合同	正しい歯磨きの仕方を学ぶための知的障害者用歯磨きアプリの活用
中学部１年	学校行事（学校祭）で、自分の役割に自信をもって取り組むための視覚的手段としての学習支援アプリの活用
高等部１年	書字に困難のある生徒の学習支援アプリの活用

提示授業動画、ＩＣＴ活用事例紹介動画の視聴期日は１２月８日午前１０時から１２月９日までです。

※その他の資料、動画は１２月５日から閲覧できます。

横手支援学校 HP（http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp/akita-pref.ed.jp）

小学部　第４学年　生活単元学習　学習指導案

日　時：令和４年 11 月 30 日（水）13：10～13：55
場　所：小中学部校舎　小学部４年１組教室
指導者：高橋栞（Ｔ１）　高山知子（Ｔ２）
小番俊和（Ｔ３）鈴木圭太（Ｔ４）

１　単元名　「わくわくたんけんたい～りんごジュースかこうじょへいこう～」

２　目標

(1) 加工所見学等、りんごジュース作りの学習を通して、地域や特産物に興味を深め、自分たちの生活とのつながりを考える。学　人

(2) 友達の居住地の増田地区や地域の特産物であるりんごがジュースになるまでの様子を知る。知　技

(3) 加工所見学で知りたいことや分かったことを伝えたり、友達の意見を参考に、相手に伝わる話し方やクイズのスライドの作り方などを考えたりする。思判表

３　児童と単元について

(1)　児童観

本学級は男子４名、女子２名、計６名の学級集団である。コミュニケーションに関しては、自分の気持ちを言葉で伝える児童が５名、発声や身振りで伝える児童が１名である。間違えることに不安感があり、話すことをためらったり、読み書きに時間を要したりする児童もいるが、友達が授業中に答えが分からず困っていると小声で教えてあげるなど、児童同士で協力し合って学習に取り組む場面が見られる。タブレット型端末の活用に関しては、調べたいことを音声入力で検索したり、自分の感じたことや気付いたことなどを音声やキーボード入力でカードにまとめたりしてきている。

２年生から行ってきた「わくわくたんけんたい」の学習では、りんご、ぶどう、さくらんぼの各農園に行き、実際に収穫し、味わう体験やジャムを作って保護者をおもてなしする経験などを積み重ね、地域や地域の特産物への理解を深めてきている。また前回の単元では横手の施設や特産物などの学習を横手市の地図にまとめた。自分や友達の居住地、地域の特産物や施設を振り返り、まだ行ったことのない地域があることに気付き、興味をもったり、次の「わくわくたんけんたい」での学習を楽しみにしたりする様子も見られる。

(2)　単元観

りんごは秋から冬にかけて旬を迎える果物で、本学級児童の家庭や近隣でもりんごを栽培し、出荷している農家があり、地元横手の特産物である。児童にとって身近な食べ物であることから、ジュース加工所見学はこれまで調べてきた地域の特産物や農家の仕事の学習を振り返り、発展的に特産物を使った製品や製造の仕事について学習することができると考える。加工所でりんごがジュースになるまでの工程や従事する人々の様子を見学することで、地域の特産物やそこで働く人々の仕事への理解を深めることができる。また衛生面に気を付けていることや多くの人々が携わって製品ができていることを知り、清潔な身だしなみ、食事を大切にいただくなど日常生活場面にも学習内容が生きる単元だと考える。

また、本単元のゴールとして学部の友達を招いて、加工所見学で分かったことについてのクイズ大会を開く。相手に分かりやすい伝え方を考え、準備や練習をし、発表する活動を通して、見学で見聞きして知ったことを振り返る。また、初めて知ったことや気付いたことなどをたくさん

友達や教師に伝え、みんなで共有する楽しさを感じることができる単元であると考え、本単元を設定した。

単元を通して、自分の思いを言葉で伝える手段の一つとして、タブレット型端末を活用することで、児童の書字への負担感を減らしたり、写真やイラストを使って表現力を高め、楽しんで学習に取り組んだりする環境を整えることができると考える。

(3) 指導観

加工所見学等、りんごジュース作りの学習を通して、地域や地域の特産物に興味を深め、自分たちの生活とのつながりを考えることができるように

・りんごを食べたり、りんごジュースをお店で見かけたり、飲んだりした経験を想起させる。
・加工所内で工程を見学した後にりんごジュースを試飲させていただく機会を設ける。
・見学や加工所マップを作る活動の中で、加工所で働く人の服装やりんごを洗う、トリミングするなどの加工工程等を取り上げ、衛生面に気を付けている理由や工夫を見聞きしたり、児童に問い掛けたりする機会をつくる。また、私たちがおいしくて安全なジュースを飲むことができるように、様々な工夫がされていることに気付くことができるように発問しながら授業を展開する。
・学習したことと自分の生活を結びつけられるように、調理学習や普段の食事など日常生活に学んだことを生かすことのできる場面の例を紹介する。

友達の居住地の増田地区や地域の特産物であるりんごがジュースになるまでの様子を知ることができるように

・単元の導入で、前単元でこれまでの「わくわくたんけんたい」での学習をまとめて作成した横手の地図を掲示し、自分や友達の居住地を見付けたり、学習した公共施設や特産物等を振り返ったりする。
・実際にりんごやパックジュースを見たり、加工工程の予想図を一人一人作成し、友達の予想図と見比べたりする時間を設定する。
・加工所見学の際には、バスで増田地区にある多くのりんご果樹園を通りながら見学先に向かう。
・学習活動を通して作成した加工所マップと加工工程の予想図を比較し、驚いたことや分かったことの中から自分が伝えたいことを選んでクイズを考える場面をつくる。

自分の思いや考えを伝えたり、相手に分かりやすい伝え方を考えたりすることができるように

・話すことが苦手な児童に対して、友達の話を参考にできるように話す順番を後にしたり、ワークシートを準備し、自分で考えをまとめられるようにしたりする。また選択肢を挙げて尋ねたり、気持ちをくみ取って代弁したりする。
・見学先では児童自身で写真や動画を撮影し、それらを見ながらインタビューしてきたことをまとめたり、気付いたことを話し合い、振り返る時間を設定したりする。
・友達同士で本時のめあてを評価し、よいところを認め合う場面を設定する。その際、友達のよいところを見付けられるように観点を掲示したり、頑張りが見られた場面の動画を部分的に繰り返し提示したりする。
・見学でのインタビューや加工所マップ、クイズ大会用スライド等の制作場面では、児童が自分の得意な方法で取り組めるよう、見学での質問の答えの聞き取り方やタブレット型端末を使った文字の入力方法など選択肢を提示する。
・国語や生活単元学習のテレビ絵本作りで学習した相手に伝わる話し方を例示したり、タブレット型端末で撮影した質問やクイズ大会の練習の動画を見返し、よかった点・もっとよくなる点をみんなで話し合ったりする。

４　指導計画（総時数 23 時間）

小単元名	時数	小単元の目標	学習活動 （ＩＣＴの活用）	評価の観点 知技	思判表	態度	評価規準	学びを実感し、主体的に学ぶ姿を実現する工夫 （ＩＣＴの活用）
ジュースかこうじょへいこう	1	・加工所見学への意欲や期待感をもつ。	・見学する日時、場所等について話を聞く。	○		○	・加工所の名前、場所、作っている製品が分かっている。	**＜単元を見通す工夫＞** ・単元計画表を常に意識できる場所に掲示する。 ・加工所マップ（りんごがりんごジュースになるまでの加工工程）を作成するにあたり、単元の始めに予想図を作って、友達の図と比べたり、加工所マップをクイズ作りや単元の振り返りで活用したりする。 **＜学習の意味や意義を理解する工夫＞** ・見やすいスライドを作成できるように、見やすいもの、見づらいものの比較スライドを提示する。 ・学部の友達に楽しんでもらうためにはどうしたらよいか問い掛け、話し合う場面を設定したり、出てきたキーワードを板書・掲示したりする。 **＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫＞** ・学習への意欲を高め、見通しをもてるように、本時の学習活動を順番に伝え、児童の言葉を使ってめあてを書く。 ・振り返りで自分の取組を客観的に見たり、友達にアドバイスしたりできるように、ポイントを示し、撮影した動画を見せる。
	1	・りんごがジュースになるまでの加工工程を予想する。	・加工所マップの予想図を書く。	○	○		・りんごがジュースになるまでの工程を予想し、絵や言葉で友達や教師に伝えている。	
けんがくのじゅんびをしよう（4）	2	・見学で知りたいこと、聞きたいことを考える。	・質問したいことを出し合う。 ・自分の質問事項を決め、ワークシートにまとめる。		○	○	・加工所の方への質問を考え、教師や友達に伝えている。	
	2	・相手に伝わりやすい質問の仕方を考える。 ・自分で質問の答えの聞き取り方（メモを取る、動画撮影等）を選択する。	・質問の練習をする。		○ ○		・これまでの学習を手掛かりにして、話し方のポイント（大きな声、ゆっくり、はっきり、相手を見る）が分かり、練習に取り組んでいる。 ・様々な方法を試しながら、自分に合った聞き取り方を見付けている。	
ジュースかこうじょのけんがく（3）（校外学習）	3	・約束を守って見学をし、主な製造の工程を知る。 ・考えてきた質問を相手に分かるように伝えたり、聞き取ったりする。	・加工所を見学する。 ・加工所の方に質問する。	○	○	○ ○	・製造の工程に関心をもち、約束を守って見学している。 ・話し方のポイントを意識して質問したり、自分が決めた方法で答えを聞き取ったりしている。	

けんがくをふりかえろう（5）	5	・写真や動画等を見聞きしながら、質問の答えをまとめたり、見学して気付いたこと、感じたことを写真や発見カード等で伝えたりする。	・自分の質問の答えをまとめる。 ・写真を見て探検を振り返りながら、加工所マップを作る。	○	○ ○	○	・質問の答えの内容を理解し、文字や言葉などで伝えている。 ・工程の内容やおいしくて安全なりんごジュースを作るための工夫等について答えたり、自分の気付きを伝えたりしている。	・話し合ったポイント（スライドやシート作りなど）や見学で分かったことから作成した発見カードを使い、クイズ形式にし、ポイント等を振り返る場面を設定する。 ・学習への達成感を感じられるように、めあてを振り返った後で、1時間ごとに単元計画表に児童が花丸を書く機会を設ける。
クイズたいかいのじゅんびをしよう（6）（本時2／6）	4（本時2／4）	・「おいしい」「安全」の観点でクイズを考える。 ・「おいしい」「安全」の観点でクイズの答えの理由を伝える。	・クイズの問題や選択肢、正解の理由を考える。 ・友達のクイズに答える。	○ ○	○ ○		・「おいしい」「安全」の観点で、クイズを作っている。 ・「おいしい」「安全」に気を付けてジュース作りがされていることが分かり、友達のクイズに理由を付けて答えている。	
	1	・見やすいスライドやシートの作り方を考える。	・見やすい発表用スライド（タブレット型端末）やシート（紙）の作り方のポイントを話し合い、作成する。		○		・見やすいスライドやシートの作り方を考え、作成している。	
	1	・相手が聞き取りやすいクイズの伝え方を考える。	・クイズ大会の練習をする。		○		・話し方のポイントを意識し、発表練習に取り組んでいる。	
クイズたいかい（1）	1	・相手に伝わる話し方を意識し、自信をもって学んだことを伝える。	・学部の友達を招待してクイズ大会を開く。		○		・学部の友達が楽しめるように、話し方のポイントを意識し、自信をもって発表している。	
たんけんをふりかえろう（2）	1	・クイズ大会の学習を振り返り、自分の考えを伝えたり、友達の意見を受け入れたりする。	・クイズ大会の動画を見て学習を振り返る。		○		・動画を見て自分の考えを伝えたり、友達の頑張りを認めたりしている。	
	1	・単元全体を振り返り、学んだことを生かして、自分の思いや考えを伝える。	・振り返りシートに自分の考えをまとめる。		○	○	・単元全体の学習を通し、分かったこと、生活や次時の学習で生かしたいことを伝えている。	

予想図の一例

加工所マップ

5　本時の計画（本時：16/23 時間）

(1) 本時の目標

・「おいしい」「安全」という観点でクイズの答えの理由を伝え、全ての工程でおいしくて安全なジュース作りの工夫や配慮がされていることが分かる。　知　技　思判表

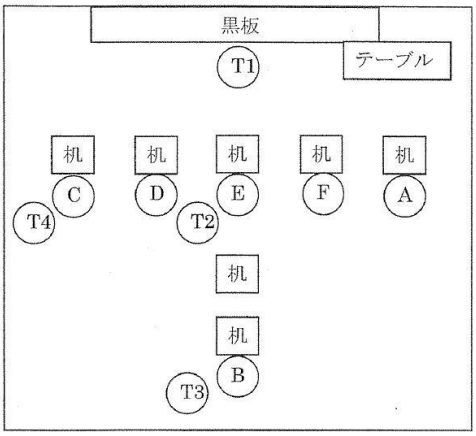
(2) 個別の目標（評価：A達成できた　Bおおむね達成できた　C努力を要する）

児童名	本時の主たる目標（期待する具体的な学びの姿）	評価
A	・「おいしい」「安全」という観点で選択肢両方の理由を話し、全ての工程でその観点が含まれていることに気付いて伝える。	
B	・スライドのりんごジュースや加工所見学の様子などの写真に注目する。	
C	・全ての工程のクイズにおいて、「おいしい」「安全」という観点で「○○なジュースになるから」と理由を伝える。	
D	・全ての工程のクイズにおいて、「おいしい」「安全」という観点で「○○だから△△なジュースになる」と理由を伝える。	
E	・友達の意見を参考にしながら、全ての工程のクイズにおいて、「おいしい」「安全」という観点で理由を伝える。	
F	・具体的な場面を挙げながら、全ての工程のクイズにおいて、「おいしい」「安全」という観点で理由を伝える。	

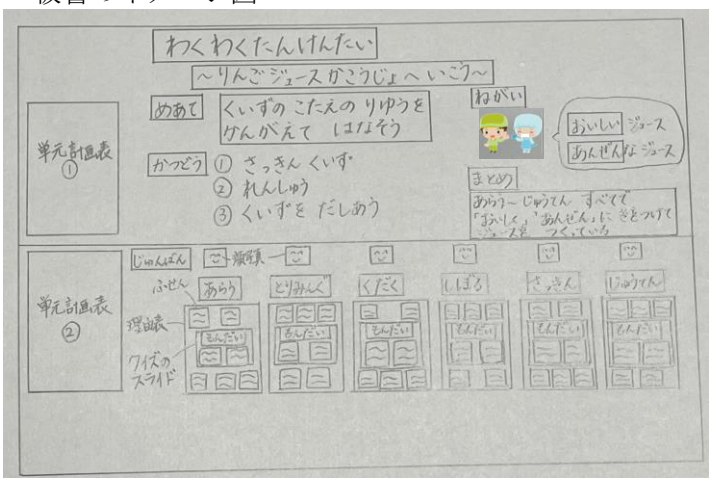
(3) 展開

分	学習活動（ＩＣＴを活用した活動）	指導上の留意点（ＩＣＴの活用に関する留意点）	準備物
7	1　前時までの学習を確認し、本時の活動やクイズの出題の順番を知る。 2　教師のクイズに答える。 3　めあてを知る。 〈めあて〉 くいずの　こたえの　りゆうを かんがえて　はなそう	・前時までに学習した、おいしくて安全なりんごジュースを作りたいという働く人の願いを思い出せるように、働く人のイラストと吹き出しを掲示し、キーワード（「おいしい」「あんぜん」）を問い掛ける。 ・りんごジュース作りの流れを振り返られるように、出題する順番を工程順にする。また自分の順番が分かるように、工程カードに顔写真を貼る。 ・児童が活動に見通しをもてるように、タブレット型端末を操作しながらクイズの出題方法を演示したり、解答の手本を示したりする。（Ｔ１、Ｔ４） ・児童が文字を読みやすいように、一文字ずつゆっくりとめあてを書く。（Ｔ１）	単元計画表 働く人のイラスト 吹き出し キーワードカード 顔写真 工程カード めあてカード タブレット型端末 大型TV HDMIケーブル
3 25	4　クイズの出題の練習をする。 5　クイズを出し合う。 ①一名がクイズを出題する。 ②四名が一人ずつ、クイズの答えを選んだ理由を話す。 ③出題者が答えと理由を発表する。 ※①～③を５回繰り返す。 （A、C、D、E、F） ・スライドのりんごジュースや加工所見学の様子などの写真に注目する。（B）	・ＢとＣが落ち着いた気持ちで学習に参加できるように、活動場所や活動量を調整する。（Ｔ３～Ｔ４） ・クイズの活動に期待感をもてるように、Ｂが前時までに作ったオープニングスライドを流す場面を設ける。 ・児童自身でクイズを進められるように、手順表を準備する。 ・友達の意見を参考にできるように、理由を付箋に書いて黒板の理由表に貼る。（Ｔ２） ・児童が「おいしい」「安全」という観点で理由を話せるように、見学したときの様子を想起させる言葉掛けをしたり、あえて間違った解答や理由を話したりする。（Ｔ１～Ｔ４） ・Ｂが写真に注目し、見学したことを振り返られるよう「りんごがいっぱいありますね」などと声を掛ける。（Ｔ３）	花びらカード タイマー 手順表 理由表 付箋
10	6　本時の振り返りをする。 ①まとめをする。 〈まとめ〉 あらう～じゅうてん　すべてで 「おいしく」　「あんぜん」に きをつけて　ジュースをつくっている ②次時の学習について知る。	・児童が学びを実感できるように、理由の付箋を紹介しながら、クイズの答えの理由をたくさん考えて話すことができたことを認め、称賛する。 ・全ての工程でおいしくて安全なジュース作りの工夫がされていることに気付けるように、「おいしくて安全なジュースになるように気を付けているのは〇〇（工程名）だけかな？」と尋ねる。 ・学習したことを日常生活に生かせるように、調理学習で気を付けたいことを質問する。 ・学習のが分かるように、児童が単元計画表にシールを貼る機会を設ける。 ・次時の見通しがもてるよう、単元計画表を指差しながら、二問目のクイズを作ることを伝える。	単元計画表 シール ペン 里芋もの イラスト

(4) 配置図や教材



板書のイメージ図



(5)評価規準

・「おいしい」「安全」という観点で、理由を自分なりに考えて伝え、全ての工程でおいしくて安全なジュース作りの工夫や配慮がされていることに気付いているか。

中学部　第２学年　生活単元学習　学習指導案

日　時：令和４年 11 月 30 日（水）10：20～11：10
場　所：小中学部校舎　中学部２・３年２組教室
指導者：後藤ゆり子（Ｔ１）　高井哉子（Ｔ２）
辻嶋真梨子（Ｔ３）

１　単元名　「増田の内蔵　ひ・み・つ　発見！②」

２　目標

(1)　「増田の内蔵」について、見聞きしたことや調べたことからその特徴や魅力を知り、自分たちの生活と比較しながら情報の整理をする。　知　技

(2)　得た知識を整理し、人に伝わりやすい表現かを検討し合ったり、他者からの助言を受け入れたりしながら掲示物や映像を作る。　思判表

(3)　地域の方から話を聞いたり、調べたことを身近な人等に紹介したりすることを通して、地域のよさを知り、地域に愛着をもつ。　学　人

３　生徒と単元について

(1)　生徒観

本学年は、男子５名女子３名で構成されており、うち男子１名は訪問教育対象生徒である。友達同士で会話を楽しんだり、教師と簡単な言葉でやりとりしたりすることができる。学習活動に掛かる時間に個人差はあるが、互いに励まし合って最後まで取り組もうとしたり、できるまで待ったりすることもできる。普段は３年生との複式学級で１組と２組に分かれているが、学年で行う学習活動や休み時間などを通して仲間意識が育ってきている。また、訪問対象生徒との関わりも多く、リモートや動画で交流することを楽しみにしている。

「増田の内蔵」は生徒の住む地域にあるが、生活範囲や興味の幅が限定されているため、今年度の学習で初めて触れる生徒や、見たことがあるがその用途や詳細までは知らない生徒が多い。しかし、自分たちの住んでいる地域を深く知ることへの興味関心が高く、宿泊学習で見学した際はガイドの説明を何度も聞き返しながらメモを取り、興味をもって取り組んだ。人と関わりながら学ぶことへの意欲も高い。言葉でのやりとりはできるが、気持ちを整理して伝えることが難しく、自分と相手の考えを比較したり、意見を聞き入れたりすることに課題のある生徒もおり、自分や相手の考えを順番に書き表して整理したり、普段の生活でも相手のことを考える場面を多く設定したりしている。

(2)　単元観

本単元は、横手市の伝統的建造物群保存地区「増田」地域における「増田の内蔵」を調べる学習の２回目である。１学期に行った１回目の単元では「増田の内蔵」を宿泊学習のプログラムの一つとして見学し、調べたことを掲示物としてまとめたり、スライドでクイズを作成して他学年の生徒や保護者、他校の生徒に発表したりした。２回目では、１回目の学習の中で生じた疑問や自分たちの暮らしとの違いについて、「歴史」「建物」「生活」に分けて、さらに調べたり比較したりする。それらを掲示物としてまとめたり、映像資料を作成して発信したりすることで、得た情報の整理の

仕方を知ったり、相手を意識した表現について検討したりしていく。

「増田の内蔵」は家の中にある蔵であり、実際に中に立ち入って見ることが少ないため、想像を膨らませたり、興味をかき立てられやすかったりする。また、特別な役割をもって使われていたため、生徒たち自身が住んでいる家や生活の様式と比較がしやすい。さらに、増田町観光協会会長や増田地域課の方から直接説明を受けながら疑問を解決することができ、地域の人との関わりをもつこともできる。合わせて、調べたことを友達と一緒に映像としてまとめることで、相談しながら要約したり、助言を受け入れたりするなど友達と関わりながら活動することもできる。

「増田の内蔵」を通して、自分たちの生活と比較しながら地域で暮らす楽しさや、自分たちの住む地域の特徴や魅力を十分に味わうとともに、相手を意識した表現について考えたり工夫したりすることができると考え、本単元を設定した。

(3) 指導観

自分たちの生活と比較しながら、情報の整理ができるように

・「増田の内蔵」について、建物の構造に関することやそこで暮らす人等、調べる項目をあらかじめ設定する。
・比較する対象が具体的にイメージすることができるように、自分たちで写真や動画を撮影する場面を設けたり、家庭や施設の協力を得て自分の家の作りや活用の仕方を確認する課題を提案したりする。

見る人に伝わりやすい表現か検討したり、他者の考えを受け入れたりするために

・映像作りにおいて意見交換しやすいように、２～３人のグループで活動したり、写真やイラストサンプルから選ぶ場面を設けたりする。
・何度でも表現方法を変えたり、追加訂正したりできるように、タブレット型端末を活用してまとめていく。
・友達や映像を見た人からのアドバイスを受け入れやすいように、交流を通して作った映像を紹介してくれている大曲支援学校中学部２年生から、映像作りの視点の提案を受け、意見を伝え合うようにする。また、あらかじめ自分たちで大曲支援学校が制作した映像のよかった点を話し合ってまとめておく。
・増田町観光協会会長、増田地域課の方に作った映像を見てもらい、相手に伝わりやすいか、調べたことに間違いがないかなどやりとりをしながら進めていく。

地域のよさを知り、愛着をもつために

・地域の特徴や魅力を深く知ることができるように、地域に詳しい人からの話を聞く機会を設け、以前学習した内容と比較したり、予想を立てたりしながら調べ学習を進めていく。
・調べた内容を掲示し、身近な人に知らせたり、他地域の生徒との交流を取り入れたりし、伝える楽しさを感じる経験を積み重ねていく。そして、地域への愛着をもつために、調べたことをたくさんの人に伝える場面として、ＹｏｕＴｕｂｅでの配信を提案する。
・「増田の内蔵」を直接見て比較することができるように校外学習を設定したり、分からないことを質問できるように観光協会や増田地域課の方とオンラインや手紙等でやりとりする機会を設けたりする。
・映像作りでは、調べたことを分かりやすく伝えるため、表現方法を検討しやすい「ｉＭｏｖｉｅ」アプリを活用し、自分たちで操作しながら作っていく。

４　指導計画（総時数　24 時間）

小単元名	時数	小単元の目標（ねらい）	学習活動（ＩＣＴの活用）	評価の観点 知技	評価の観点 思判表	評価の観点 態度	評価規準	学びを実感し、主体的に学ぶ姿を実現する工夫（ＩＣＴの活用）
「増田の内蔵」ひ・み・つ　もっと　発見！（５）	1	・「増田の内蔵」について、調べ直したことや新しく知ったことを、友達と役割分担しながら整理する。	・校外学習で調べたメモを手掛かりに、項目（建物・歴史・生活）毎に役割分担してワークシートに書く。	○			・自分がまとめる項目が分かっている。	**＜単元を見通す工夫＞** ・映像を作ってみたいという意欲を高めるために、大曲支援学校中学部２年生が作成した映像を提示する。 ・学習の流れが分かるように、学習計画表を教室の前に掲示しておく。 **＜学習の意味や意義を理解する工夫＞** ・地域のよさを実感したり、調べたことをまとめる楽しさを味わったりすることができるように、校外学習を取り入れ、自分たちで撮影したり、直接話を聞いたりする機会を設定する。 ・要約したり、相手意見を取り入れたりなど、文章を書き直したり、言葉を選んだりすることが容易にできるよう、調べたことをまとめる手段としてタブレット型端末を活用する。また、調べたことをたくさんの人に知ってもらう手段として、映像作りをして発表したり、ＹｏｕＴｕｂｅで発信したりするなどＩＣＴを活用する。
				○	○		・メモ書きを文章にして書き表している。	
	1	・掲示物の作成において、見る人に伝わりやすい表現かを考えたり、工夫したりする。	・友達と役割分担しながら掲示物を作成する。	○	○		・文の構成や言葉の使い方を考えて書いている。	
	2	・大曲支援学校と交流をし、まとめたことを説明したり、クイズで伝えたりする。	・交流に向けて、説明や進行などの役割分担をしたり、クイズを作ったりする。		○		・自分の役割が分かっている。	
				○	○		・文字の大きさなど見やすさを考えながらクイズスライドを作っている。	
			・大曲支援学校中学部２年生にＧｏｏｇｌｅスライドを使って紹介する。		○	○	・見る人に伝わるようクイズの出し方を工夫している。	
	1	・「増田の内蔵」について、項目毎にまとめた友達の発表を聞き、分かったことや気付いたことを伝える。	・まとめた内容を発表し合い、共有する。		○	○	・新しく知ったこと、気付いたことを伝えている。	
「増田の内蔵」ち・が・い　発見！（５）	2	・自分たちの住まいや暮らし方と比較し、違いを知る。	・「増田の内蔵」と自分たちの住まいの違いを項目（建物・歴史・生活）毎にまとめる。	○	○		・まとめたことから自分の暮らしと比べ、項目に合わせて書き表している。	
			・増田町観光協会会長に質問したり、必要な写真や動画を撮影したり、する。（校外学習）		○		・適切な言葉遣いで質問したり、回答をメモしたりしている。	
					○		・比較するために必要な写真や動画を撮影している。	
	2	・今の生活との違いから、気付いたことを伝え合い、表現する。	・暮らし方について家族等と話した内容をまとめる。		○	○	・家族等と話し合ったことでより自分の生活に関心をもっている。	
			・今の生活と比較した内容から気付いたことをグループの友達に話したり、掲示物にまとめたりする。		○		・自分たちの生活との違いを見つけて友達に伝えている。	
	1	・友達の発表を聞いて気付いたことを伝え合う。	・まとめたことを発表し合い、意見交換する。		○	○	・友達の発表を聞いて、自分の考えや感想を伝えている。	

「増田の内蔵」ひ・み・つ　発表！（12）（本時10／12）	1	・伝えたいことや必要な情報の選び方を知る。	・今までまとめた掲示物やワークシートから伝えたいことを選ぶ。		○		・伝えたいことや必要な情報を選んでいる。
					○		・事実と自分の考えの違いを考えて選んでいる。
	1	・相手に伝わりやすい言葉の使い方や表現の仕方を考える。	・大曲支援学校中学部２年生の地域紹介映像から、映像作りで参考にしたい視点を見つける。	○	○		・参考映像から取り入れたい視点（写真の数、映像の長さ、切り替わりの時間など）を見つけている。
	6	・映像作りにおいて、見やすい映像にするために自分の考えを伝えたり、友達の意見を受け入れたりする。	・絵コンテ作りをする。 ～素材の選択 ～テロップ作り ～ナレーション決め		○		・友達と相談しながら絵コンテを作っている。
				○	○		・伝える内容を明確にしてテロップやナレーションを決めている。
			・「iMovie」を使って映像を作る。 ・お互いに発表し合い意見交換する。 （画面の見やすさ、ナレーションの話し方） ・映像を改善する。		○		・タブレット型端末を使って、役割分担したことを表現している。
				○	○		・見やすさを考えた文字の大きさや色合いを決めている。
				○	○		・説明に適した写真を挿入して画面を作っている。
					○		・見る人に伝わるような声の大きさやスピードで話している。
	3（本時2／3）	・他者からの意見を参考に、見る人に伝わりやすい表現になるよう工夫して映像作りをする。	・「iMovie」を使って映像を作る。 ・お互いに発表し合い意見交換する。 （写真やテロップの表示時間、ナレーションの聞きやすさ等） ・映像を改善する。		○		・友達と相談して映像作りをしている。
					○	○	・他者からの意見を聞いて分かったことを整理して映像を改善している。
	1	・完成した映像を見合い、感想を伝え合う。	・グループごとに映像を発表し合う。		○	○	・お互いの発表を聞き、内容を理解し、感想を伝え合っている。
「増田の内蔵」ひ・み・つ　発信！（2）	2	・調べたことを伝える楽しさを味わいながら、自分たちの住む地域のよさや大切さを伝え合う。	・大曲支援学校や観光協会会長にできた映像を見せ、映像の感想を聞いて、感じたことを発表し合う。		○	○	・感想を聞いて自分の考えを発表している。
			・ＹｏｕＴｕｂｅで、できた映像を発信する。		○		・映像が配信されている様子を見て感想を伝えている。
			・「増田の内蔵」と自分たちの暮らしについて振り返る。		○	○	・地域の中で生活するよさを知り、自ら地域の人と関わろうとする気持ちをもっている。

＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫＞

【ねらい】
・教師や友達と一緒に取り組むことで解決できるねらいをせっていする。
・課題だけではなく、長所である人とやりとりする力を伸ばすねらいを設定する。

【めあて・課題】
・活動内容や写真等から自分たちでめあてを決めるようにしたり、取り組む内容が分かるように課題を具体的に示したりする。

【まとめ】
・学習した内容が視覚的に分かるように電子黒板や制作した画像、映像などを提示する。

【振り返り】
・「か・ま・くら」カードを活用し、各視点で振り返る。
「か」：考えたこと
「ま」：学んだこと
「くら」：比べたこと
※別紙資料参照

５　本時の計画（本時：20／24 時間）

(1) 本時の目標

・調べたことが伝わりやすい映像表現になっているか考え、友達に伝えたり、相談したりしながら「増田の内蔵」の映像を作る。　知　技　思判表

(2) 個別の目標（評価：Ａ達成できた　Ｂおおむね達成できた　Ｃ努力を要する）

グループ	生徒名	本時の主たる目標（期待する具体的な学びの姿）	評価
「歴史」	D	・写真やテロップの表示時間など、チェックポイントを参考に改善点を決めたり、変更点を友達に伝えたりして映像を作る。	
	B	・友達からの依頼を受けながら、テロップを読んだり、必要な写真の表示時間やレイアウトを変更したりし、友達や教師と一緒に映像を作る。	
「建物」	F	・友達と相談したり、依頼を受けたりしながら、ナレーションを改善したり、写真の表示時間を変えたりして映像を作る。	
	G	・チェックポイントを参考に、自分の考えを伝えたり、伝わりやすさを考えて写真やナレーションを改善したりして映像作りをする。	
「生活」	A	・友達からの依頼を受けて写真やテロップの表示時間を変更したり、チェックポイントを参考にナレーションを入れたりして映像を作る。	
	C	・友達の映像のよいところを見つけて伝えたり、友達の意見を聞き入れたりしながら映像作りをする。	
	E	・チェックポイントを参考に改善点を見つけたり、自分の考えを友達に伝えたりするなど、相談しながら映像を作る。	

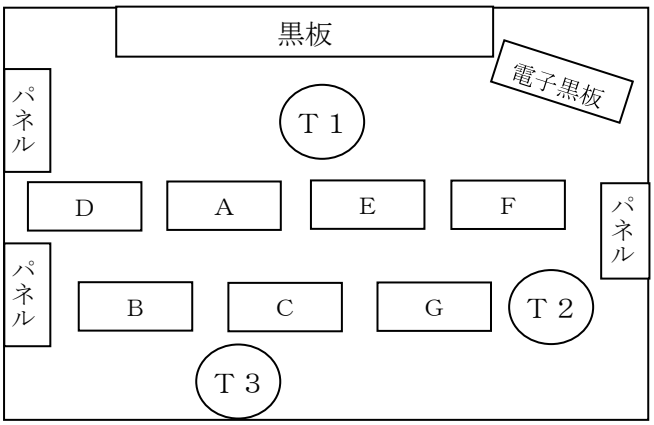
(3) 展開

分	学習活動（ＩＣＴを活用した活動）	指導上の留意点（ＩＣＴの活用に関する留意点）	準備物
5	1　本時の学習内容を知る。 ・動画を見る。 ・前時を振り返る。 2　本時のめあてや課題を知る。 ・チェックポイントを確認する。 〈めあて〉 調べたことが伝わるよう、考えを伝えたり、相談したりして映像を作ろう。 〈課題〉 どんな考えを伝えたり、相談したりすると調べたことが伝わる映像になるかな？	・増田町観光協会会長からのメッセージ動画を提示し、より伝わりやすい映像を作ろうとする気持ちを高める。 ・前回の学習でどんなことを学んだか、何が分かったか振り返るように、前時の「かまくらカード」を見直すよう伝えたり、問い掛けたりする。 ・追加したチェックポイントに気付くよう、画面やナレーションに関して、表現の工夫の仕方や改善できることについての言葉を引き出す。（Ｔ１） 映像作りのチェックポイント 画面 ・写真やテロップの表示時間 ・文字の大きさ、色、位置、テロップの長さ ・写真の鮮明さ ナレーション ・聞きやすさ （途切れていないか、聞き取れるか） ・口の開き方、スピード、声の大きさ ※下線が追加したチェックポイント	掲示物 予定表 タブレット型端末 電子黒板 チェックポイントカード

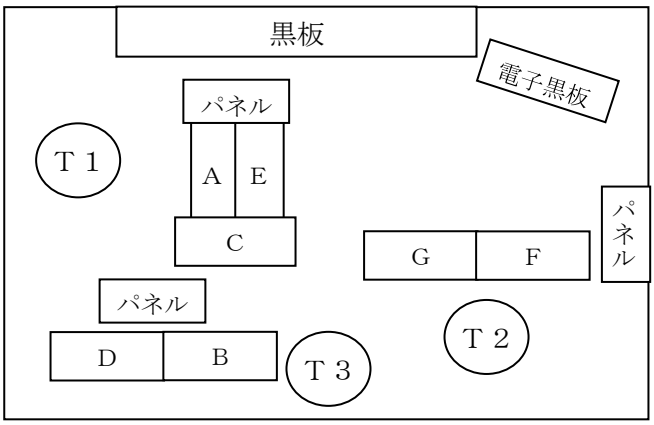
28	3　グループごとに映像を確認・改善する。（第２場面） ①グループで相談し、できる工夫や改善点を話し合う。 ②役割分担をする。 ・画面の修正 ・ナレーションの変更　等 ③分担をもとに映像の見直しをする。 ④グループで出来栄えを確認する。 歴史グループ：（D）（B）（Ｔ３） 建物グループ：（F）（G）（Ｔ２） 生活グループ：（A）（C）（E）（Ｔ１）	・制作時に適宜確認したり、グループ内での意見交換をしたりしやすいように、手元に工夫できることや改善点を記入した「チェックポイント」カードを用意する。 ・各グループの制作した映像の絵コンテをプリントアウトして配付する。 ・分担した役割を終えたり、改善途中で迷ったりしたときは、友達と相談してみることを提案するなど、教師が仲立ちし、友達の意見を聞く時間を設 ・けるよう伝える。（Ｔ１）（Ｔ２）（Ｔ３） 自分の考えを伝えるのが難しい生徒の意見を復唱して伝えたり、選択肢から選ぶ場面を設けたりする。（Ｔ１）（Ｔ２）（Ｔ３）	タブレット型端末 チェックポイントカード 絵コンテパネル
10	4　グループごとに作った映像を発表する。 発表の流れ ①工夫したこと、映像作りで気を付けたポイントを伝える。 ②映像を流す。 ③感想や意見を発表する。	・工夫したところやポイントを板書して、映像を見る視点が明確になるようにする。（Ｔ１） ・自分から感想や意見を発表しやすいように、チェックポイント表を参考にするよう伝える。 ・映像を見た感想を発表する際は、なぜそう思ったか理由を話すことを伝える。（Ｔ１） ・意見を出す際の手掛かりになるようにチェックシートを指さしたり、補足して伝えたりする。（Ｔ２）（Ｔ３） ・出された感想や意見から改善することが明確になるよう、自分のグループの絵コンテにメモを取るよう提案したり、板書に印を付けたりする。（Ｔ１）	電子黒板 タブレット型端末
2	5　本時のまとめをする。 〈まとめ〉 写真やテロップの表示時間やナレーションの見直しについて話し合うことで、調べたことがより伝わりやすい映像になる。	・より伝わりやすい映像にするためにどんなことをしたかが分かるように、改善時に意識したチェックポイントを再度問い掛けたり、板書した改善点を繰り返し伝えたりする。（Ｔ１）	
5	6　振り返りをする。 ・「かまくらカード」の「ま（学んだこと）」についてカードに記入し、発表する。 ・次時の確認をする。	・「かまくらカード」を提示し、どんなことをしたら映像がよくなったかを「ま（学んだこと）」シートの定型文を参考に書くように話す。（Ｔ１）	かまくらカード 電子黒板

(4) 配置図

導入時



活動時



(5) 評価規準

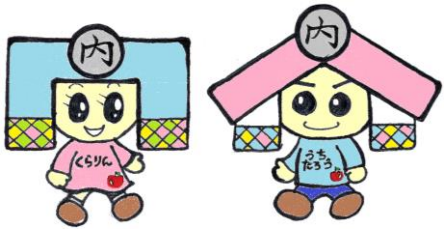
・見る人に伝わりやすい映像にするために、チェックポイントを手掛かりに、工夫できることや改善点に関して自分の意見を伝えることができたか。
・映像のレイアウトやナレーションを友達と相談しながら、工夫して映像を作ることができたか。

(資料)

ふりかえりキーワード

かまくらカード

か	考えたこと	例：○○について考えて、△△と思った。 ○○について、今度は◇◇してみたい。
ま	学んだこと	例：○○について、◆◆と分かった。 ○○について、□□ができた。
くら	比べたこと	例：友達の意見と比べて、●●だと思った。 ☆☆と■■を比べて、☆☆を選んだ。



※生徒のイラストをもとに作った内蔵キャラクター
「くらりん」と「うちたろう」

高等部　第２学年　職業科　学習指導案

日　時：令和４年11月30日（水）11：25～12：15
場　所：高等部校舎　高等部２年１組教室
指導者：水谷　智子（Ｔ１）、古関　綾子（Ｔ２）

１　単元名　「働く人の生活④～職業生活に必要な力とは～」

２　目標

(1)　先輩から卒業後の生活について聞き、職業生活と学校生活との違いを知る。　知　技
(2)　先輩の働く生活を知り、職業生活に必要な力を考える。思判表
(3)　自分の生活の課題を見付け、これからの生活に生かしていこうとする意欲や態度を養う。学　人

３　生徒と単元について

(1) 生徒観

男子３名、女子２名、計５名の学習グループである。うち、１名は職業科の学習を個別に行っている。全員が一般企業での就労を希望しており、これまでの実習では、高齢者福祉施設、リサイクル工場、縫製工場などの企業の他、就労支援Ｂ型事業所などでも実習を行ってきた。実習では現場の指示をよく聞き、指示通りに作業を進めることができ、実習先から高い評価を得た生徒もいる。また、後期実習前には障害者職業センターの「職業ガイダンス」を行い、働くために必要な力や、今から取り組めることについて学習し、就労に対する意識を高めてきている。日常生活においては、教師や友達と出来事を話したり、自分の気持ちを言葉で表現したりと、楽しく会話をすることができる。しかし、集団での学習場面や自分の考えを求められる場面になると、声が小さくなったり、沈黙してしまったりと、自分の考えを表現することが難しい場合がある。また、書くことへの苦手意識をもっている生徒もいる。そこで学習では個別に学習を進めることができるロイロノートを活用し、一人で学習に取り組むことができる環境を設定している。それにより自分の考えを表現しやすくなり、書くことへの苦手意識が低くなってきている。

(2) 単元観

私たちが職業生活を営むためには、職業に必要な技術や技能のみではなく、「健康管理」、「金銭の管理」、「余暇の充実」、「職場でのコミュニケーション」など、生活に関する力やコミュニケーションに関する力が必要とされる。「健康管理」とは、健康な心と体を維持し、休まずに出勤できること、「金銭の管理」とは、給料を管理し、生活を営んでいくこと、「余暇の充実」とは、勤務後や休日に休養や気分転換をし、勤務のために心身ともに健康な状態を維持すること、「職場でのコミュニケーション」とは、職場での人間関係を円滑に行い、業務を行いやすくすることと考える。しかし、普段の生活では、就寝が遅く生活リズムが乱れがちになり、欠席が多い、小遣いの浪費、休日はゲームに多くの時間を費やして過ごすなど、卒業後に職業生活を営み、維持していくためには、課題を抱えている生徒が多い。そこで、職業生活を営み、維持し、充実させるためには、どのような力を身に付けた方がよいかについて考えるとともに、その力を身に付けるために、普段の生活を見直したり、改善しようとしたりする意識を高めたいと考え、本単元を設定した。

(3)　指導観

自分の生活の課題を見付け、職業生活に必要な力を生活で身に付けようとする意欲や態度を養うために

・現在の自分が高等部生活のどの時期にいるかが分かり、卒業後の生活について意識することができるように、高等部入学から卒業までについての行事や実習の回数などについて表で示す。
・課題を身近なこととして考えることができるように、昨年度卒業した先輩から、職業生活についてアンケートをとり、まとめる機会を設定する。
・卒業後の職業生活を意識し、職業生活に必要な力を身に付けようとする意欲や態度を養うために、卒業した先輩たちの生活の様子と自分の生活を比較し、自分の生活を振り返る機会を設定する。

職業生活に必要な力を考えることができるように

・職業生活に必要な力を「健康管理」「金銭の管理」「余暇の充実」「職場でのコミュニケーション」の四つのカテゴリーに分け、図や表で視覚的に示す。

生徒が意欲をもち、自分の考えや思いを表現するために

・自分の考えを発言したり、書くことに苦手意識をもっていたりする生徒が多いため、個々に自分の考えを表現したり、自分の考えをデジタルでの手書きや文字入力などで表したりできるように、個別のタブレット端末でロイロノートを使用する。

4　指導計画（総時数７時間）

小単元	時数	小単元の目標（ねらい）	学習活動（ＩＣＴの活用）	評価の観点 知技	評価の観点 思判表	評価の観点 態度	評価規準	学びを実感し、主体的に学ぶ姿を実現する工夫（ＩＣＴの活用）
学生の生活（1）	1	・学生生活のアンケートに答え、自分の生活を振り返って考える。	・自分の生活についてのアンケートに答える。			○	・学生生活についてのアンケートに答え、自分の生活を振り返っている。	**＜単元を見通す工夫＞** ・高等部２年生は、高等部生活のどの位置にいるかを確認できるように、入学から卒業までの表を提示する。 ・学習の流れや単元のゴールを提示する。 **＜学習の意味や意義を理解する工夫＞** ・職業生活に必要な力を、アンケートの項目に沿い、四つのカテゴリーに分け提示する。 ・自分と先輩の生活を比較する場面を設定する。 ・図や絵を用いて、視覚的に生活について比較できるようにする。 **＜ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方の工夫＞** ・友達の考えを自分の生活にも生かせるように、まとめや、振り返りを友達と共有する。
働く人の一日（4）（本時4／4）	1	・卒業した先輩からのアンケートをまとめ卒業後の生活について知る。	・卒業した先輩に職業生活についてのアンケートを依頼する。		○	○	・卒業後の生活に関心をもち、卒業した先輩へ聞きたいことを考えている。	
	1		・ロイロノートを使用し、アンケートの項目を四つに分ける。	○	○	○	・アンケートの項目を四つに分け、職業生活に必要な力について整理している。	
	1		・ロイロノートを使用し、アンケートをまとめる	○	○	○	・卒業後の生活に関心をもち、卒業した先輩のアンケートをシートにまとめている。	
	1（本時）	・先輩の生活と自分の生活を比べ、自分の生活を見直す。	・ロイロノートを使用し、先輩の生活と、自分の生活を比べる。 ・続けていきたいことや、改善したいことを考える。		○	○	・先輩の生活と自分の生活を比べ、生活の違いが分かっている。 ・自分の生活を振り返り、続けていきたいことや、改善していきたいことを考えている。	
職業生活に必要な力とは（2）	1	・職業生活にはどんな力が必要かを考える。	・生活を比較した図を見て、職業生活に必要な力について考える	○	○	○	・職業生活に必要な力とは何かを考えている。	
	1	・今後の生活や学習で身に付けたいことや改善していきたいことをまとめる。	・今後の生活で身に付けたいことや改善していきたいことを考え、まとめる。		○	○	・職業生活に必要な力が分かり、今後の学習や生活に生かそうとする。	

5　本時の計画（本時：５／７時間）

(1) 本時の目標

・先輩が職業生活で、なぜ睡眠に気を付けているかを考える。思判表

・先輩と自分の生活を比べ、自分の生活を見直す。　学　人

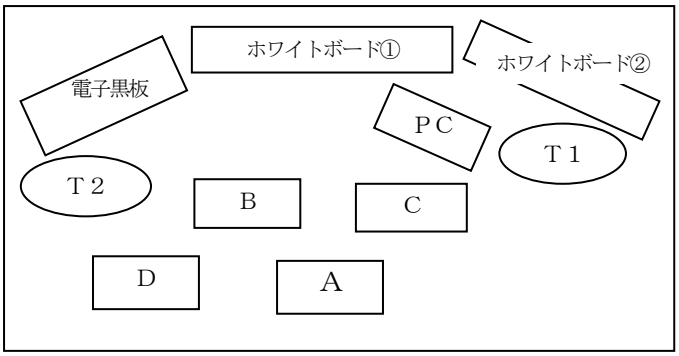
(2) 個別の目標（評価：A達成できた　Bおおむね達成できた　C支援、手立ての改善がある）

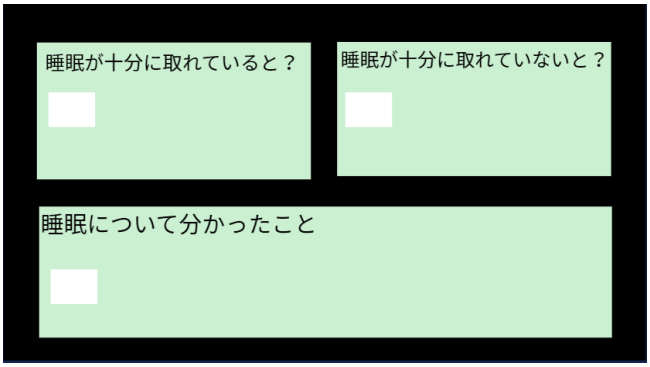
生徒名	本時の主たる目標（期待する具体的な学びの姿）	評価
A	・職業生活を送る上で、睡眠の大切さについて知り、先輩がなぜ睡眠に気を付けているかを考える。 ・自分の生活を振り返り、続けていきたいことや改善していきたいことを考える。	
B	・職業生活を送る上で、睡眠の大切さについて知り、先輩がなぜ睡眠に気を付けているかを考える。 ・自分の生活を振り返り、続けていきたいことや改善していきたいことを考える。	
C	・職業生活を送る上で睡眠の大切さについて知り、先輩がなぜ睡眠に気を付けているかを考える。 ・自分の生活を振り返り、続けていきたいことや改善していきたいことを考える。	
D	・職業生活を送る上で睡眠の大切さに関心をもち、睡眠について調べる。 ・自分の生活を振り返り、続けていきたいことや改善していきたいことを考える。	
E※	・睡眠の大切さに関心をもち、睡眠の大切さについて調べる。 ・自分の生活を振り返り、続けていきたいことや改善していきたいことを考える。※後日個別に実施	

(3) 展開

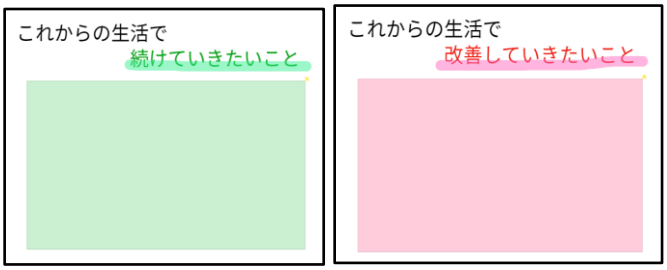
分	学習活動（ＩＣＴを活用した活動）	指導上の留意点（ＩＣＴの活用に関する留意点）	準備物
5	１　本時の学習を知る ・働くための「準備期間」について考える。 《めあて》 先輩が職業生活で、なぜ（睡眠）を大切にしているかについて考え、(自分の生活）を見直そう。	・高等部卒業までに身に付けておきたいことを知るために、高等部入学から卒業までの表を提示し、高等部生活の中で高等部２年生の位置を確認する。 ・本時のめあてを理解するため、めあての一部を穴埋めにし、ホワイトボードに掲示する。※（　　）は穴埋め部分 ・「睡眠」に関することが多いということが分かるようにするため、「先輩のアンケートの回答「健康のために気をつけていることを内容ごとにまとめた図を電子黒板に表示する。（Ｔ２） ・本時の学習を理解し、生徒が意欲的に学習に取り組むことができるようにめあてと学習の流れをホワイトボードに掲示する。	・ホワイトボード ・入学から卒業までの表 ・先輩のアンケート ・電子黒板
30	２　睡眠に関することや、先輩の生活について考える。 （１）睡眠について調べ、共有ノートへ調べたことを集める。 （シート①） ・睡眠が十分に取れている場合 ・睡眠が十分に取れていない場合 ・睡眠について分かったこと	・タブレット型端末の操作を行いやすくしたり、友達と協力して活動したりできるように、ペアで活動する場を設定する。（生徒Ａ・生徒Ｂ　生徒Ｃ・生徒Ｄ） ・互いの学習活動の様子が分かるように、共有ノート上に、「睡眠が取れている場合」と「取れていない場合」についてのシートを用意する。 ・共有ノートへの記入の仕方が分かるように、Ｔ１の指示に合わせ、Ｔ２が電子黒板で操作を演示したり、記入例を表示したりする。 生徒Ｂ　生徒Ｄ ・学習内容が分かり意欲的に学習に取り組めるように、教師の指示を繰り返し伝えたり、教師と一緒にシートに記入したりする。（Ｔ２）	・タブレット型端末（ロイロノート使用） ・電子黒板
	（２）先輩が職業生活において、なぜ睡眠を大切にしているかを考える。 ・先輩の睡眠時間と自分の睡眠時間を比べる。 ・先輩たちが睡眠を大切にしている理由を考える。（シート②） 「先輩たちは（明日の仕事）のために、十分な（睡眠）を取っている」	・先輩の生活と、自分の生活を比べることができるように、シートを画面上に並べて表示する。 ・前時までの学習（「自分の生活」に関するアンケートや「睡眠についてのチェックシート」）を参考にシートへ記入するように話す。 ・睡眠を大切にしている理由を、順序立てて考えることができるように、キーワードやイラストなどで電子黒板に示す。（※Ｔ２に配信） ・先輩たちが睡眠を大切にしている理由を考えやすくしたり、考えを共有したりするため、理由を穴埋めにしたシートを配布する。	
15	３　これからの生活で続けていきたいことや、改善していきたいことを考える。（シート③④） ・シートに記入する ・シートを提出箱に提出する ・発表する	・自分の生活を振り返ることができるように、睡眠について調べたことや、先輩や自分の睡眠の様子やチェックシートなどを参考にすることを伝える。 ・生徒が考えや気持ちを表現しやすいように、発表は無記名で行うことを伝える。 ・自分の生活に合わせて内容を選べるように、「続けていきたいこと」「改善していきたいこと」の２種類のシートを用意する。 ・記入したことを友達と共有したり、自分の生活を見直そうとしたりする気持ちを意識するために、提出されたシートを「画面共有」し、発表する時間を設ける。	・タブレット型端末（ロイロノート使用） ・ホワイトボード

(4) 配置図や教材





シート①



シート③

シート②

(5) 評価規準

先輩が職業生活で気を付けていることが分かり、自分の生活を振り返っている。

公開研究会　分科会１（小学部）記録
授　業　者：高橋　栞、高山知子、小番俊和、鈴木圭太 分科会司会：谷口和江　　分科会記録：高橋裕子 指導助言者：齊藤　徹（秋田県教育庁特別支援課指導班指導主事）
【授業者から】 ・本単元は、ジュース加工所での見学、学習を通して、おいしいりんごジュースがどうやって作られているか知ること、地域や地域の特産物について興味や関心を深め、自分たちの生活とのつながりを考えること、見学して分かったことを相手に伝えること、またその伝え方を考えることをねらいとした。また、自分たちの生活とのつながりを考えることについては、働いている人が白いエプロン、帽子などを身に着け、ごみや髪の毛が入らないように衛生面に気を付けておいしくて安全なジュースを作っていることを知り、普段から清潔に保つことや給食や調理実習の身だしなみに気を付けること、大切に食べ物をいただくことなど日常生活場面で生かしてほしいと考え、ねらいとした。 ・単元も中盤になってきたが、家で育てているりんごを学校に持ってきてみんなに食べさせたいと話したり、自分たちでりんごジュースを作ってみたいという声があがったりと、見学して分かったこと、感じたことが日常生活や学習に生かされる場面、もっと地域や特産物に興味をもち、愛着が沸く場面などが見られている。 ・本単元では、ロイロノートを活用し、質問ノートや加工所マップの発見カード、本時で見ていただいたクイズのスライドを作成している。これまで国語・算数の学習でも取り入れ、学習効果があり、普段の休み時間でも絵を描くなどして児童になじみ深いロイロノートを活用し、書字への負担を減らすことで、より児童の気付きを促し、アウトプットできるようにした。 ・本時では、前時までにロイロノートで作ったクイズを一人一人発表したり、「おいしい」「安全」の観点から答えの理由を述べたりすることで、全ての工程でおいしくて安全に気を付けてジュースを作っていることが分かることをねらいとして、授業を計画し、展開した。 ・授業をしてみて、導入の話が長くなってしまい、活動の時間が十分に確保できなかったことが反省点である。また、クイズの答えをもっと紹介したり、引き出したりすることができたらよかった。しかし、子どもたち一人一人が観点からずれることなく、クイズの答えの理由を答えていた。子どもたちのがんばりがよく見られてよかった。
【参観者から】 ・子どもたちが学びに向かう楽しさを感じられる授業だった。解答を○か×で答えさせて、その後、子どもたち同士で理由を直接話し合って、学び合う機会を設定するとより理解が深まったのではないか。自分たちで理由をゼロから考えるところもねらえるのではないか。 ・「おいしい」「安全」についてとても理解している様子が伝わってきた。言葉でたくさん理由を説明していたが、それを実際にやってみる、言葉を行動でやってみることでより理解が深まるのではないか。また、その言葉にあったイラストや写真を選ぶという活動で、より具体的にさらに理解を深めることができるのではないか。 ・児童の皆さんが創意工夫をして、非常に楽しそうに学んでいる姿がとても印象的だった。生活との関連を非常に大事にされているという印象を受けた。今後、クイズ大会を開くところへ向けて、例えば、ジュースを作る過程で髪の毛が入るといけないという衛生上の問題があったときに、実際に髪の毛が入った状態の実物を用意するなど、何か具体物を用いて説明するのも一つの案ではないか。 ・加工所見学の写真や映像を活用することで理解を深めることができるのではないか。実際に加工所で自分たちが見学したものや取材したことを児童が想起し、教師が発問することで、さら

に児童の考えを引き出したり、考えを広げたり、児童同士の話し合い活動に発展させたりと、より理解を深めることができるのではないか。
・スライドの作成について、解答の１と２で色分けする、解答の一文を短くする、イラストや写真などの視覚情報を入れるなどすると分かりやすくなったのではないか。
・クイズ大会の面白さを皆さんで共有できるという点においては、スライドの中に映像を入れたり、ピンポーンなどの音を入れてみたりという工夫ができるともう少し子どもたちも楽しさを共有しながらクイズ大会ができるのではないか。
・児童一人一人の表現ができる場が整えられていてすばらしいと感じた。スライドの内容にもう少し写真や動画を入れることで、より子どもたちの理解が深まるのではないか。また、間違った答えを選択したときにスライドにリンクしていく形で、その答えを選ぶとどういうふうになるのかというスライドを作っていくと子どもたちにとって理解が深まるスライドになるのではないか。

【指導助言】
・昨年度から ICT 活用推進モデル校として、全校を挙げて組織的な実践および研修検討を重ねてきた結果が存分に発揮されたのではないか。今回の小学部の授業は、知的障害特別支援学校の小学部の ICT 活用にふさわしい授業だった。
・授業は、とても温かい雰囲気で子どもたちがお互いを意識しながらのびのびと学習している様子が印象的だった。普段から行っている学級経営そのものが授業や児童の様子に現れている。
・生活単元学習は、実際の生活とは切っても切り離せないもの。子どもたちの生活から発展し、資質・能力を身に付けながら、現在の、また将来の生活につながるような授業づくりをしていただきたい。そういった意味で、今回の授業は、学校の窓から外を見るといつも見えていて、家庭でも食べている旬のりんごを使ったりんごジュース、まさに子どもたちの実際の生活から発展したものと言える。さらに授業で取り上げられた「おいしい」「安全」というキーワードについては現在の生活に密着したキーワードであり、将来の生活にもつながるものになるのではないか。事前授業の際に子どもから出たつぶやきを拾い、それを広げ、学びにつなげたというとてもよい例だった。
・児童の教育的ニーズを踏まえたうえでねらいを明確にし、自立活動の視点から表現方法の一つとして ICT を活用することは、情報活用能力という視点から、さらには子どもたちの将来のためにも必要な力として横手支援学校では常に位置づけられているのではないか。どのような表現方法が将来の児童生徒のどのような力に結び付くかという部分を共通理解しながら、将来の生きる力につながる取組にしていってほしい。
・子どもたちのこれからの人生を考えるとタブレット端末、スマートフォンなどの電子機器はいつも肌身離さず持ち歩くものになっていくはずだ。まずは端末に触れる、いつでも自分から操作できるという環境が大切になる。
・ICT は子どもの実態を考慮しながら、どのように活用すれば指導の効果を高めることができるかを組織的に考えて、計画的に進める必要がある。今回の授業では、児童の気持ちに沿って授業を展開することで効果的な活用の場面が作り出されていた。Ｔ１の問いかけにより、友達のクイズが気になりはじめ、さらに答えの理由を話してほしいと伝えたことで子どもたちの知的好奇心を揺さぶった。友達の理由を聞いて、「あ、そうだった」と気付いたり、「あれ？私の考えとちょっと違う」「どうしてこう考えたんだろう」と相手の意見に触れたり、自分の考えを修正したりできるような機会を設定していた。その結果、タブレットを操作しながらクイズを出して楽しい、主体的な活動が多く見られた授業となった。
・ICT を手段としながら何を達成するのか、子どもたちに何を身に付けさせるのか、子どもたちの学びが充実したものになるよう、取り組んでいっていただきたい。

公開研究会　分科会２（中学部）記録
授　業　者：後藤ゆり子、高井哉子、辻嶋真理子 分科会司会：高橋知希子　　分科会記録：柴田秀幸 指導助言者：小野武則（秋田県教育庁特別支援課指導班指導主事）
【授業者から】 ・「増田の内蔵」に関する学習は１学期から継続して取り組んでいる単元で、調べ学習をして、情報のまとめ方を知ったり、色々な人とやり取りをする中で自分の意見を伝えたり、相手の意見を受け入れたりすることをねらいとして取り組んでいる。 ・本単元は「増田の内蔵」について調べたり、自分たちの生活と比較したりして作った掲示を、基に映像作りに取り組む。 ・作成した増田の内蔵に関する映像は、中学部１・３年生や増田の観光協会会長、交流している大曲支援学校中学部２年生に発表し、最後に YouTube で配信した。 ・映像制作にあたっては、生徒同士で画面やナレーションに関するチェックポイントを出し合い、制作の途中でもチェックポイントを改善しながら授業を進めてきた。 ・これまでの映像制作場面では、チェックポイントを基に映像を見直し、できた映像を見合い、他グループから意見や感想をもらうと言う流れを繰り返して授業を進めてきた。他の生徒からもらった意見をグループに持ち帰って考える場面も設定した。映像の改善の流れを繰り返してきたことで意見を伝え合ったり、他の生徒から出た意見を受け入れたりできるようになってきた。 ・本時の授業では、改善してきたチェックポイントを基に、映像の場面ごとに、グループで見直した。 ・事前研究会での指導助言を受けて、前時の振り返りを思い出すための時間を設定したり、生徒の言葉からまとめをしたりするようにした。 ・授業での生徒の様子は、緊張からなかなか意見を伝えたり、相談したりすることが難しいグループもあった。 ・タブレットを使用したことで、画面を視覚的に共有し、考えを伝え合いながら映像の確認ができた。また、手元のチェックポイント表を手がかりに相談し合っていた。 ・振り返りの時間を十分に確保することができなかったが、スクールワークを活用し、デジタルのワークシートを使用することで、手書きよりも早く振り返りをすることができていた。 ・デジタルのワークシートは、いつでも学びを思い返すことができるように、印刷してファイリングしている。 ・増田町観光協会会長の話を基に話し合ってみるように伝えたり、承認の言葉がけを多くしたりするともっと活発なやり取りができたのではないかと思っている。 ・授業時間を意識し過ぎて、まとめが簡単になりすぎた。もう少し丁寧にまとめができればよかった。 ・授業では１名の欠席者がいて、２人ずつの小グループでの話合いを中心に授業を展開した。 ・生徒は、映像を見て、感想や意見を言えるようになってきている。 ・今後は自発的な意見交換や、たくさんの意見から取捨選択できるように、グループの人数を増やしたり、意見交換に繋がるような場を設定し、みんなの前で自分の考えを伝えたり、受け入れたりする経験を増やしていきたい。
【参観者から】 ○生徒が他者からの意見を参考に、見る人に伝わりやすいように考えたり、工夫したりするための ICT 機器の活用は効果的であったか。

・ICT 機器の活用は効果的であった。生徒がペアで iMovie を使い、テロップの色や動画の長さを工夫し、主体的に活動していた。本時の様子から、これまでも友達からの意見を基に改善してきたことが分かった。
・iMovie を使用したことで試行錯誤できる。また、二人組みで動画編集をしているときに活発に意見交換していた。
・振り返り場面で、工夫した場面についての感想が少なかった。意見が欲しいところについて話し、聞き手もそのことについて意見を伝えるという基礎的な部分が必要だった。
・チェックシートが明確であり、動画の良いところや改善点を共有できていた。
・チェックポイント以外の工夫した点や、チェックポイントにはない字幕のサイズや時間など効果的な表現について教師が取り上げ、生徒に考えさせても良かった。
・「映像制作→チェック→発表→意見を聞く」という繰り返しで生徒の力が身に付いている。
・チェックシートの項目を見直したり、予告編の制作や、違うアプリを試すなど、別の視点からの意見が出るようにしても良かったのではないか。
・生徒が意見を出し、相談しやすいようにチェックポイントを用意した。チェックポイントを活用した意見の出し合いはできてきているので、今後ステップアップしたやり取りができるようにしていきたい。
・チェックポイントを生徒が把握し、改善しているところが素晴らしく、良い取り組みだった。
・映像作りの次は、パワーポイントでのプレゼンなど、直接の発信に発展していっても良いのではないか。
・試行錯誤が保証されていた。
・授業の前後で、改善した点をより比較しやすい形で提示できればよいのではないか。また、改善点を教師が印を付けるなど、焦点化して生徒に提示できれば、意見交換がしやすくなるのではないか。
〇振り返りの工夫
・スクールワークでワークシートを配布して振り返りをしたことで、書くことに苦手意識をもっていた生徒も自分の考えをまとめることができていた。また、ワークシートを電子黒板を使って共有することもでき、生徒の意欲につながった。記入したワークシートは印刷し、すぐに振り返りができるようファイリングしている。
・中１でもスクールワークを使用し、iPad で振り返りを行った。書くことが苦手な生徒も短時間で記入することができ、意欲的に学習に取り組む姿が見られた。
・文字を書くことが苦手な生徒にとって、振り返りワークシートにテキスト入力することは、非常に有効だと思う。書字に時間が掛からないので、考える時間を確保できるため、良い手立てだった。
・本校では、振り返りの工夫について研究として取り上げてきたが、他校ではどのような工夫をしてきたのか紹介してほしい。
・授業の様子を動画で撮影し、子どもたちと教師で見合って意見を出し合う。
・学習の成果を撮影した動画を見ることが分かりやすい。また、授業を通して成長した部分を生徒自信が言葉にしたり、生徒の思いを言葉にして表現することについて、もう少し教材研究をしていかなければいけないと感じている。
・振り返り場面では動画を活用している。iPad を使用するのであれば、再現性が一番の強みだと、秋田大学の加藤先生から助言頂いたことがある。そのことをじ定時授業を見て実感した。
・アプリありきの授業では、まとめがうまくいかないことがある。そのため、本校では、動画で振り返ることが多い。
・ロイロノートに入れてあるワークシートで振り返りを行い、保存している。次時は、そのワー

クシートを提示して前時を想起させている。ワークシートを提示する時は一部を隠したり、場合によっては言葉だけで想起させたりする工夫も取り入れている。大事なことは、子どもの言葉で語らせ、話をさせ、子どもの理解度や再現性を確認しながら iPad を効果的に活用するようにしている。

○作成した生徒の動画について

・私自身が小学校６年生まで内蔵に寝ていた。今は、その内蔵は改装され、民宿や喫茶店として活用されている。また、　横手市が「増田の内蔵」を打ち出してきた後に、日の丸酒造の内蔵で結婚記念写真を撮った。当たり前に見ていたものが学習の題材として使われている映像を見て感動した。

・よく分かるポイントを短時間にまとめられていてよかった。映像を編集する技術も身に付けていることが分かり、本当にがんばっていると感激した。

・生徒の高いモチベーションが、今後どのような活動につながっていくかが気になった。増田町観光協会会長からのメッセージがモチベーションの一つであると思う。今後、できあがったものを地域に返していったり、作ったものをとおして地域の人とつながって行くと、素晴らしいことだと思う。

・次の動画制作の機会があるのであれば、内蔵の見学をとおして、生徒が感じたこと（暑さ寒さなど）をテーマに動画を制作してもよいかもしれない。

・文化遺産の発信で生徒が地域の中で役割を担い、地域とつながりのある ICT の活用を続けていってもらえたら素晴らしいのではないかと思った。

・動画に生徒を登場させてもよいのではないかと思った。例えば、画面端に生徒が話している動画を合成して、話している生徒の表情が見えるようにしてもよいのではないかと思った。

・授業配信で見た映像よりもレベルアップしていた。YouTube で不特定多数の方に見ていただくことで、見て楽しんでもらうだけでなく、発信するものとしての責任感を育んだり、普段の生活の中で YouTube やテレビの旅番組を見るときに、見方も変わってきて、生活の興味の幅も広がっていくのではないかという感想をもった。

・子どもたちの声がはきはきと聞き取りやすく、字の大きさなどが工夫されていて見やすい情報になっていた。映像で残すだけではなく、直接人に伝えることをやってもよいのではないかと思った。

【指導助言】

・提示授業から、ICT 機器についての職員研修が充実し、普段の授業でも ICT 機器を活用していることが分かった。

・本分科会では活発な意見交換ができた。各校で、ICT 機器の活用方法だけでなく、学校全体で ICT 機器の活用を推進していくための計画作りに役立ててほしい。

・１１月１６日の事前研究会から、導入が非常にコンパクトになっており、生徒の様子から指導内容や手立てを評価して改善していることが分かった。

・導入で提示された増田町観光協会会長からのビデオメッセージを見た、生徒の学習活動への期待感は良い。

・会長から、具体的な活動に活かすことができるような「○○のような映像をお願いしたい。」といったメッセージをもらうことができれば、会長の言葉を基に、生徒が会長の思いを汲み取り、めあてを設定していくという活動もできたのではないか。生徒自身が課題を設定し、その解決のために学習に取り組むことで、より生徒の学びの実感につながったのではないか。生徒の考えを基に、生徒と一緒になってめあてを作っていくということが大事である。

・できた映像を見合う場面を充実させ、みんなで考え合い、意見交換しながらより良い映像を作る過程を大切にすることで、より生徒に力が身につくのではないか。

・映像制作の活動場面では、チェックポイントが非常に有効な手がかりになっていた。生徒が見る視点がはっきりしていたことで、ペアになった生徒が相談しながら映像を作ることができていた。チェックポイントや、絵コンテなど、生徒が参考にしている資料が、ICT 機器の効果を高めていた。
・iMovie を使用したことで、相談し、試行錯誤しながら映像制作をすることができた。生活単元学習に合った活用の仕方だった。
・歴史グループの相談場面で、教師が B さんに、自分の考えを相手に伝えるよう促していた。自分の考えをもち、相手に伝えたり、相手から意見を聞いたりする過程が大切である。そのやりとりをしっかりしていたことが、振り返りや生徒の学びの実感につながっていく。
・できた映像を見合う場面では、事前研の授業よりも時間が確保されており、生徒から十分に意見を引き出すことができた。自分の考えを説明するという言語力は各教科等の指導のベースとなる資質能力であり、個々の生徒に応じてどこまでの言語力を求めるかということを、教師が明確にもつ必要がある。
・電子黒板で共有している画面を見ながら、他者からの意見を聞いてやり取りしながら映像を修正していくことで更に言語力を高めることができる。
・振り返り場面は、生徒自身が何を学んだかを次の学習につなげる上で大事にしたい活動である。本時の振り返りでは、学習したことに留まっていた。振り返りがうまくできなかった場合も、教師が良かったところを、生徒に話して教えたり、電子黒板に直接書いて伝えたりすることで生徒の学びにつながる充実した指導になるのではないか。
・ICT 機器を活用した振り返りのあり方は、各校でも模索している部分だと思う。より主体的な学びとなるよう、生徒が期待感をもって授業に臨めるような振り返りを各校に模索してほしい。
・生徒の主体性は授業づくりのキーワードであり、「教師が教える」だけではなく、「生徒自身が学び取っていく」という授業づくりを目指してほしい。

公開研究会　分科会３（高等部）記録
授　業　者：水谷智子、古関綾子 分科会司会：熊谷淳晴　　分科会記録：土田優子 指導助言者：進藤拓歩（秋田県教育庁特別支援課指導班指導主事）
【授業者から】 ・高等部２年生職業では、「働く人の生活」として、年間を通して「働くために必要な力」とは何かを考える学習をしている。 ・働くために必要な力を、知識や技能だけでなく、職業生活に必要な力と捉え、「健康管理」「金銭の管理」「余暇の充実」「職場でのコミュニケーション」という四つのカテゴリーに分けて学習している。 ・生徒が自分の生活を振り返り、自分自身の問題として考えることができたらと考えている。 ・本時では、「健康管理」について焦点を当て、「睡眠」について考える学習を行った。 ・単に「睡眠は大切である」というだけでなく、睡眠がなぜ大切なのか、先輩たちはなぜ大切にしているのかについて、自分の生活と比べながら、実感として捉えてほしいと考えている。 ・ロイロノートの使用に関してのメリットは２点ある。１点目は、学習で「書く」ということに苦手意識をもったり、うまく書けないと何度も書き直すなどこだわりをもったりする生徒がおり、「書く」ことに時間を費やし、授業の本題に迫ることが難しい生徒の「書く」負担を減らすことができるということ。２点目は、タブレット型端末を使用することで、操作や機能に関心をもち、授業への集中力が高まったり、発表ではなかなか出ない考えや意見が出やすかったりするということ。 ・本時について、指導案と実際の指導で、生徒の考え方や学習の流れを考えて学習活動の順番を変えた。 ・本時は、めあてと学習の流れ、まとめはホワイトボードに掲示し、インターネットでの検索や、自分の考えを述べるときは、ICT 機器を使用するという、ICT 機器と従来の指導方法とを組み合わせた。 ・生徒の理解度、考えの傾向などに配慮すると、ロイロノートの使用に加えて、手元の学習資料、全体を俯瞰する学習資料の提示の組み合わせが効果的である。 ・まとめの部分では、指導者が求めている答えをなかなか引き出すことができず、将来の職業生活と、現在の学校生活とをつなげることの難しさを感じた。 ・この難しさを解決するための ICT 機器の効果的な使用についても、指導者側でさらに考える必要があると感じている。
【参観者から】 ○ロイロノートを活用したことによる記入する時間と考える時間のバランス、時間配分について ・「考えましょう」「入力しましょう」というメリハリがどのくらいだったか。 ・思考する部分はどこだったのか分かりにくかった。 ・例えば、自分たちが検索して調べたものをもとに、少し手元でそのスライドショーの空欄のところを考えてみるとかがあれば、先生とのやりとりも引き出せたのではないか。 ・何分考えてみましょうということで、時間を設定していることをはっきりさせるとよい。 ・もう少し子どもたちに考える時間があればよかった。ロイロノートのシンキングツールとしての使いどころをもう少し変えてみてはどうか。 ・生徒たちが具体的な理由とあとどうすればいいのかという行動を考えて、それを言って、他の人の意見とくっつけていくという活動の方が、学習の広がりと深まりが出たのではないか。 ・養護教諭の話、絵本でもいいから参考となる文献、医師の話など、いろいろな種類の考えるネ

タがあればよかった。
・タイマーを使用して、考える時間と記入する時間を示すと、授業にメリハリが生まれるのではないか。
・生徒たちから出たものをもとにまとめていって、最終的に結論を生徒たちで出せるという流れになればよかったのではないか。
・他の人はこういう風に考えてるということを簡単に共有できるアプリだと思うので、友達との意見を、自分の意見と比較するような時間を含めて考えることができれば、もう少し考えが深まっていくのではないか。
・睡眠がなぜやっぱり大事なのかということを、そこから自分の生活にフィードバックしていくところが大事だと思うのであれば、そこに時間を割いていくとよい。10 分だけ考えてやってみようという問いかけもいいのではないか。
○ロイロノートが思考を引き出す手段として活用されていたか。
・苦手なことに時間をかけるのではなく、思考の時間を確保するという意味では活用されていたように思う。
・もう少し使い慣れると、やりとりがもう少し生まれるのではないか。
・大人よりも生徒の方が興味をもって取り組んだり、普段以上に意見を活発に出したりする様子から、効果があったと感じる。
・調べたり、たくさん意見が出たりしたことから、ロイロノートを使うことで思考を引き出す手段として適していたと思う。
・考えるときに一番分かりやすいのは比較ではないか。比較して判断する、ということを視覚情報としてロイロノートで提示できるとよい。
・例えばすごく眠そうな人の写真や、こんな場面どうだろうという動画をつけてみるなど、そういう少し広がった使い方もできたのではないか。
・まとめる、比較するというのがロイロノートの一番いいところなので、いっぱいある材料を似ているものにまとめてみる、どうまとめられるか考える、というのを取り入れられるとよい。
・タブレットで自分の考えを表現することに関して、意欲が高いと感じた。
・友達の意見と比較したり、つなげたり、付け足して考えていくというような思考を深める方法としてこの後使っていけると、授業のまとめなどにつなげていきやすくなるのではないか。
・はっきり目で見て、考えて、わかりやすいのは、比較するというところから始めるのがよいのではないか。
・共有ノートはお互い補い合いながらシートを作っていく機能だと思うので、活動の中身によってはそれぞれのロイロノートの機能を使い分けられればいいのではないか。
・共同編集できること、待ち時間なしで他の友達の考えが自分の手元に入ってくるというロイロノートのよさを最大限利用することが、一人の考えから広げていくことにつながるのではないか。
・話合いの活性化のツールになればよい。
○情報機器の配置の改善、情報の提示の仕方
・電子黒板をどれぐらい、生徒たちが協同できるように使うかがポイントではないか。
・睡眠のところで提示する情報として、インターネットでは情報が多いので、まずは書籍のように情報の範囲が決まっているもの、生徒に馴染みのあるような紙ベースの資料でも調べることができたのではないか。
・情報量が多いと感じたので、情報の精選は大事だと思う。
・授業のメインとなる活動のところで使う電子黒板を真ん中にもってくるとよい。
・ロイロノートに集中するというのも１つのやり方ではないか。

・ホワイトボード二つと電子黒板があったが、分かりやすい配置にすることで、生徒の情報処理としてどこを見るのか、どこが大切かが分かりやすくなる。
・生徒が比較や整理がしやすいように、スライドで消えてしまう情報をプリントアウトして提示すると、思考の流れやゴールを生徒たちも考えやすいのではないか。
・使用してほしいときには「使ってください」、見てほしいときには「黒板を見てください」など細かく生徒に指示した方が、生徒が集中しやすい環境をつくることができるのではないか。
・手元でタブレットを見て、顔を上げたところに電子黒板があって友達の意見を見られるというシンプルな情報を共有できるとよいのではないか。

【指導助言】

1　「職業科」で大切なことについて～学習指導要領、解説より～（４点）

・実践的、体験的な活動とのつながり
・生活を改善しようとする実践的態度
・自分で課題を設定し、解決策を考える
・解決策を考える際に協同による課題解決

2　ロイロノートだからこそできることについて

○ロイロノートのホームページより
・双方向の授業であること
・思考を可視化できる
○授業より
・書く負担を軽減すること
・集中できること
・意見を出しやすいこと
○協議より
・思考を促す
・学んだことを蓄積していく

学校教育の指針より
ICT 活用の視点が反映されている。

協同による課題解決を考えた上で効果が見込まれる。

ロイロノートだからこそできるということを授業の中でしっかりと発揮させていく。

3　授業について

○課題を見出すにはどういった工夫があるか。
・睡眠とそこからの仕事との関わり、つながりを自分の課題として捉えるということがポイントだった。
・課題を見出す、自分のこととしてこの課題を捉えるということは、この単元、授業を成功に導くうえで非常に重要なポイントだった。
・実習とこの授業を行う時期も考慮するポイントになるのではないか。
○ロイロノートを生かして
・様々な意見、例えば睡眠不足の影響として、健康の問題や様々な問題が取り上げられたことを、それを仕事という視点で捉え直す、そのような協同で行う活動があっても一定の効果があったかもしれない。
・タブレットを見せ合って自分の意見を表現する、電子黒板で３人で共同で解決してみるというような場面も考えられたのではないか。
○生徒が今、思考が始まったなというその瞬間の先生の発問について
・その日の授業のめあて、目標に直結する主となる発問（主発問）を改めて考えておく。
・主発問を考える、そしてそれを授業の中で発するということも情報機器の活用、ICT の活用という上では非常に重要になるのではないか。

※生徒が課題を見出すということ、そこから教師の発問によって生徒の思考を促していくということもこれからは連動して大切なことではないか。
※各学校においてこの ICT 機器、そしてこの情報機器の活用というところをもう一度確認することも有効なのではないか。

あ　と　が　き

ＧＩＧＡスクール元年と言われた昨年度から、本校は県委嘱の「ｅ－ＡＫＩＴＡ　ＩＣＴ学び推進事業」のＩＣＴ活用推進モデル校として、授業でＩＣＴを積極的に活用してきました。今年度は研究テーマを「学びを実感し、主体的に学ぶ児童生徒の育成～ＩＣＴを効果的に活用した授業づくりを通して～」とし、昨年度のモデル校としての取組をより充実させ、ＩＣＴを効果的に活用し、児童生徒が「学びの実感」がもてる授業づくりを目指しました。併せて、１２月には公開研究会をオンラインで開催することができ、授業以外においてもＩＣＴを有効に活用することの手応えを感じることができました。公開研究会には県内特別支援学校の皆様にも多数御参加いただき、授業改善に結び付く御意見をいただくとともに、各校のＩＣＴを有効に活用した取組を紹介いただき、授業での活用に新たな気付きを得ることができました。

ＩＣＴ機器は児童生徒の興味関心が高く、どの児童生徒も楽しんで活用する姿が見られます。それだけに、指導者が「どの場面で、どのように使うのか」とねらいに沿った活用場面と方法を明確にしないと、ただ楽しかったという活動に終わってしまう危険性も持ち合わせています。各学部の授業研究会では、「授業のねらいが達成されるための使用であったか」といった点や、「児童生徒の苦手さを補う使用がされていたか」といった点について、繰り返し協議がなされました。ＩＣＴを使用することは目的ではなく、手段であるということを確認しながら研究を進めた１年でした。授業づくりにおいては、「学びの実感」がもてるように「単元全体を見通す」工夫、「学習の意味や意義を理解する」工夫、「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方」の工夫の３点の共通実践事項を掲げ、児童生徒が「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになったか」が分かる工夫をし、検証を重ねました。学びの実感は、自分の成長を確かめることで得られるものと思います。共通実践事項に取り組むことで、児童生徒は１時間１時間の学びを自分事として捉え、試行錯誤しながら課題に取り組み、自分の成長を実感していくことができました。その過程で児童生徒自身がＩＣＴ活用の有効性を実感し、課題解決のためにＩＣＴをどのように活用するかを考えたり、紙に書くか音声入力かキーボード入力かなど自分で表現方法を選んだりと、自分に合った学び方、課題解決に必要な活用方法を選ぶことができるようになってきたことは本研究の大きな成果ととらえています。ＩＣＴ活用が児童生徒一人一人の個性を生かし、学びの実感を得られるものになるよう、今後も検討を重ねたいと考えています。

最後になりましたが、本紀要及び令和４年度「ＩＣＴ活用事例集」には職員一人一人の授業づくり、ＩＣＴ活用の工夫が凝縮されています。御高覧いただき、忌憚のない御意見・御指導をいただきますようお願い申し上げます。

教頭　　阿部　裕子

研究に携わった職員（令和３年度）

校　長　　松　井　克　彦　　教　頭　　阿　部　裕　子　　教　頭　　煙　山　正　信

事務長　　富　樫　一　男　　教育専門監　菅 原　咲希子

（小学部）

谷　口　和　江
岸　　英　子
熊　谷　淳　晴
高　山　知　子
照　井　聖　子
若　生　友　樹
佐　藤　深　雪
大　川　浩　平（研究部）
佐々木　麗　子
森　　愛　子
小　西　美　穂（研究主任）
菅　　優　子
佐々木　詠　吏
髙　橋　由　衣
高　橋　　栞（研究部）
遠　藤　千愛美
高　井　哉　子
鈴　木　圭　太
佐　藤　　理
鎌　田　大　凱
落　合　咲　子
小　野　敬　子
菅　原　美奈子

（中学部）

高　橋　知希子
今　野　洋　美
伊　藤　由　紀
藤　田　亜貴子
会　場　一　幸
小　西　ゆり子
堅　持　夕　子
遠　山　成　子（研究部）
熊　谷　道　大
後　藤　ゆり子
柴　田　秀　幸（研究部）
高　橋　裕　子
守　屋　　美
大　沼　美和子
須　田　　裕
丸　田　勇　帆
小　椋　トモ子
鈴　木　　徹
安　達　由美子

（高等部）

時　田　　航
佐　藤　　恵
朝　倉　知　司
籠　山　　誠
池　部　和　美
水　谷　智　子
高　橋　静　香
近　　亜希子
柴　田　　豪
青　木　真知子
菊　池　牧　子
佐々木　　祐
遠　藤　奈津子
岩　澤　有希子（研究部）
内　藤　聖　子（研究部）
藤　平　裕　太
工　藤　　彩（研究部）
菅　生　真由子
小　玉　奈　月
佐々木　慶　明
佐々木　　修
沓　澤　直　樹
山　本　智栄子
中　川　浩　孝
水　田　勝　久
古　関　綾　子
守　屋　充　敬
赤　坂　千　春
川　越　佳　子
和　賀　典　子

研究に携わった職員（令和４年度）

校　長　　阿　部　純　一　　教　頭　　阿　部　裕　子　　教　頭　　煙　山　正　信

事務長　　富　樫　一　男　　教育専門監　菅 原　咲希子

（小学部）

谷　口　和　江
岸　　英　子
小　番　俊　和
高　山　知　子
照　井　聖　子
佐　藤　章　子
若　生　友　樹
佐　藤　深　雪
大　川　浩　平（研究部）
佐々木　麗　子
森　　愛　子
小　西　美　穂（研究主任）
菅　　優　子
髙　橋　由　衣
高　橋　裕　子（研究部）
高　橋　　栞
遠　藤　千愛美
今　　七　海
小　山　耕　大
鈴　木　圭　太
小　玉　奈　月
山　崎　真由美
鈴　木　圭　太
佐　藤　　理
菅　原　美奈子
安　達　由美子

（中学部）

高　橋　知希子
伊　藤　由　紀
堅　持　夕　子
佐々木　涼　子
後　藤　ゆり子
柴　田　秀　幸（研究部）
佐々木　詠　吏
守　屋　　美（研究部）
高　井　哉　子
大　沼　美和子
辻　嶋　真梨子
須　田　　裕
小　椋　トモ子
鈴　木　　徹

（高等部）

熊　谷　淳　晴
佐　藤　　恵
朝　倉　知　司
木　村　栄　一
小　西　ゆり子
土　田　優　子（研究部）
池　部　和　美
水　谷　智　子
高　橋　静　香
柴　田　　豪
小棚木　明　子
戸　澤　寛　子
青　木　真知子
菊　池　牧　子
佐々木　　祐
遠　藤　奈津子
岩　澤　有希子（研究部）
内　藤　聖　子（研究部）
藤　平　裕　太
菅　生　真由子（研究部）
佐　藤　千　尋
佐々木　慶　明
佐々木　　修
沓　澤　直　樹
山　本　智栄子
中　川　浩　孝
佐々木　美穂子
古　関　綾　子
守　屋　充　敬
赤　坂　千　春
川　越　佳　子
浅　利　政　子
小　野　敬　子
和　賀　典　子

発行年月日　　令和５年３月２０日
発　行　所　　秋田県立横手支援学校
〒013-0064　　横手市赤坂字仁坂 105 番地 1
TEL　0182-33-4166　FAX 0182-33-4266（小・中学部）
TEL　0182-33-4167　FAX 0182-33-4277（高等部）
Email:yokote-s@akita-pref.ed.jp
http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp